剣客往来

早乙女貢



春陽文庫

京の六条の郭で通りかかった被衣の女と供の女に難くせをつけ酒のさかなにせんとした無頼浪人茨組の面々は、五尺の長刀をふるう佐々木小次郎に手痛いめに合わされた。

茨組の頭領格のあばれ者は、武州大島村の生まれで、徳川の武将本多百助信勝の下郎をつとめる大鳥逸平であった。逸平は茨組のために佐々木小次郎と対決せんとした！

賀茂の川原で興行する女歌舞伎幾島丹後一座の小屋に現れた逸平は、折から見物にきていた京八流吉岡憲法道場の次男吉岡伝七郎と争ったが、吉岡の助太刀佐々木小次郎のために川中に切って落とされた！　重傷を負った逸平を救ってくれたのは作州浪人宮本武蔵であった！　ご存じの剣豪が次々に登場する波瀾万丈の物語のおもしろさ！　剣豪小説の決定版！

装画＊東 啓三郎

春陽文庫

剣客往来

早乙女貢



春陽堂

目次

紅におう……二
若衆首……三
京の化粧水（べにしみず）……一四
嫉み刃（やいば）……四
河原の女……五
京流くずし……六
血とどろ……九
恋ぞいのち……一五
霧の中……一七
おぼろ影……一八
恋は炎か……二三
朝妻舟……二四
夜ふかく……二六
暴れ太刀……二九
湖賊の宴……二九
花はしおれず……三〇

剣客往来

紅におう

1

灯が入ると、街は急に色めいてくる。

残暑の日に焼かれてしおれていた花が、ひと雨あびたかのようであった。紙までうす紅に染めた朱骨の掛け行灯のほほえみが、日昼にはむさ苦しいだけののれんやべんがら格子を風流に浮きたたせる。風もないのにあやしく揺れるのれんから白い手が客を誘うのである。

「――やっと、日が落ちよったわい」

無粋な声とともに、大きなあくびをした男がいた。

遊女街のとっさきにある『竜田野』の二階だ。

大きくのびをした手をぼりぼりかいて、

「やっぱりなんやな、夜にならんことには、郭遊びの気分が出えへんの」

座には十人ばかりいた。いずれも、こそでの模様や仕立ては派手だが、だらけたかっこうで、寝そべったり、うちわをつかったり――昼間から、ごろごろしていたのである。

「郭遊びとは大きく出たな」

半裸でひじまくらしていた男が顔をあげた。
小鬢が、一つかみペロリとはぎとられたように、生々しい刀傷で、顔の半分、ことに右目が斜めにつぶれたようにひっつれているのがすさまじいが、声は優しい。
「酒なく女なく、腹っぺらしていて何が郭遊びだえ。これじゃあ、五条大橋のたもとと大差はないわえ」
「橋たもとは、そらなんやね？」
別の男が言った。脳のめぐりの遅そうな愚鈍な太りかたをした男だ。
「知らんのか、あそこには四六時中乞食がいるわな」
「何いうてけつかる。名誉ある武士と乞食を同じにするとは言語道断」
「立つな、なめくじら、汗が出る」
うだったような声をだしたのは、下帯をゆるめて風を入れていた男だ。そのうしろ肩が五寸ばかり、不気味に口をあけている。首すじに吹きだした汗が吸いこまれるように、赤黒いタテみぞに流れこんでいた。
「ははは、遊女屋にいんねんつけて、名誉もへちまもあるめいの」
「まったくだ、関ガ原の名誉が泣くわな」
鍾馗さまのようなさかひげのみごとな男が、四尺ちかい野太刀をなでて、慨嘆した。
「近ごろとんと人を切らんで、こいつが夜泣きしおる」
「よせよせ、名誉だとか、刀だとか……夜泣きは夜泣きでも女のほうにせい」
ひっつれの顔をにたりとさせて、

「これだけ、ガン首がそろっていて、一人も女にありつけんとは情けないの」
「まったくだ」
と、また鍾馗さまが合点した。
「この身は遊女屋にありながらのう、きらわれもんじゃて」
「そないあきらめたもんでもないて」
蛞蝓の五郎蔵が、ぬらりと分厚なくちびるをなめて、
「御所望とあらば女を手に入れたろか」
「ほう、なめくじらでも女をモノにできるとは知らなんだ。なめくじらでできるなら、われらもできようがの」
「請け合いはせえへんが」
またぬらりとなめて、蛞蝓は、ふん、と鼻を鳴らした。
「昔から、そら、一ひま二金三男、と申すさかいな、男っぷりは三の次」
「ははん、ひまか、ひまならわれらも持ち合わしているが」
「とは申すものの、やはり、暇人かならずしも女ができるとは決まっとらへんで……」
と、戸外を見おろした蛞蝓が、牛のようにうなった。瞠目してぴたぴたとひざを打った。
「来よった、来よった」

2

「何が来た?」

と、鍾馗ひげをつばしてひねりあげていたのが、「借銀とりかえ」
「弁天さま」
「なに！」
指がとまった。
「良きかな良きかな、ふたり弁天、玉の膚がおいでや」
「くるとは？」
と、これはひっつれ眼である。
「素人女が郭に入ってくるのか。どりゃ？」
と、伸びあがった。みんなぞろぞろ立ち上がった。
「ゆる褌はうしろに下がれやい、下からのぞかれるぞ」
「見せてやるさ、後家にゃ功徳じゃ」
「後家かどうか、人妻でも亭主を乗り換えようて」
その戯れ口が、うめきに変わった。
「ううむ、美形……」
口の悪い連中が、期せずして漏らした言葉である。
郭は三筋の町から成っていて、だから、源氏町とか、三筋町とか、または柳にちなんで柳町とか呼ばれていた。六条西ノ洞院の東がわである。
その大門口は西ノ洞院川に面し、わずかに湾曲した小橋がかけられていた。いましもぞめきの客にまじって橋を渡り、大門から入ってきた二人の女性に視線は集中した。

主従とみえ、被衣したほうは一目で金目と知れる衣装で、天竺牡丹を染刺繍した絹縮みを、やや小太りのからだにまとって、帯ははやりの南蛮更紗。男たちの声に、被衣をあげて見上げたほおもゆたかで、男好きのする顔だち。

「あの女、おれが一番乗り」

五郎蔵がそう叫ぶと、なかまをかきわけて階下へ走り降りた。四、五人がそれにつられて降りた。

「わしゃア被衣せぬほうがよろし感じやねん」

愚直な太った男は、にこにこして目を細めている。

その女は、主人のひき立て役のゆえであろうか、もえぎ小紋に染めた帷子で、帯もじみなものをしめていたが、きわだった美貌とあわれにほそい姿態が、腰元にしてはみやびやかであった。

「女房にするなら、わしもあれがよか」

九州の少弐の遺臣で入道頭の胸毛の濃い男が相づちをうった。

「こいつ、気の早い」

鍾馗さまが豪放に高笑いして、

「したが、遊ぶなら天竺牡丹のほうじゃぞよ。おりゃ一石二鳥、いやさ、両手に花とゆこう……」

そのあいだに、もう蛞蝓の五郎蔵が声をかけていた。

「どちらにおいでかね」

女は一瞥した目に怒りを見せて、被衣をふかくした。

小急ぎに通りぬけようとする前に、ひっつれ眼が閂のような刀を鞘ごとぐーっと前に突きだ

した。
「ははは、郭の案内なら、やつがれがひき受けましょうかの」
「……」
「郭の中なんだら、おなごの見るもんやあらへん」
蛞蝓は素早く手を出した。女の手を握ろうとした。無言でふり払う。そのそでをさっとつかんで、
「どや、お天道さんも寝たよって、われらも寝よ。こんころもちええ閨に案内するで」
女はもがいた。五郎蔵の手が被衣をつかんだので、ゆたかな顔がむきだしになった。
「あや！」
絶望的に女主人は叫んだ。腰元の名だったのだろう、うしろで小さくなって震えていた彼女も勇を鼓舞してとびだした。
「何をなされます！」
「何もせえへん。いいこと教えたろうちゅうだけやね」
「無礼なことを。お放し！」
「おっと、ねえや」
と、ひっつれ目があやを抱きとめた。
「ひとのことにかまわず、おれはどうだ」
「あ、放して！」
「これでも戦さえ始まれば千石とりになれる武士だぞよ。一国一城の主も夢ではない。すりゃ、

おまえは奥方」
「けがらわし！」
「なんの、男と女じゃもの。さては何もしらんの、ふふふふ」
青いつぼみの固さを思わせる胸に、つと指がのびる。
あやは身をよじった。
「つう！」
大の男が、童のような悲鳴をあげてとび下がった。
つめを立てたわけでもない。ふり放されたあや自身が不可解な面持ちだったが、
「うぬ、なにやつじゃ！」
ひっつれ目は、手の甲をおさえて、あたりを見まわした。
なかまには彼が霍乱を起こしたようにしか見えず、
「どうした、首抜き」
のぞきこんだとたんに、被衣の女を抱きすくめていた蛞蝓の五郎蔵が、
「うわっ」
のけぞって、女を突きとばした。肩を押さえて転がった。あやが主人に走り寄って、
「さ、この間に」
と、逃げようとするのを、
「どっこい、そうはさせぬて」
鍾馗ひげがとびかかった。

「果報は寝て待て、ひげの御利益……ぎゃっ」
語尾が、何やら砕ける音とともに、宵闇にはねとんだ。
そのときになってようやく無頼浪人たちは、影の敵の存在に気がついたのである。
「あ、あそこだ」
『竜田野』とは小路一つへだてた『桔梗』の二階から、杯など投げたのはだれだというような顔で杯を含みながら浪人ものが見おろしていた。店々の桃いろの灯に、女に見まほしい端麗なおもてが浮かんでいる。

3

女たちも同時に見た。
「ま、おきれいな……」
被衣の女は、身の危険も忘れて、思わず口走った。
絵からぬけでたような——と言いたい美青年武士であった。
はらりと額に垂れた前髪も、油をぬったようにあでやかなら、冷たいくらいに整ったおもても、化粧したかのよう。杯を持つ手も白い。
「あ、あの生っ白いのが」
「おそれおおくも、大蟇疣右衛門の面体に傷つけたな。こりゃ、青いの、おりてこい」
「そうとも。うぬは隠れてものを投げるとは、武士のすることかは」
血の滴る手をふりまわして、ひっつれ目もわめいた。

その浪人ものは、にやりとしたようである。
「――郭でよその女を慰むことこそ武士のすることかは」
「ぬかしたなっ」
「口があるのでの」
「く、く、く、口を、その口を、八つ裂きにしてくれよう」
反っ歯の目だつ男だった。手につばして刀をひねると、たたっと『桔梗』へ駆けこもうとした。が、三間と走らぬうちに、
「徳利に口あり」
そでがひるがえった。陶徳利が矢のようにとんだ。ねらいあやまたず、ぐわっと反っ歯に命中した。顔面血を吹いて、もんどり打つ。
そのときはもう色街は時ならぬ騒ぎでごった返していた。笛鼓に浮かれたそめき客も、化粧したての遊女たちも、習い覚えの三味線持ったまま、あるいは、あげまきしかけたままの頭で、べんがら格子のうちに目白おしになっていた。
素人女が、野卑な辱めを受けているのは、遊女にとってむしろこころよい見ものだった。
そこへ、この美青年のとび入りである。女たちは黄色い声をあげた。
「まあ、いろお小姓……」
「森蘭丸さま生き写し！」
「あれさ、蘭丸さま御存知とは、こなさんいくつ？」
「あいな、十六」

「あほうらし。本能寺が焼けたは二十何年か昔のことやし」
「母さんのおなかの中で蘭丸さまと会いましてん」
「あほうばかり言わんと、見イなア、客をとるならあのような殿御でほしいわえ……」
その美青年は、無頼浪人たちを見おろしてすっくと立っていた。
「――うじむしども、男なら男らしくせい」
と、顔に似合わぬするどい声で、
「いやがる女を手込めにしてなんとするぞ」
「男らしく女を手込めにするのや」
太ったのがぼそぼそとこたえたのが聞こえたらしい。
「よくよくのうつけぞろいだな……」
そのそでをひたととらえたのは、近ごろとみに嬌名のあがった室君太夫である。十七という花の香もさかりの年ごろで、扇屋の吉野太夫を超える人気だった。
「およしなさんせ、狂人に刃物とはあのような人々を申しまするよって」
「ふふふふ、狂人か。なるほど、狂人面ばかりだ」
「茨組とやらいうて、郭のみか、京では鼻つまみ者でおざりますわいナ」
外では、もう蛞蝓や大蟇が、そこらの荒なわで乱髪どめのはち巻きしたり、刀の目くぎをしめしたりして猛っていた。
「おりてこい、女おとこ」
「伊達な前髪剃り落としてくれべい」

「そんあとは牛の糞ひねりつけて、ほいおまけ」
「男か女か、男なら、ちゃんと切って女にしてくれべい。それとも、大事なものがないか」
さすがに、美青年の顔いろが変わったようである。
「室君」
「あい」
「太刀を」
室君太夫が拒もうとしたが、美青年のけわしい表情がそれを一蹴した。美しく切れの長く、まつげの濃い目に、まがまがしい光が点じられた。
「太刀を、早く」
いらだつ声に、禿がふたりで長いたもとでくるむように持ってきた。
鹿角の刀架も不安定なほどの長い太刀である。柄頭から鐺まで五尺近い。
美青年がむずとつかむと、禿たちはおびえておもてをおおう。長いたもとでチャラッと鈴が鳴った。そのさわやかな音いろすらも己をたのむに強い青年の四肢にみなぎった殺気を鎮める役に立たなかった。
「行くぞ！　うじむしども」
言下に、ひらりと欄干をまたいだ。
足下は傾斜の急な屋根廂である。見ていた女たちから、悲鳴ともつかぬ嬌声がはしった。
「うぬら踏みつぶされぬ間に耳の穴かっぽじって聞くがいい。おれは越前のくに浄教寺の産、佐々木小次郎」

ひゅっと、刃風が宵闇を裂いた。小次郎の優美なすがたは春の野に舞う蝶のように――が、白面をかぶった残忍な剣鬼の一颯、二颯、たちまち噴血が紅灯をにじませた。

「小次郎さま！」

悲痛に叫んで、室君太夫がよろめき倒れるのが見えた。

若衆首

1

「――こら、おとなしゅうせんかい、疾風之助」

荒なわをまるめたやつで、べたっと、ひら首を殴ると、ばしゃっと、水をはねて、連銭葦毛はたかだかといなないた。

「なにがヒヒーンだ。いい気持ちならいい気持ちらしく、おとなにしてろ。洗ってもらって暴れるやつがあるけえ」

逸平はたっぷり水をふくませて、荒なわだわしで胸のあたりをごしごしこする。

のっそりと、その盛りあがった肩に『疾風』は鼻づらを乗せたり、軽くかんだり――

それは慣れきったしぐさだが、ときどき、びゅっと漆黒のしっぽをふったり、後脚でざぶっと水をけったりする。

『疾風』は金蠅がきらいだ。虻もきらいだ。近くにきただけで追っ払う。

「こらっ、何遍いうたらわかる、癇性なやつだ。殿様野郎にそっくりだ。なんだと、違う？　あ、そうか、けんか好きなところも大鳥逸平さまにそっくりだって？　へへっ、うれしいことをぬかすじゃねいか」

ひげのざらざらしたほおを鼻面にこすりつけて、

「おいらもおめえが大好きだがよ、いかんとも面が長すぎら。半分たア言わねえ、せめて三が一ぐれえに短くなんな。そうすりゃ女郎買いに連れていってやらアな」

あたりにだれもいない。素っ裸の逸平は、透明な水に腿まで浸して『疾風』を洗いながら、なかま扱いで話しかけている。

愛馬、といっていいかどうか。

この『疾風』は逸平のものではない。主人本多百助信勝が大枚黄金五枚出してあがなった南部の三歳駒。耳の張り具合といい、鬣のいろつや毛並みといい、四肢と胴体のバランス——申し分ない逸物だ。

百助信勝の父は戦国三兎ロとして豪勇の誉れ高い百助信俊である。膂力衆にすぐれ、魁異な容貌の点でも亡父におとらぬ信勝は戦国武将の典型として騈馬を好んだ。

平時や馬ぞろえにはむかないが、戦場ではいかなる大軍でも、火攻め矢攻めにひるまず突っ込む『疾風』は、好みに合致した。百助信勝が、大鳥逸平のような男を家来の端においてるのも、その例にもれない。

いささか浅慮のそしりはまぬかれないが、この時代の武士の特質を持つこの主従の関係を知るにかっこうな逸話がある。

それは、逸平がいつも背中に銅輪のはまった赤樫の木刀とぶっ違いに差している長ギセルだ。

少し前から奇妙にタバコが流行した。大名旗本分限者はいきを凝らしたキセルを供にささげさせて連れ歩くというバカバカしいことに誇りを持った。あるとき、馬を打たせていくうちに、百助信勝は、いいにおいがすると思ってふりかえった。

なんと、逸平が平然として主の珍宝のキセルでタバコをくゆらしているではないか。

驚くまいことか、怒るまいことか、

「ここな僭上者がッ」

逆上して信勝、鞍から抜き討ちに切りさげた。が、逸平は刃の下はくぐり慣れている。ひらりととびさがって、

「やあ、御免候え」

木刀で、カツンと太刀を受けとめた。

キセルはそのままかみはさみ、小手かざしに木刀で受けたまま、さもうまそうに紫煙を吐き出している。

その悠揚迫らぬ不敵な面がまえに、さすがに信勝は豪傑だけあって寛闊に笑いをとばした。

「無礼千万な下郎だが、肝のふといところが気に入った。そのキセルはくれてやる」

吸い口が汚れたという潔癖症からではない。そのころは衛生思想の欠除はいうまでもないが、そんな神経の細かさでは生きていけなかった時代だ。来訪者にキセルを貸してのタバコの馳走が平気で行われていたのである。

彼は三日前から伏見に来ていた。むろん、信勝の供をしてである。伏見は徳川家康の二男で結

城と称する越前宰相秀康が預けられていたが、八月の末、二条城から大御所は伏見に入った。関東へもどるまでは伏見城が気に入って——というより、大坂への示威もあって滞在するらしい。

今日はこの八丁畷に遠乗りに出て、百助信勝は下鳥羽の法伝寺へ寄った。住持と碁を囲んでいるあいだ、『疾風』のあかをかいておくよう命じられたのである。

「伏見も退屈だなア、疾風之助。いっそひと戦あると……おや？」

『疾風』の耳がぴんと緊張した。鼻面を川下へむけた。

においーー

女の甘い膚が風ににおう。

嫋々たる風に乗って、笛の音が流れてくる。そして、小鼓の音が。

2

川の流れはゆるやかである。風もあるかなきかである。

淀川が、賀茂の流れと桂川を合わせるあたり潺湲たる流れに逆らって一艘の船がのぼってくる。

笛、鼓の音はその船から流れてくるのだ。

馬洗う手をとめて見ていると、船はこぎのぼってきた。笛の音が近くなるとともに、おびただしく林立したのぼりの字が読めるようになった。

「——女歌舞伎かあ、あやつら」

なるほど、乗客はほとんど女だ。子供まで女だ。

濃化粧の顔が白い花のように込みあっている。紅や、黄や、もえぎや——花模様のけばけばしい衣装も見えてきた。

何がおかしいのか、きゃあきゃあわめいているのが聞こえてくる。

「おーい、おーい」

女が扇子をふっている。逸平はあたりを見まわした。

「おれかえ？」

逸平と連銭葦毛きり。

「おいでよう、おいでよう」

意味もなく面白がって二、三人が叫んだ。はしゃぎたい年齢だし、商売気もないではない。

「ようし、行くぞう」

ざざっと水をわけて川中へと抜き手をきりはじめた。馬は置きっ放し。直情径行は持ち前だ。むろん、船はとまる気配はない。

「あれ、河童！」

「早い早い、ここまで来たら乗っけてあげるよオ」

扇で舷をたたく、長いそでをふる。たちまち、逸平は舷近くへ泳ぎつくと、女役者たちは好奇の眼をみはってどっと片側へ寄ったから、

「危ねい、あほんだら」

船頭がそれこそ河童のように口をとがらして、

「土左衛門になるやないか。片寄りしたらあかんで」

わーっと女たちが笑った。船頭の言葉ではない。
「やあ、女歌舞伎、船に乗せろ」
泳ぎ寄った逸平の下半身が清冽な水面から透けてみえたからだ。
「あかんあかん、女護ガ島どすえ、そのままではよう乗せんわいな」
「なんでいかん？」
「あほくさ……」
船がひっくり返らんばかりにけらけら笑う女たちだ。
船頭が、
「おまはん、褌せえへんことにゃ、いくらなんでも」
と、櫓に力をこめた。
ようやく逸平も気がついた。暑いし、しめ替えがないから、正真正銘の素っ裸で馬を洗っていたのだ。
「なるほど」
と、立ち泳ぎになって、
「いずれ、あらためて会いに行くぞう」
と、のぼりを見た。幾島丹後一座——かぶき踊り、などと赤地に白く染めぬいてある。
「小屋掛けは京けえ？」
「四条河原においでよ」
「たんとお客を誘うて……」

遠ざかる船から、扇子で半面かくしたのがはすっぱな声をなげた。
「下帯忘れよったら、入れしめへんえ」
どーっと船を揺する笑い声が、八ツ刻の川面にキラキラと砕ける。
「バカぬかしよれ。忘れたんじゃねいわい」
泳ぎもどってくる頭を見て、
「おーい、逸平兄キかあ?」
河原に男が二人立って、手と笠をふっていた。西に傾いた日が、男たちの額と鼻の頭を照らしている。
「おうさ。そっちは猿太に長次かあ?」
「おうおう。急いどくなはれや、天下の一大事」
いよいよ関東大坂手切れか、と逸平は思った。水を切る腕に力がこもった。
ところが、旅支度の——といってもわらじをはいているだけの違いだが——二人が持ってきた話は、彼の気負いをぐにゃりとさせた。
「捜したのなんのって、へえ。三日三晩、洛中洛外、きつねの巣まで捜したが、兄キが見つからなえさかい、弱ったのなんのって」
「まったくだ。こんなところでブラ金でいようとは」
「ブラ金たアなんだ。唐変木め、おめいらと違って主持ちだわな。ところで、一大事たアなんだ」
「それがさ、茨組の一大事」
と、お神楽の長次が話をひきとった。

「ふうん。なんでえ。戦でもおっ始まったのかと思ったぜ。驚かしちゃいけねいの」
「戦と変わらへんがの」
猿太は目をしょぼしょぼさせながら、
「茨組は半分になりよったんね……」
と、三筋町の一件を話した。
被衣の女と侍女に手をだしたことを適当にぼかしたのは、無法者でけんかはするが、盗みをしたり素人の女にちょっかいを出したりすることは、逸平はきらいだからだ。
「ふうん、佐々木小次郎……聞いたことがねいの」
「生っ白いくせにつええのなんのって、てんで歯が立ちゃへんよって、どうで逸平兄キを」
「そうとも。聞き合わしてみたら富田流の小太刀つかいなそうだが、なんと五尺もある太刀をふり回すので、あかんわ。四条の吉岡道場で聞きだしたら、物干し竿の小次郎いうたら大したもんやと」
「ふうん、物干し竿か薙刀の化けものかしらんが、そんな青僧に茨組が泣きベソかかされては黙っとらんの」
ぶるっと武者ぶるいして立ちあがった。しめたばかりの下帯が目にしみるように白い。
「よっしゃ、敵はとってくれよう」
思いたったらちゅうちょも逡巡もない。鞍置くひまも惜しいように、ばっと裸馬にまたがった。
「お、お、このまま行く気けえ?」
「当たりき。お神楽の、おめいは殿様野郎にそうと伝えてくんねい、疾風は逸平が借りますとな」

「だめだぜ、おいら」
「言ってこい、あの杉林の中の法伝寺だ」
鞭もなく手綱もない。鬢つかんで身をふせると、踵の合図で『疾風』は、その名のように、風を呼んで走りだしていた。
「あれ、気のはええ……」
唖然としている間に、連銭葦毛はたちまち灰いろとなり、一点の黒影となり、堤の果てに見えなくなった。

3

逸平が『疾風』からとびおりたのは、洛東妙法院にほど近い細民街の小路の入り口であった。
このあたりは、牛飼いの家族や、扇子売りがいたり、蓮の実の砂糖菓子を作っているかと思えば、いつの間にか位牌作りになっていたりする、その日暮らしの人々が世間の景気のままに流されている吹きだまり。紙漉き小屋でほごの墨気をぬくためにむしろをかぶせた小山の間を通って、逸平は一軒の格子戸に手をかけた。
「いるか、蛞蝓」
「おう」
五、六人の声だった。
家というより納屋のような乱雑な内部だ。壁は剝落したままだし、根太が折れ、天井がぬけている。柱や框に縦横に刀傷がついていたし、破れ屏風と酒樽が同居しているなかに、大の男がご

ろころしていた。

京の町家はムシコ造りで、ことにこうした長屋は昼間でもうす暗く、むし暑い。土間に入って、目をぱちぱちした。暗くて何も見えないのだ。

「逸平だ」

「やあ。どこにいたんだ。捜しまわったぞ」

「伏見から馬をとばしてきたばかりよ」

「馬たあ豪儀だ」

と、外をのぞいて、

「ほっ、名馬だのう、どこでかっぱらったえ」

「なあに、殿様野郎のものさ。無断借用よ……チョッ、変なものを踏んだ」

「あ、気をつけろ。そこらに、虎猫の死骸があったはずだから……」

逸平つまみあげたところだ。

「早くいわねえか。ぺっぺっ、軽いと思ったら、半分はうじだぜ」

目が慣れてくると、寝そべったり壁に寄りかかったりしている連中が、一人として健康な状態でないことがわかった。

汚い布で頭を包帯したり、腕を肩からつったり、べったり膏薬を半面に張っている。布ににじんだ血が生々しく、悪臭を気にするゆとりもないようなうめき声だった。

「茨組がなんとだらしないものよ」

「そういうな。とにかく、大変なやつなんだ」

「若僧だと？」

「生っ白い顔をあなどると、とんでもないことになるぞ。大蟇虎右衛門も、首抜血祇之助も歯が立たん」

作者はふざけているのではない。

むろん、それらが本名であるとはいわない。もう一度、当時の時代相というか、混迷した京の空気を振り返ってみよう。

関ガ原の戦は天下分け目といわれる。これによって戦国時代は終わったといわれているが、それは後世の史家の言うところ、すなわち結果から見た時代論である。

徳川が二百数十年も続くことを見ぬいた者はおそらく一人もいまい。家康自身にしてしかり、明敏な天海僧正にしても同様だったと思われる。加えて、世間は浪人の洪水だ。天下が平穏になれば、政治の才なき戦国武士は無用の存在である。

彼らは等しく戦火を望んだ。大坂には豊家の遺児秀頼がいる。豊家恩顧の大名も少なくない。「戦さえあれば、われこそ一国一城のあるじに」というだけの単純な気持ちだった。

彼らは武士として生を受けた。武士が武士としての本業以外に何をもって生きることができよう。武士にして武士にあらざる世故にたけた者は、すでに手段を弄して明日の栄華の道へもぐりこんでいた。

愚直で真摯な武士だけが、食を求め、主を求め、風雲の去来するを望んで彷徨していた。

そうしたなかで、荒い血を持つ哀れに凡愚な連中が、心中の不平を日夜ぶちまけてあばれたのもうなずける。むろん、武士ばかりではなく、下人の無法者も加わってはいたが。

彼らは手を結び（弱い者ほど集団化する）、茨組を名乗り、あるいは革袴組と称して、

「寄るな、棘に刺されたいか」

と、傍若無人に闊歩し、狼藉三昧に日を送っていた。

茨組という無頼団体はすでに足利末期に存在したが、その流れをくむ者ではない。京童に恐れられた名を称しているにすぎない。

そういう連中だったので、

「いずれは一国一城のあるじに」という抱負のまえには、名を惜しんだ。武士は名を大切にする。本名は秘し、よい加減に恐ろしげな、あるいは珍妙な名を名乗った。中にはあだ名をそのまま自称するようになった者も少なくない。

「よかろう、敵は逸平が討ってくれようわさ」

指し樽をひきよせて、底のほうに残っていた酒を一息に飲み干すと、逸平は、

「その小次郎とやらのあがっていた店どこだ？」

と、立ち上がっていた。

京の化粧水

1

桔梗屋には、しかし、佐々木小次郎の姿は見あたらなかった。

「いない……？　そやつの宿所はどこだえ？」
知らない、と、女たちはおしろいやけのした黄色い首をふった。
「知らぬはずはあるまい。やい、あいかたはだれだ。あいかたの太夫を出せ」
「あてどす」
室君太夫が静かに言った。
「旅のお方どすよって、どこに泊まらはっているか、あてらには皆目……」
「ふうん。隠しているのではあるめいの」
「うそはつけまへんの。うそだとお思いなら、あての目を見ておくれやす……」
六条三筋町は、吉野太夫と室君太夫でもっているといわれているほどだ。おっとりした顔だちには、公卿の血をひいているというわさも否定できぬような気品と、そして遊女の色香があでやかににおっていた。
黒曜石のように澄んだ光をたたえている目は、なにやらまぶしくて凝視できなかった。
「うむ……ま、信用しておこう。色の白いは七難かくすというがね。まあいいやな。ところで、おめえ、おめえの考えを聞こう、およそのあたりはついていないかね」
からだは六尺ゆたかだが、逸平には他の無法者のような陰険さや狡猾さがない。おおらかで、強力を自慢している童のような稚気がある。
室君太夫は微笑した。この裸の男に好意を感じたのだ。
「あての想像どすけど……四条の兵法道場にいっておみやす」
「憲法染めか！」

語尾はもう戸外だった。

京流兵法の名をほしいままにしている吉岡憲法の道場は、以前、今出川で足利幕府の兵法所として栄えたが、足利滅亡以来この一角に道場をひらき、門弟を集めていた。

兵法自慢の者は京をよぎればかならず吉岡道場を訪れる。当時はまだ剣術というものが道にまで高められてもいなかったし、技の巧拙なども重んじられていなかったので——戦国武士の間では、刀法は切り覚えに覚えればいい、とされていた——生計がたたず、先代憲法はかたわら紺屋をいとなみ、そのほうが小成して、かえって『憲法染め』なるもののほうが知られていた。

——確かに……隠しているに違いねい……。

「おられへん」

と、内弟子らしいやぶにらみの男が、木刀を突きたてて怒鳴った。

「へえ。どうもその目つきゃアうそつき野郎らしいねえ。もう一度聞くがね、佐々木小次郎というのっぺら野郎が」

「おらへん、おらへん」

「ふうん。じゃあな、もし来やがったら、大鳥逸平がのっぺら首をもらいに来たと、そう伝えな」

ぷいと飛びだした。

が、どうもいるような気がする。

——目……目といったっけ。やぶにらみめ、安心ならねいわな……。

におうばかりの室君太夫の微笑、そして深い情けのこもったひとみ。どう割り引いてみても、

その表情もひとみも、うそをつくひとのそれではない。

——ほれたかな？

——だらしがねいぞ、逸平兄いイ……。

やぶにらみの態度もおかしい。小次郎の名など聞いたことがないという。つっけんどんなものだった。

「なに——いねいと？」

「ようし見張っていてやる」

西ノ洞院四条の南、すなわち吉岡道場の塀ぎわを二間はばの溝川が東西へ流れて、西ノ洞院川へ注いでいる。ここはそのかみ、小野小町の別邸のあったところで、あまりの美しさに、化粧水をとったといわれていた。小町に懸想して本望とげられぬを悲しみここに入水し果てたという伝説もあり、いつのころからか愛染川、藍染川の名がある。

この川っぷちの柳の下に逸平はあぐらをかいた。

例の長ギセルで、すばすば紫煙を吐きながら、百年でも小次郎を待つ面がまえだ。

時々、塀の水門から赤黒い水が流れだす。憲法染めの小屋がそのうちにあるらしい。

通行人が、この裸男を不思議そうな顔で見ていく。

茨組のあばれ者大鳥逸平の顔を知らない者でも、不逞な面がまえと、無数の打ち身あざ、切り傷、擦り傷で彩られて、隆々たる筋骨を斜陽に映えさせている裸身を見ると、肩をすくめて急ぎ足になる。

一服、二服、三服……口のなかは辛くなるし、うまいタバコも煙くさくなってくる。第一、頭

が幻術にかかったようにかすんできた。

日が落ちてまもなくだった。

綾ノ小路のほうから、二人の女が、影のように歩いてくるのが見えた。一人は被衣をいただき、いま一人は侍女らしい。なにやらひそひそ語らいながら、吉岡道場の門前まできてのぞきこんでいる。

——はて、あやつどもは？

ふっと、逸平は猿太の話を思いだした。

——ありそうなことだ。昨夜のその女どもかもしれん。小次郎に助けられた礼でも言いに……とすると、いよいよ小次郎はこの道場に——

押しこんでも、と思って、ぬっと立った。

ずかずかと門前に来て、無遠慮な目で女を見たとたん、

「や?!　そなたは……」

2

被衣のほうではない。

逸平ほどの男が、それなり絶句して棒立ちになったが、あやのほうでも、うす気味悪げに、被衣の背に隠れようとした。

「あや！　あやではないか。あやだな！」

爆発的な歓喜だった。

逸平の手が、がっしりと柔らかい肩をつかんで、
「あやだな？　おれだ」
「……」
「逸平だ。大鳥村の逸平だよう」
「え……？」
あやしむような目が、やっと輝いた。
「まあ、逸平ちゃん……」
「あやだな、あやだな」
夢中で逸平は肩を抱き、背を抱いた。躍りあがらんばかりだった。
その手ばなしの喜悦に、被衣の女は、はじめは驚き、次に顰蹙し、そしてかすかなねたみを感じた。
「これ、お待ち」
ついと扇子で逸平のわきの下をついて、
「はしたない！　あや、人目に立ちましょうぞ」
「よいわ、よいわ」
と、逸平はもとより意に介さない。
「幼なじみじゃ。久々じゃのう。元気でいたか。三年、いや、五年になるか、いや……」
「逸平さま……」
あやは身をもんだ。

男の汗くさい胸に抱きすくめられて、真っ赤に上気していた。目がくらみ、足がすくみ、鷲のつめにつかまれた小鳩のように、ただ、あえいでいるだけだった。

「放して……ここでは……」

「放すものか。昔から、おれはそなたを……」

「ええい、あまりな振る舞い、あや許しませぬぞ」

被衣の女は、逆上したように扇子で逸平の背を打ったが、蚊がとまったほどにも感じないとみると、びしっと、あやの肩を打ちすえた。

「よい加減になされや」

「何をさらす、おれのあやに」

逸平がほえた。

「おれのあや？　なんとたわけたことを。僭上の沙汰でおざりましょう。あやはこの身の小者ですよ。油小路の青山家の奉公人」

女はおちょぼ口して、誇らしげに笑った。

「めぐり会いもうれしかろうが、まずお放し」

妙に威力の感じられる言葉だった。

強い力でひき離されたように、逸平は腕をひらいた。

「それでよろしい。久々の語らいは、いずれ……」

と、理解のあるところを示したのがいけなかった。さかりのついた犬のように、また逸平は、あやにおどりかかった。

「よっしゃ、あとで会おうぞ」
狂気したようであった。あやは耳たぶをかまれるかと思った。
「よそで会おうの、よそで。そうだ、そこの五条の薬師堂うらに来てくれい。あと二刻ほどしての。よいの、よいの……」
「あ、あの……」
「よいの。待っている」
返事を聞く逸平ではない。
言うだけ言うと、ぱっと身を翻した。喜びがたくましい五体にみなぎって、佐々木小次郎のことなど忘れてしまったように、踊るようにして、宵闇に走りこんでいる。
「けったいな男だこと……」
あやはあるじの怒りを予想して小さくなっていたが、その気配もなく、ほれぼれとあとを見送っているではないか。
「小次郎どのはお美しくて品がよいが……のう、あや、あの熊のような男も、ときには悪くはありませぬの。ほほほほほ」
そんな目で見られたとは知らぬ逸平は、ひた走りに蛞蝓の長屋にもどってきた。
「あ、逸平が」
戸口の近くにいたのが叫ぶと、
「おう、やったか」
と、けが人たちが頭を持ち上げた。

「ん？」
「なんて顔をする。小次郎はどうした？」
「小次郎？　ああ、物干し竿か。あれア、やめた」
「なに？！」
「いや、ちょっとおあずけだ」
けろりとしている。
「なんてえことだ」
と、大蟇が包帯の上から額をおさえて、
「痛っ、しみてくるわえ」
「小次郎には会えなんで、会うたのでの」
「なんじゃアこいつ、何を言うとる。暑さでぼけてか」
「小次郎には会えなんだ」
「ふむふむ」
「で、会うた」
「なんじゃあ？」
「その、ええい、うるさいやつらだ」
逸平、癇癪をおこして、わめいた。
「おれの好きな、好きじゃったおなごに会うたのよ」
「ちぇっ、女めらなど……」

反っ歯が、ふがふが声で、
「女めらより小次郎じゃわえ」
「うるせいの。小次郎ののっぺら首は明日まで待ちな。それに、おぬしは小次郎を憎めぬはずだがの。前歯が折れたで、ずんと男ぶりがあがったようだ」

3

——来ていない……。
薬師堂うらで、逸平は足をとめた。お神楽長次の帷子を借りてきたので、背丈はどうやらあっているが、身幅がややせまい。
筒井筒ふりわけ髪の幼なじみとあいびきするのだから、せめてもう少しましなものを着てきたいが、伊達小袖は伏見にあるので仕方がない。
逸平はきざはしに腰かけてキセルをくわえた。
と、御手洗の横から、被衣した一人の女性が近づいてくるのが見えた。
「あや……あやどのか」
女は何か小さく言った。
「あやどの！」
耐ええないように、逸平は肩を抱こうとした。
「ほほほほほ、逸平さま」
「あ……」

声が違う。別人ではないか。あの女、あやの主人――
「何をけったいな顔をしておいでかえ」
「……」
「あやでのうて気を悪くおしかえ?」
「あやは……」
「屋敷の留守番」
と、また女は笑った。婉然たる眼が、くちびるが、男を揶揄するように、
「この身では不足かえ?」
「そなたさまは……?」
「お扇、と呼んでたも」
目まいしたように、お扇は逸平の胸に倒れかかった。
当然、たくましい胸が、腕が、抱きとめ、抱きしめてくれるのを期待して。
ところが、逸平、さっと身をひねったからたまらない。お扇は、すとっと、石だたみに転がった。忍び会いが悲鳴をあげたのは、きざはしで腰骨でも打ったようだ。
「なにをなさいます……」
「そいつはこっちのせりふじゃわい。色気違いめ」
それだけでも足りぬように、逸平は両手をふりまわした。
「こやつめが、男なら手足の一、二本たたき折ってくれべいに、ええい、いめいめしい」
怒りにまかせて、長ギセルをたたき折ろうとしたが、肩にかつぐと、大股にずんずん境内を出

ていった。

それから——酒を飲んだらしい。それもかなりの量だったろう。茨組では二と下らぬ酒呑童子の逸平が蛞蝓の家に帰ってきたときは、連銭葦毛『疾風』がまだら牛に見えたというのだから尋常ではない。

指し樽を抱くようにして、正体もなく眠った。夢を見た——

昔の夢——故郷である武蔵の大鳥村で、あやと遊んでいる夢だ。遊んでいるというより、悪童の逸平が、庄屋の娘あやをいじめて泣かせているのだ。

——おかしいや。あやをいじめた……覚えはないのによ、あ、一度あったっけ、一度だけしか……ええと、どんなことだったっけ、ええと——

思い出せない。

——ちぇ、しっかりしやがれ、鼻つまみの悪たれ坊主！

我と怒鳴った声でか、逸平は目がさめた。

頭のところに、蛞蝓の五郎蔵が立っていた。

「文やで。女文字の文……」

寝ぼけ眼でひったくった。裏をかえすと、あやより、と鮮やかな筆跡だった。

——あやが？　お扇の意地悪な、しかし凄艶な顔とゆたかな姿態が思いだされた。

——どうして文など書けたろう——

文意は簡単だった。きっとお扇の目をぬすんで書いたのだろう。

——昨夜はお怒りのことと存じます。あるじの言いつけゆえ、あのようなことになってしまい

ましたが、今夜こそ、是非お会いしたいと思います。ついては、今夜同時刻、左女牛八幡の祠前までお出ましくださりませ。是非是非おいでのほどを——右のような意味であった。

「へんな笑いかたをせんときな」

「ふふん、人間うれしいときにゃ笑いもするわな。女に呼びだされてうれしくないやつがあるけ」

「わしゃうれしゅないの。銀をせびられるがオチやないか」

「と思うがよいわさ」

「まあ、見せとくなはれ……ふん、ふん、したが、字が震えているようやないか」

「うむ、うれしゅうてじゃろ」

「このあたり、字がにじんどるで」

「うれし泣きしたのじゃろ」

蛞蝓はあきれたようにとんきょうな声をだした。

「手がつけらへん。色気違いやなあ」

「そねめ、そねめ。その代わり、帰りにゃ小次郎の首さげてくるわえ」

4

——こんどこそ、間違いなくあやがくる！

その喜びは、左女牛八幡に来て、みごとに裏切られたのである。

「おのれか、逸平とは？」

祠は荒廃しても、ここの清泉は著名だった。

いましも一口飲んでゆったりとむきなおった男の、冷たく嬌慢な声を聞き、うわさどおりの風貌姿勢を見ると、

「佐々木、小次郎……だな」

「いかにも、佐々木岸柳と申す。会えてうれしいか、下郎」

「なんだと、若僧！」

「ふむ。若僧でよい。若いということは、ますます伸びるということだ。うぬら下郎の血なりとも、吸えば吸うほどに、おれの剣はさゆる。おれは天下の佐々木小次郎になる」

冷ややかに、片ほおに微笑すら浮かべている小次郎の言葉には、逸平など頭からのんでいる風がある。

小生意気――というよりほかにないが、それだけにまた、自信があり、だらりと両手をさげた姿勢からはすきがない。

近ごろ伏見との往来が盛んになるにつけ、この焼けあとにも牛臭い小屋が建ち並んでいた。北野辺の牛だまりが南へ移った感がある。

その牛だまりに連なる屠殺場のあかりがわずかに漏れて、端麗な小次郎の横顔を浮きだしていた。

派手小袖に袴をきりっとはき、大小を帯したほかに、右肩から左わきの下へ紫の真田ひもをむすんでいるのは、とてつもなく長い刀を背負っているからである。

――これが物干し竿か……？

と思うと、生来の負けずぎらいが、ぬっと頭を持ち上げてきた。

「聞きしにまさる美しい男だの。切るのも痛々しいが、そのひるみをすきと見るいやしい兵法だろうな」

「うぬら下人には兵法うんぬんもせんないが、地獄の土産にしてくれようか。若年にして富田流小太刀の秘法を得、今日では岸柳なる一派を創した兵法者ぞ」

「はあはあ、育薬の効能書きは、その育薬道場で腐るほど聞いたわい」

後世の人のように、逸平は驚きも感心もしない。四尺に及ぶ朱鞘の鐺をはねあげ、みごなわ柄に手をかけたまま、

「死ぬる前に、一つ吐いていけ」

「なに?!」

「うぬはお扇とやら淫奔女とどのような仲ぞ」

あやがしたこととは思われなかった。

逸平に恥をかかされたお扇の再度のたくらみとは、昨夜吉岡道場の門前でのもの欲しげな様子から見ても合点がいったことだ。

「あ、あの女か」

冷笑が小次郎のうすいおもてをかすめた。

「ごまかすねい」

「ほゆるまでのことか。おれには、女は一つよ……どの女もおれにとっては雌にすぎぬ」

話の合間にも、小次郎のからだから目に見えぬ殺気がほとばしっていたのである。

逸平は、六尺の間合いを保ったまま、じりじりと牛だまりのほうに押されていた。ぬるっと泥濘へかかとが入った。

「たっ！」

抜刀したのは切るためではなかった。一刀必殺の小次郎の剣先を惑わさせて、逸平は横へとんだ。が、丸太につまづいて転がった。小次郎の手が肩へあがると見えた。逸平は牛だまりに転がりこんだ。

さすがに、小次郎は抜刀こそしなかったが、一跳して、六尺の間合いを保った。かろうじて起きるには起きたが、

——こいつ……十人は確実に殺した目だ！

はじめて、この白面の殺人鬼に、慄然とした逸平。

だが、へらず口はひるまない。

「雌だと。ふん、御大層だな。女にほれたことがねいような……そ、その雌に、うぬは頼まれてきやがったくせに」

「バカな。おれはきさまを消しにきた。吉岡道場門前で、あのような放言をなされた以上、生かしてはおけぬ。岸柳佐々木小次郎の名声に汚点がつく」

「……」

「たしかに、お扇が頼みには来た。で、丁度幸いだったというわけだ」

紅唇がなんという非情な言葉を吐くことか。

ふっと、殺気が語尾に流れた。そのせつなに、小次郎の手が肩に伸びたとも見えぬ素早さで、

「死ね！」

びゅうと、牛臭い夜気がななめに裂かれた。

「うわあっ」

逸平のからだは一転した。眠りを破られた牛が、どどっと羽目板に巨体をうち、鼻面をすりながらないた。

「死ね、下郎。うぬのほれたあやとか申す小娘も、いまごろはお扇の嫉妬で鼻ぐらいそがれていようほどに」

しゅっ、しゅっと、物干し竿のきっさきが牛小屋の中にひらめく。

「なにっ、あやが、あやが！」

突然、恐怖をふるい落として逸平は叫んだ。なにやら言い知れぬ狂暴な火が体内に燃えあがるのを感じた。彼はめちゃめちゃに刀をふりまわした。

とび出すか？　と、小次郎がほくそえんで一歩さがったとき、がらっと、丸太がはずれた。と同時に、牛はよだれをしたたらせてうなった。そして、重い巨体をゆらめかせ、狂ったようにとびだしたのである。

さすがの小次郎も、だっと横へ逃げる。

と、逸平は、間の仕切り板をとび越えて、次の牛を切り離していた。丸太をはずし、牛のしりに一太刀くれるのである。

牛小屋は、牛だまりを三方から囲んで、女郎の切り見せのようになっている。

次々と丸太をはずし、ざくりとしりを切られて、黒牛もまだら牛も、痛みと怒りで跳ねまわっ

た。どどっと地鳴りがし、牛飼いの小屋がゆれる。

牛飼いたちがはね起きてきたときは、十数頭の牛が、巨体をぶつけあい、角をふりたてながら、牛だまりを狂奔していた。

自慢の物干し竿も猛牛の群れにはみすや針にも等しかった。

左女牛の泉にのどをうるおしながら、

「下郎にしてやられたわい」

と、佐々木小次郎が形のよいくちびるをゆがめて切歯しているころ、逸平は、牛飼い小屋をぬけて、西ノ洞院川沿いをまっしぐらに北へ走っていた。

秋近く、冷えた夜気の大路小路にあやをもとめる逸平の声が流れていた。

嫉み刃

1

「――あや、あや！」

お扇が呼んでいる。歌い女あがりで、自慢のきんきんとかん高い声だ。

「あやはいないかえ？」

声が近づいてきたのを知りながら、じっと座ったままだった。

納戸の板戸をたてて、あやは身じろぎもしなかった。

「あや！　あやはどこにいるの！」

ますます声が高くなった。ヒステリックに目をつりあげた女あるじの表情を描きながら、かたくなにあやは沈黙している。

――返事をするのもいやッ……。

白痴的な美貌ゆえに、旗本青山権之助のめかけにすえられているお扇を、心ではけいべつもし、そうした女に奉公している我が身を悲しく思ってはいたが、わがままで怒りっぽい点を耐えればいうことはなかった。

それが、憤らしさに、身がふるえる。憎かった。うらめしかった。

――あんまりです、あんまりな……。

さかりのついたねこの夜鳴きのようなお扇の声を聞き流しているうちに、かなしみが小さな胸にあふれ、涙がふきこぼれた。

くくっと、むせんでおもてをおおったとき、

「――どこに行ってしもうたことやら……まさか、こんな……」

がたりと、板戸があいた。

「あや！」

ほのあかりが突っ伏したうすい肩をまるくとらえた。

「何をしておいでかえ、こんなところで」

「……」

「あれほど呼んだに！」

「……」

「聞こえないというのかえ、これっ」

お扇の声は、沈黙にはねかえされるごとに、しりあがりに高くなった。

「これ！　こちらへおいで！」

お扇はくちびるをふるわして言った。

答えはない。あやは動かない。怒りに打たれたように、ぶるぶる肩がふるえている。

お扇の豊かな肉づきにくらべると、うすく、固く、幼い。が、ひくい嗚咽に抵抗もあらわにふるえている姿は、ほの暗い納戸のゆえもあって、妙になまめかしく見えた。

青い果実がいろづき始めたときに見せる生硬な婀態にも似て、お扇のような女には、遠いむかし失われた清純な色香。

かっと、胸に突きあげるものがあった。お扇は、我知らず、あやの肩を小突いていた。

それだけではおさまらず、

「おいで！」

二の腕をつかんで、ひきずり出した。

「いやですッ」

逆らう姿態の優美さも、お扇の妬心をあおるだけだ。

「なぜ、なぜ、返事をしないのかえ、このくちびるが、しぼんだのかえ」

ひきすえ、くちびるのはたをつねった。あやは悲鳴をあげなかった。たとえ救いをもとめたところで、ふろたきの作爺は濁り酒で酔いつぶれているし、あるじ権之助が不在だから足軽小者も

いない。

たとえ作爺が目をさましたところで、お扇を諫止するだけの勇気はない老人だ。

あふれる涙をぬぐいもあえず、あやはお扇を見あげる。

美しく澄んだひとみに、おびえと憎しみのいろを見ると、

「これさ、なんという目つきぞえ」

かきむしるように指をのばす。

本能的におもてをふったが、ちくっと、つめをまぶたに感じて、

「憎い！」

あやは低くうめいた。

2

「憎い？」

と、手にからんだ黒髪を指にまきつけながら、

「これ、あるじにむこうて、何を言うかえ。何が憎い、何が憎い？」

「あんまりでございます」

言うまいと思っていたが、あらたな悔し涙とともに走りでた。

「あまりななされよう、逸平さまに会わせぬどころか、うその手紙までしたためさせて、あげくは逸平さまのお命まで奪いとろうとは、おまえさま、鬼でございます。鬼女とは、おまえさまのような……」

平手か、つねりか、手ひどい仕打ちがくるものと、身を固くしながらの言葉だったが、
「鬼女かえ、鬼女かえ」
目をつりあげたまま、お扇はけらけらと笑いだして、
「お扇は女じゃえ。恋のためには、菩薩にもなろう。男次第で鬼にもなろう……」
ぎらぎら目がひかっていた。
逸平が怒って突きとばしたのが、いたくしりがる女には侮辱を与えたらしい。
あやにあいびきの手紙を無理に書かせると、一方、小次郎に連絡してやったのである。
強いられて書きはしたものの、取りかえしのつかぬことをしてしまったと、あやは独り胸を痛めていたのだった——。
「——いまごろは、あの牛おとこ、小次郎さまの太刀で首はねられていようわえ」
「ああ、おそろしいことを……」
「あんな男！」
と、吐き捨てるようにお扇は言った。
「どこがよいのかえ、あんな男、むさい男、牛のような男。おお、思うても身ぶるいがする」
誇張した演技のあまり、からだをふるわせて、黒髪をひきしぼった。
泣くまい、耐えよう、と思いながら、百千の頭髪のぬけるばかりのうずきに、ひいイ！　と、悲鳴がもれた。
その声と、あわれな姿態が、一層お扇の嗜虐をあおり、
「処女ぶりよっても何をしたかわからへん。あの男に何度抱かれたえ？　何度口を吸われたえ？

白状しイや」

ぐいぐい、あたりをひきずりまわした。

特に嗜虐癖があるわけではないが、興奮すると、女は男も目をそむけるほど残忍になれるものだ。

「白状しイやというに、あや！」

逆上のあげく、お扇は片手で懐剣をぬいた。

「切ってしまうえ、この髪を、この髪を」

目のまえで刃がきらりとひかった。

そこに、突然、黒い風が吹きこんできた。すさまじい音で木戸がけやぶられた。うおおっと、けもののような咆哮のつむじ風。

それが半裸の大鳥逸平の巨体だと知れたのは、懐剣を打ちおとされてからだった。

「お、おまえは？」

「いろきちがいめ」

と、逸平は半死半生のあやを抱きあげて、

「やっぱり、気違いだったのだな。とんでもねえことをしおる」

左女牛八幡の草原で、小次郎の出現に驚いただけでなく、名にし負う凄剣物干し竿には肝をつぶして、近所の牛だまりにとびこんだ。

多くの牛を切りほどいて、暴走の騒ぎにまぎれて逸平は逃げた。

「あやとやら婢女は、いまごろお扇にいびり殺されているだろう」

冥途の土産のつもりか、冷笑しながらの小次郎の言葉が、逸平を油小路、青山屋敷に走らしたのだ。

逸平は、あやを抱えると、お扇を見る目に哀れみさえこめて、

「気違いおんなが」

と言った。

あやさえ助ければ、だまされたことの恨みもケロリと忘れてしまった。そのまま、肩幅のひろい盛りあがった背をゆすりながら、庭へおりる。けやぶった裏木戸から出ていくのだ。

あまりに突然だったし、気のぬけたような顔で見送っていたお扇は、はっと我にかえった。

「お待ち！」

叫んだときは、手をのばして、薙刀をつかんでいた。

歌い女あがりのめかけだが、青山権之助の正室は江戸にいるので、京ではとにかく武家女房。薙刀の一手二手教えこまれていて、勝ち気だけに筋もよいらしい。

「何を女だてらにひねくりまわすぞ」

笑いとばす胸に、

「かくご！」

弧を描いて三日月なりの白刃が走った。

「おっと、あぶねい」

あやをかばっただけ、体をひねるに勘の狂いがあった。逸平の左腕——上膊部にすっと血の糸が走った。

「ちぇっ、かすったぜ」

薙刀と槍は、白刃の部分と等しく石突きを使う。切る突くに対して、こちらは払う殴る。千変万化に縦横な操作では、よく十人二十人を相手と出来る武器だ。

逸平の腕に、浅いながら傷を負わせて、

「得たりやッ」

お扇は、さらに一歩踏みこむや、とう！　と石突きかえして脛をすくう。

半裸の巨軀がこれをさけてよろめく。と見えた瞬間に、お扇のほうが、ふっと重心を失い、ぶるーんとふりまわされて、

「あれっ」

流星のように悲鳴が尾をひいて泉水へ転落していた。

石突きは、いつか逸平の右手につかまれていたのである。

「はっはっはっ、この季節じゃ行水と思えば風邪もひくまいがの」

逸平の無遠慮な哄笑だけが、あとに残った。

3

京の街は眠っていた。深夜になると人かげをすっかり消してしまうのも、慶長十年という雲ゆきの穏やかならぬ時勢のせいなのだが、逸平たちは平気だった。

「――よかった、よかった」

「御無事で、御無事で」

「おうおう、このとおりじゃ」
「うれしい！」
「おうおう！」
静寂をかきみだしながら、二人はあてもなく、ずんずん歩いた。
宿なし犬が、この二人をよけて通った。
歓喜でまとまった話もできないのだ。会話も衝動的で、うわごとのようであった。
「よかったわい。おりゃ、あやがもういびり殺されたかと思うた」
「あたしも、逸平さんが、あのいやらしい小次郎に切られたのではないかと」
「うむうむ。なにせ物干し竿とあだ名があるげな長い刀でな、すんでにこの首が飛ぶところよ」
「御免なさい、あたしがあんな手紙を書かされたので」
「なんのなんの、悪いやつはあのいろきちがいよ。だが、いまごろは、まだあっぷあっぷしとるじゃろ」
逸平は星空を見あげて高々と笑った。
二人は高瀬川の橋の上に来ていた。
「ところで、どこへ行こう？」
「……」
「どこか、こうっと……」
木賃宿を思ったり、なかまの陋屋を思ったりした。お神楽長次のところは汚すぎるし——
逸平の名誉のために断っておくが、このとき、彼はあやとの同衾など考えてもいない。

二人は幼なじみというだけで、(たしかに好きではあったが)五年ぶり、それも花の京のめぐりあい、そして、二人とも危機を脱しえたという劇的な条件のために、多少興奮していて、恋愛感情に動かされていたのも事実だが、今宵、あやを女にしようという野心はない。まだ、そこまでつきつめた感情ではなかったのだ。

この清純な、愛らしいからだを汚れなく一夜を過ごさせるには、逸平、はたと詰まってしまった。

「あや、どこか知らぬか、その、静かな、ええっと、その……」

「逸平さん」

あやは顔をあげた。目が合うと、小鳥の羽がかすかに動くほどのまたたきで視線をそらして、

「あたし……帰らないと」

つぶやくように言った。

「え? あや、なんだって?」

「あたし、帰ります、お屋敷へ」

「屋敷? あの油小路の、あの気違いのところへかえ?」

それこそ、気でも狂ったのかと、けげんな気持ちを大きな目いっぱいにあらわして、逸平はあやをのぞきこんだ。

髪のにおいがした。逸平は、さっき抱えあげたくせに、おずおずと、小さな肩に手をおいた。髪の芳香だけは、ひそかに素早く、胸いっぱい吸いこんだ。

「あたし、帰らなければいけないの」

と繰りかえして、それから、急いで彼女は言った。
「悪いひとじゃありません。ただ、怒りっぽいだけ。だから、もうおさまって……ああ、着替えもしないと、風邪をひいてしまうわ」
「あんな女、死んでもいいわえ」
「そんなこと言うものではありません」
と、ときには姉さまじみるのが女だ。
「あたし、青山家には御恩があります。勝手にとびだすわけには……」
「か、かまやしねいわな……」
と言いながら、逸平の語尾は力がなかった。
よく考えてみれば、銀子もない、銭もわずかだ。下郎奉公で妻帯（あやが承知したと仮定してもだ）のできようはずがない。
無鉄砲は逸平ばかりでない。茨組の連中のお家芸だが、可憐なあやを目の前に見ると、そうしたことの無謀さに、ふと思いあたるのだった。
「ねえ、とにかく一度帰って……」
「……」
「まだお扇さまがあのようなら、はっきりとお殿さまからお暇を頂きますから」
——ふうん、あやは幾歳になりよったんじゃい……？
感心するような、あきれるような——複雑な気持ちで別れねばならなかった。もっとも逸平の心の比重を占めたのは、掌中の玉を失ったような寂寥である。

主の本多の宿舎を教えて、再会を約するあいだ、人が違ったように逸平は銷沈していたが、あやの姿がこわれた木戸から吸いこまれると、なんとも意味不明の叫びをあげて走りだした。

道ばたの築地のもとにさっきの宿なし犬がいて、舌をだして逸平を見た。

「こんちくしょう！」

石くれをなげつけようとしたが、あたらないので、両手をひろげてとびついた。

「うぬ、皮はいで食うてしまうぞ」

しかし、敏捷に犬は横っとびに逃げた。三更のやみにたちまちのまれた。逸平はその犬が赤犬でなかったのに気がついて、独りで笑った。三日も飢えたあとのように、力のないわびしい声であった。

河原の女

1

京の四季は変わりめがはげしい。蟬の声、やぶ蚊の跳梁に残暑をかこっていると、ふいに涼風がたつ。

それが秋の前ぶれで、三日経ぬまに、京の風物は秋色に塗り変えられるのだ。

逸平が伏見にもどって、

「主の許しも待たで数日も帰邸せざるは不埒千万」とて、十日間の禁足を申し渡されているうち

に、とみに秋は深まった。

夾竹桃の花がいろあせたかわりに、彼岸花が毒々しく辻君のくちびるのように草むらにあやしく咲きほこり、大原女や鞍馬女のふり売りが目だってきた。草のいろ、風のけはい、雲のたたずまいにも、秋色は濃い。

逸平はやっと勘気がおりて、二条の城に使いで来たのだが、

「まるで半年も留守したようだ」

と、目をみはった。

「――いつぞやのように、遊びほうけて帰るを忘るれば、こんどこそ許さぬぞ」

百助信勝は熱を病んだ真っ赤な顔で、

「仏の顔も三度ということがあるぞ」

と、念をおしたが、

――なにが仏でい。鬼づらのくせに。鬼の霍乱だわな……。

それでも、そのおかげで京へ来れるのだから、逸平にとっては幸運な発病だ。

二条勤番の知人に十五日の後の月見に誘われていたのを、発病ゆえの断り状だった。渡してしまえば、役目済みで、手足がのばせる。

なあに、まだ日暮れまでに二刻はある……。

伏見には夜半までに帰ればいいのだ。

これが、朝がたまでには――だから、一日ぐらいなんでエ！　ということになって、何度も悔やんでいるくせに、生来の遊び好き。酒よし、女よし、ばくちよしの放埒の性癖は治りそうもな

い。

——二条の城へ行ってこい——

と命じられたときに、まず胸に浮かんだのは、あやのおもかげ。

——お扇とやら、あれで懲りて、こんどはゆるりと会わしてくれるだろう……。

十日の禁足は、必然的にも、女に縁がないから、ひたすらにあやを思った。

幼時の追憶。あやとの数々の、ままごとや、泣かせたことや、手をひいて小川の丸木橋を渡ったことや——たわいない、ほほえましい思い出に浸った。

無性に、あやが恋しかった。

「早く武士にならんけりゃな」

それは、亡父の望みでもあったのだ。

だから、逸平は、草深い武州大鳥村から江戸へ出て足軽奉公した。もっとも、乱暴もので村におれなくなったからでもあったが。

「戦さえ起これば、一国一城のあるじになれる」

十人力だし、槍や刀も折にふれ使っている。

逸平は、それだけの自信はある。関ガ原の戦のときは、まだ少年の域を脱しきれなかったから、戦場にも行けなかったが、いまなら一番槍の功名だ。

足軽から出世するチャンスは戦しかない。

彼がその器であることは、戦場往来の無頼浪人者の集まりである茨組で頭領格に奉られているという事実が証明する。

「――あやはいるかね」
と、帯をしめなおして訪れた青山屋敷で、逸平はしかし手ひどい仕打ちを受けた。
権之助が来ているとみえ、家来らしい屈強の武士三人から、
「そんなものはおらん」
にべなく、突きとばされてしまった。
「おらんはずがあるけえ」
「おらんちゅうたらおらん」
「おめいは知らねい、ここのお扇の召し使いで……」
と説明しかけるのを、
「ことや、呼び捨てにするとはふとどきだぞ」
三人は肩を怒らせた。
こんな程度の武士ならへとも思わないが、ここで騒動を起こしては、と、珍しく思慮が働いた。
あやへの思慕が強いせいだったろうか。
あきらめて、街すじへ出ると、小さな店で一杯ひっかけた。
「こんだ払うぜ」
逸平の顔は、酒の店や化粧首をおいているくらいの家では通用する。
酒を飲んでも胸のつかえは晴れなかった。
「――おや?」
ほてった顔を風にさらして、ぶらぶら歩いていると、どこやらから笛太鼓の音が流れてきた。

「はア て、聞いたような囃子だわえ」

2

笛太鼓の音に誘われてふらふら行くうちに、

「あ、あれだ！」

とまって、手を打った。

淀川で見たおんな歌舞伎のお囃子に似ている。

「思いだした、思いだした。そういえば、四条河原に小屋かけるというていたわい」

四条の河原には、人々が群れていた。

高く高く澄んだ秋空を映して、冷たそうな賀茂の流れを背にして、むしろを張りめぐらした小屋が見えた。

天井はなく、堤の上から見ると、舞台の一部がちらりと見える。幾流ものぼりがひらひらしていた。それはあの女ばかりの淀船で見たものと同じであった。武者の旗さし物とは違い、あかねや、もえぎに、反対色を配して、派手やかに舞々女の名が染めぬかれてある。

「幾島丹後一座……やっぱりそうだ」

ととっと、堤をかけおりた。

いまさら歌舞伎について説明するまでもあるまいが、現今の歌舞伎の濫觴が、出雲の巫女お国であることは周知だ。

お国はもともと念仏踊りで、銭請いしていた女だが、さきごろ歌舞伎踊りをはじめてから、す

ごい人気を博し、近畿にその評判はあまねかった。

何の興行でもそうであるように、すぐにまねが出来た。戦国末期で人々が新しい娯楽を望んでいた時機だから、二番せんじ三番せんじでも結構客はある。

佐渡島正吉、村山左近、北野小太夫、岡本織部……等々の女優が輩出したが、幾島丹後もそうした女座主の一人であった。

「――さあ、入った入った。天下むるいの女歌舞伎、なまめかしける幾島丹後がやつし踊り、見ねば損じゃえ。入ったり入ったり」

小太鼓を打ちながら客を呼んでいるのは、あの船頭をしていた男だ。

河原の石くれをけちらしながら走ってきた逸平をひょいと見て、

「おいでやす、淀の河童はん」

「覚えとったかい」

「そら忘れしまへんがな。そんだら顔、天下むるいや」

「当たり前だ。六十余州おれ一人じゃわい」

白黒だんだらに丹後の紋どころ花久留子の幔幕を中しぼりにしたねずみ木戸から、

「ちょいとのぞかしてもらわア」

入ろうとすると、

「あれ、河童はん、銭を」

「なに？」

「木戸銭をねがいまっさ」

逸平はむっとした。

茨組の連中は、飲食や興行物に銭を払ったことがない。女すら、ときにはただで抱く。そのかわり、諸国から流れこむ無頼者の狼藉のときには追い払ってやるという、いわば地回りの特権をふりまわしている。

その頭格ではあるが、逸平は近い将来には槍一筋の大名になる公算だから、あまり汚いことはしない。

銭のないときは特権に甘んじることもあるが、あれば請求額の二倍三倍ぽんと投げ出す。

そうしたことも、彼の人気を支えている。

ことに、この一座とは、淀ですでになじみになっている（逸平の人なつっこさが錯覚を起こしているのだが）つもりだから、木戸銭を突かれようとは、真実、思いがけなかった。

「木戸銭とはなんでい」

「えへへへ、木戸銭どすがな、このとおり」

と、木札を呼びこみ棒でさして、

「お一人永楽五銭、お子がたは二銭と書いてありまひょ。目に入らしまへんか」

「入らんわい」

「へえー、これが……」

「うぬなら、目でも口でも入るぞ」

かっと、口をあけて酒気を吹きかけた。

ひとあばれしたい思いをこらえたのは、化粧の女がひょいとのぞいたからだ。

あやとめぐり会って以来、女には気の弱くなっている逸平だ。くるりと背を見せて、木戸から離れた。

木戸番が、その背を殴るかのように、どんどんと小太鼓を打って、

「さあ、永楽銭五枚あれば天下むるいの……」

と、怒鳴りだした。

――いめいめしいやつだ、どうしてくれべい……。

ふてくされたように、懐中に手を突っこむと、手に触れたものがある。銭ではない。さいころだ。

「うむ、こいつがありゃア」

と、見まわした目に、四条の小橋のたもとにつながれた馬が見えた。その馬の脚もとに、寝転がっている男が見えた。

3

立派な馬である。

百助信勝の愛馬『疾風』に勝るとも劣らぬ。全身漆黒の膚も油を塗ったようにつやつやとし、灰いろの鬣しっぽともにすばらしい。

その馬にふさわしく、また豪華な鞍であった。

銀の象眼は一瞥しただけで大名道具と見られた。鐙のつめ覆いは熊の毛か。

「――おい」

逸平は、同業の気安さで、その奴のそばにあぐらをかいて、肩をゆすった。
「や、お帰りでございますか」
はね起きた目の前に、ぬっとさいころを突きつけて、
「ははは、寝ぼけるな。主人じゃねい、おれア大鳥逸平だ」
名は聞いていたらしい。奴は小さくなって、
「わっちは富で」
「富、なんてえのだ」
「ただの富なんで」
「ただの富アよかった。おい、銭を持っているか。ばくちをやろうぜ。なアに、おめいの殿様野郎はきっと女太夫の化粧した胚にうつつをぬかしているさ」
気は進まない様子だったが、強引に相手にさせる。
一番一番やっているうちに、思ったとおり熱中してきた。
——下手の横好きだ、この野郎、しりの毛まで引っこぬいてやろうかえ……。
飲む打つ買うの三拍子で、一番たちの悪いのがばくちだ。やりだしたらやめられない。
逸平勝ちだしたら、女歌舞伎を忘れてしまった。
「——なに、銭がすっかりだ？　けちけちするな、その馬を賭けろ」
「これ、わっちのものじゃないので」
「なアに、勝てばいいわな。銀三貫と踏もう」
「よっしゃ」

合点した富も富だ。

もっとも、ばくち好きは大勝負になるほど勝つはず、という非科学的な自信に駆られるからおかしい。

逸平はばくちが強い。イカサマをやらないから負けはじめたら裸になるが、勝てば一夜大名だ。富が二、三度目をばちばちやるうちに、殿様の馬は逸平のものになってしまった。

「悪く思うなよ。おりゃ馬好きだからな、こいつはちょうだい」

平首をなでてにたりとすると、逸平、鐙に足をかけた。

「――これ、その馬をなんとする」

背後に干物のようにやせた五尺たらずの武士が立っていた。

貧弱なからだだが、服装はおそろしく立派だ。

五倍子染めの着物は半光沢の手のこんだ織りで、羽織の襟とそでは金襴であり、手のむちは重藤の赤うるし。縮緬らしい胡椒頭巾を目ぶかにかぶっているので、容貌は判然としないが、

――こいつか、殿様野郎は……。

と、平気な顔で、

「わりいがね、この富からばくちで巻きあげましたので、へい」

「なに？」

ぎょろりと濁った目がひかったが、

「ほう、ばくちか。わしも好きだ」

と、軽く応酬した。

「だが、その黒あらしはわしのものだ。おまえにはやれぬ」
「そりゃいけねい。勝ったものア勝ったもので」
普通ならどこまでも突っ張るのが逸平の主義だったが、青くなってちぢんでしまっている富を見ると、がらりと折れた。
「ようござんす、お返ししやす」
「ふむ、返すか」
「そんかわり、二つお願いがありやすんで」
「申せ。下郎の負け分は払うてつかわす」
「いえね、そのものわかりのいいところで、富を許しておくんなさい。それから、てまえの欲しいだけ頂きたいので」
武士はうすく笑ったようである。黙って皮のきんちゃくをさしだした。
これしかないという意味か、好きなだけとれというのか、どちらにしても、小兵のわりに豪腹な態度だ。
逸平は、ためらいなくきんちゃくを受けとった。ずしりと重い。手を突っこむと、ぎょっとした。金貨がざらっと手をなぶった。見たことはないが、話には聞いている大判か？　金貨の感触は銀や銅銭のそれとは違う。小判金、一分判金など見当もつかぬほどある。逸平がつまみあげたのは、豆板銀ひとつぶ。
「てまえが欲しいなア永楽五銭だったが、まあ、これでがまんしまさ」
「――いいのか、それで」

と、さすがにあきれて、
「変わったやつだな」
愉快そうに頭巾うちでくくっと笑った。
「おもしろいやつだ。だれに仕えておる」
「本多百助さまの下郎で。じゃア御免くださいやし」
鬙先を賀茂の川風にちらしながら、もうふりむきもせず、女歌舞伎の小屋に走り寄ると、
「ほれよ、つり銭アくれてやるわな、下帯でもとっ替えるがいい。うすぎたねい野郎だ」
「おおきにお世話だ」
あわてて前を合わせて、木戸番は豆板銀を懐中へねじこんだ。

4

舞台では華やかな花笠踊りが今すみ、かわって一人の女がすべるように出てきたところであった。
天井がない小屋には、桟敷というものもなく、仕切りもなかった。
客は河原石に腰をすえて見るのである。あるいは持参の毛氈を敷いたり、むしろを敷いている者もいた。武士や老人は、これも持参の瓢から酒を飲みながら、女たちはひそかにもちや干菓子を食べていたりした。
丸太を粗く組んで、板張りの舞台には引き幕も背景の書き割りもない。
その蕪雑なところで、ただ、女の舞いと、歌だけが、人々を夢の境地に誘うのだ。

女は、鉦と笛にあわせて、静かに舞いはじめていた。

——静に寝ざめてつくづくと
はかなきこの世を
思う間に
夜や明けがたになりぬらん
賀茂の川原に
千鳥なく……

花笠踊りとはうって変わって、もの悲しく、しいんと胸にしみいるような歌であった。舞いであった。

逸平はうしろのほうで立ったまま見とれていたが、

「よきかな、よきかな」

だれやらの口まねのようなつぶやきを漏らすと、とことこ舞台に歩み寄った。

客は八分の入りであったが、前のほうはひざの触れるほど込んでいる。そこを無言で肩を押しのけて割りこむのだから、

「これっ」

「無礼な」

「さがれ、下郎が」

武士たちが、低いがするどい声でたしなめた。が、逸平は馬耳東風である。すすき原をゆうぜんと行く雄牛のようにかぶりつきへ出た。それのみか、舞台へよじのぼりかけたから、お囃子か

たの手が休み、舞いのそでがとまってしまった。
「もし、お客人」
男衆がそでをひくのを、毛虫でも払うように手をふって、
「かまうな」
と、とうとう舞台にあがってしまった。どっかりあぐらして、
「ここなら、よう見ゆる。女、舞いな。おりゃ好きじゃ」
そのときはもう客席はざわめいていた。二、三人立ち上がった者もいたが、
「――茨組じゃ、あん男」
「あばれ牛の逸平や。相手にせんがよろし」
「大鳥逸平いうたら、ほんに手のつけられへん……」
ひそひそ話に背をむけて、
「よい振りじゃの。よい歌じゃの。もういっぺん、聞かしちくれい」
人なつっこい笑顔になっているのだ。童顔といっていいだろう、純真さをさらけ出してしまって、ふふんと鼻歌で、賀茂の川原に千鳥なく……よい歌じゃ、と首をふっている。
「――あれ、どうしたぞ、踊らんかえ」
「下郎！」
われ鐘声がそのとき起こった。
「舞台から降りい。横道もよい加減に置かずんば、許さぬぞ！」
逸平はようやくふとい首を大儀そうにねじむけて、その声の主を探した。

探すほどもない。ほぼ中央あたりに、目ざめるばかりの緋毛氈をひろげ、銚子やひょうたんの用意も充分に陣どった一団の武士たちであった。

浪人でもなく、主持ちのようでもない。ひとしく焦げ茶いろの着物。若い武士に共通の、機会さえあれば人が切りたいという目つきで、逸平をにらんでいる。

中で一人だけ目せき笠をかぶり、蛭巻きの野太刀を抱くようにして長々と寝そべっている。

——はあて、こやつは……？

はじめ佐々木小次郎ではないかと思った。

小次郎には二度と会いたくない逸平だ。刀の長さとからだつきで、ほっとした。

「下郎！」

と、ふたたび言ったのはその武士である。

「早々とおりろ。おりて、うせろ」

「な、なんじゃい」

「消えろと申しておる。目ざわりだぞ、下郎。消えることが出来ずんば、消してくれようか」

そう言う間も、ゆっくりと杯を口に運んでいるのだ。

——腕が立つな、あんやつめ……。

どこかで見たようなからだつきだと思った。

焦げ茶の着物で、思いあたった。

「憲法染めか？」

京流くずし

1

——吉岡道場の……。

紋どころを見た。三つおだまき。足利幕府の兵法所以来、京流吉岡の紋どころはあまりに有名だ。

返事の代わりに、その男はあざけるように含み笑いをもらして、

「退散せい、安酒の所為と思うて許してやる」

それにつれて、まわりの若侍たちも、

「下郎おりろ」

「若先生がお怒りにならぬうちに」

「そうだとも。命冥加なこと。はよう消えてしまえ」

笑い声のうずが巻くのを、舞台から見おろしていた逸平は、

「——いやなこった」

と言い放った。

「なに？」

「いやだよ」

「きさま」と若侍が、また刀をひきそばめて、「吉岡道場の若先生が寛大に仰せられているのを……」

「それがいやだってんだ。やい！」

逸平は、両ひじ張って、ふんぞりかえった。

「やいやい、大鳥逸平さまとあろう者が、知らねいうちなら知らねいこと、吉岡のあばれ伝七と知って、へい恐れ入りましたと引き下がれるかえ？」

目せき笠の杯が宙にとまった。

吉岡憲法――その名が近畿のみかわ、日本全国に剣の流れ兵法所として伝えられたのは足利末期である。

これの淵源は、源義経に始まるといわれている。年少のころ、鞍馬寺にあって僧正ガ谷で八人の僧から習ったとも、その末流に八人の剣客あり、鞍馬八流を伝う、などと異説は多くつまびらかにしない。

その京八流の直系を吉岡が継いだことから、「京の吉岡」を称して京流の典型とした。もとより将軍家指南の表看板が他を圧したのは事実だ。西国では富田流なども著名ではあるが、吉岡京流の人気には及びもつかない。

堀川鬼一法眼の流れをもとり入れて、吉岡憲法直元の秘剣小太刀は、完璧な一派を樹立した。義輝、義栄、義昭の三代足利将軍のもとで、兵法指南所の金看板をかかげて以来、直元殁って、憲法は長子庄左衛門直光に継がれ、ついで今日清十郎が当主として号している。

この憲法というのは、由来、剣の法――剣法からきたもので、「剣法の名家」と世間で吉岡を指

した。ために、直元はたわむれに「剣房」と称したりした。これを世間が憲法とあて、あるいは兼房とあてたりした。

直元を吉岡家中興の祖と仰いで、二代庄左衛門直光からまったく憲法と称し、それが三代清十郎にも受け継がれている。

この吉岡伝七郎は、次男であった。兄清十郎の温厚誠実な気質とはまったく逆に、粗剛奔放に生きている。

だから、世間では、「吉岡の若先生」または「あばれ伝七」と陰口をきく。無頼者と同じように鼻つまみだが、若い弟子たちには、

「話のわかるお方だ」

と人気がある。したがって、若い伝七郎はその人気をおのれの実力と過信して、

「三代憲法はおれが継ぐべきだった」

と漏らすことさえある。いつの世にも多い追従者が、それをそそのかす。近ごろでは慢心してろくに道場でけいこすることもなく、こうして遊びほうけている。

「――下郎、さがれぬなら、さがれるようにしてやろう」

言下に、発止！　と杯がたたきつけられた。

みごとに逸平の左肩にあたり、砕け散った。うすく血がにじんだが、きたえぬいた巨軀である。

「あばれ伝七の、それがあいさつけえ」

「うぬ！」

目せき笠がはねとび、角ばったいかついおもてが出た。

「下郎、そこ動くまい」
「ああ、動かねいと断ってら」
そのときはもう、客席は総だちになっていた。
女童はもとより、男たちもそばづえ食わぬように破籠（弁当箱）や青竹の水筒をほうりだして、どどっと入り口に殺到し、あるいはむしろかべを破って外へ逃げだしていた。
お囃子かたや、化粧の女たちは、楽屋——といっても舞台のかたえに幕をひきまわしたなかだが——の入り口にかたまってふるえながら、成り行きを見ている。小屋のもめごとをさばく男衆たちも、双方が見るからに蛮勇をそなえたたくましさなので、仲裁に入るどころではない。
野太刀をひっさげて、つつっと進み寄る。門弟たちも、鐺はねあげ、腰を落として抜刀の姿勢で半円を進めた。
「抜け、下郎！」
充分の勝算を片ほおの笑みに見せて、伝七郎の手が黒茶いろの柄にかかる。
「おうさ、京流がなんでい、くそでも食らえい」
逸平、ぱっと抜き放った。

2

そのときである。ひらりと、風に花の舞うように、白刃の前に華やかな着物がおどりでた。
秋の七草を摺箔した派手小袖のいろ若衆とも見えたのが、この切迫した殺気を、ふいとそらしたのである。

「お待ちなさんせ」
女のように声がさわやかであった。
女のようになよやかな腰に、細身の蠟漆の大小を落とし差しにしていた。
ゆたかなほおと黒目のあざやかな表情が、どきっとするほど、魅惑的に逸平の心をとらえた。
「ここでいさかいなされては、諸人迷惑にござりまする」
「のけい、丹後」
伝七郎がほえた。
「要らざるじゃまだていたせば、幾島丹後とてもただはおかぬ」
あっと、逸平は、ふたたび瞠目した。
——この若衆が……。
若衆としか見えない幾島丹後であった。腰もほそく、身なりも似合う。ただ、そういわれれば、玉虫いろのくちびる、ほそい白い手、におうばかりにこんもりとふくらんだ胸が、男心をあやしくそそる。淡い色香である。
売色もする女役者とばかりに、けなし捨てにもできない品がある。風情がある。高位の武士も忍びで木戸をくぐると評判も、このあたりにひかれてのことであろう。
形相すさまじく逆上した伝七郎も恐ろしくないのか、
「いいえ、それではお腰のものが泣きましょうぞえ」
と、やんわり抑えるくちもとには、ゆとりのほほえみをきざんで、
「たかが女歌舞伎の小屋とおさげすみなされましょうが、ここは、狭くとも、そぼろなれども丹

後が城」

「なに、こやつ……」

「立場を変えれば、六条西ノ洞院、吉岡道場で刃傷沙汰あればなんとなされます」

ぐっと詰まる伝七郎の腕にそっと手をかけて、

「いやしきおなごの言葉をお聞きとりくだされて、かたじけのう存じまする。さ、ここはお鎮まりくださりませ。すぐに踊りをはじめましょうほどに」

「踊りだ、踊りだ」

と、ひざを打ったのは大鳥逸平のほうである。

「けんかはやめだ。おりゃ踊りを見に来たんじゃったわえ」

舞台からとびおりて、白刃を鞘におさめる。

けろりと涼しい顔で、正面のだれのものともしれぬ厚い円座にどっかり腰をおろすと、長いキセルをくわえて、

「さあ、はじめてくれい」

いきりたったほうは、肩すかしを食って、唖然とした。まだ刀の柄に手をかけたままなのに、逸平は火打ち石の音をひびかせて、ゆうゆうとキセルを吸いはじめている。

奇妙な空白は、しかし、数弾指にすぎなかった。

「――こ、こやつ、ひとを白痴にしよって」

かーっと、伝七郎の顔に血がのぼって、

「のけ、丹後」

押しのけるとほとんど同時だった。
「京流が片手切り、こうだッ」
鞘がうしろにすっとび、反りのふかい野太刀は逸平の首をひと打ちに流星のようにおちた。
「うわっ」
キセルがとび、逸平はまりのように転がった。
太刀はむなしく影を切り、円座を切った。
「しまった！」
円座を切るにとどまったのは、やはり伝七郎の腕が凡でないことを物語る。下手にやれば河原石で、よくて刃こぼれ、悪くすれば折れるか曲がるかしたろう。
「逃がすな、きゃつ」
「逃げるもんけえ」
ちらりと、その間にも、未練そうに長ギセルを一瞥して、逸平は抜刀した。
日ごろは木刀だが、遠っ走りには本身を差す。戦国時代の習慣はまだ残っている。
門弟たちが取り囲むあいだに、逸平はたたっと横走りにかぶりつきの丸太に刃を走らした。ばらばらと荒なわがほどける。
何をするかとの不審はすぐにとけた。
「うぬが京流なら、おいらは逸平流、茨流だ。目ン玉ひんむいてよっく拝みねい」
二の太刀で致命傷をと、踏みこんでくる伝七郎に、わき差しをなげつけ、一瞬、ひるむすきに、ひょいと丸太を持ちあげた。

「や！　何をさらす」
「これが逸平流じゃわい」
びゅーん、すごいうなりで、丸太が水平に弧を描いた。
刀が二本、鏘然たる音ではねとばされ、壁むしろにぶっすり突き刺さった。
「ざまア見ろい。太夫、ちょいと借りるぜ」
丸太を抱えたまま、からだごと莚にぶつかる。巨軀はむしろをぶち破って、ひろい河原に転がり出た。
「逃がすまい」
そのあとから伝七郎たちが一団となってなだれ出る。

3

丸太は杉の半皮つき。二間の長さである。いかに逸平が巨漢であり、手のひらが大きいといっても、片手ではつかむのもおぼつかない。そのふといやつを、刀でも持つようにして、
「さあ来い。京流でも天流でもへのかっぱでい」
ぶうん、ぶうん、ふりまわすさまは、苧殻か黍の軽さに見えるが、宵の川風はために東山颪の冷たさでうずまいた。
さすがの名門、吉岡道場の猛者たちも、これには手がつけられず、遠巻きにしてののしるだけ。
「ええい、ふがいないやつ」

伝七郎はじだんだふんで、
「たかが下郎一匹に、吉岡の者がかく多数でもてあますとは恥辱ぞ。ひるむな、切りこめ」
そうわめく御本尊が、飛びこんでいけないのだ。
それでも、合い間をねらって、
「とう！」
もろ手突きに突っこんだ岩佐なにがしは、切っ先が逸平の胸板に届く寸前、ぶるウんと勢いを増した丸太にふれて、五間もけしとんだ。それっきり、死んだように動かない。
日は暮れかけている。うす墨が東山のふもとを包み、八坂の塔の頂にわずかにひかっていた残照がかき消されると、ふいに暮色は濃くなった。河原も堤も群集でいつか埋まっていた。向こう河岸にも人が集まってくる。場所が場所だけに、野次馬は増えるばかりであった。
「早く片づけてしまえ。吉岡道場の名折れだぞ」
伝七郎はいらいらしている。派手な切り合いはむしろ誇りと思っている。ただ、相手が一人で、それも武士の方が十倍になんなんするとあっては、明日のうわさが思いやられる。
と、それだけこの男にも分別らしいものがわいてきたが、もう収拾のつかぬところまで事態は展開していた。
所司代から役人が乗り出してきてはますます分が悪い。こんなどこの馬の骨とも知れぬ男とけんか両成敗では、間尺に合わない。業を煮やした門弟の一人が、石ころをつかんで投げつけるのを見ると、
「そうだッ」

と、伝七郎は神示でも受けたように叫んだ。
「石攻めにしろ。石だ、石だ」
石の弾丸にはことかかない。門弟たちは遠巻きにして、投げはじめた。
「畜生！　それでも侍かア」
とっくに元結いは切れておおわらわになっていた。額や、あごや、肩にびしっびしっとあたる。法被を裂き、皮膚をやぶった。
「畜生！　畜生！」
丸太を縦横にふりまわすのだが、間断ない石くれはすきを縫って飛来してくる。やむを知らぬ集中攻撃だった。
――いけねい、こいつア殺される！
はじめて、逸平のたくましい胸にも死の恐怖がかすめた。
それが、しかし、かえって猛然たる猪勇をふるいたたせて、
「伝七郎！　伝七、伝の字、来い、出てこい。大鳥逸平さまと一騎打ちが出来ねえかッ」
飛来する石の幾つかは、丸太にはね返って彼らを逆に襲うから、投げるほうもうかつには近寄れないのだ。
群集のてまえ、伝七郎もじっとしてはおれなかった。
「よしっ、みんなやめろ」
怒鳴ったとたんに、肩に手がかかった。
なんだ！　と、肩はずしに引いてふりかえると、佐々木小次郎の端麗な青白いおもてがあった。

「およしなされ。あのような下郎とまともに立ちあうことはない」

うすく赤いくちびるが冷笑を含んでいる。

伝七郎はこの若いくせに老成した狡猾なところがきらいだった。女にもてすぎるのも好きになれなかった。が、敵に回すのもどこか不気味で、道場で食客として遇してはいるが、ろくに話したこともない。

「おぬしか、こうなってはとてもに引けぬ。きゃつの息の根をとめねばな」

「切るなとは申さぬ。おれも人切りは好きさ。だが、すべからく太刀打ちにもかけひきが必要ですぞ」

「かけひき？」

「あれに猪突せんとするは、さしずめ暴虎氷河の勇と称すべきか。こうなさるがよい。あの橋へ追いあげてしまうのだ。すりゃ、はさみ打ちも可能ではないか」

四条河原は、真ん中の中州をはさんで両岸から小橋がかかっている。

伝七郎はうなずいて、門弟の小幡弥藤太にその意を通じた。弥藤太の指揮で、どっと一方から半円をちぢめる。

逸平は小橋のほうに追われ、

――八坂から祇園林へ走りこめば……。

宵闇は次第に濃さを増す。たくらみとは知らず、むしろ幸いと思った。だが、小橋の中ほどに走りあがったとき、ぎくりと足はたたらを踏んだ。

「あ？　物干し竿……」

「いかにも岸柳の小次郎だ」

八坂寄りの橋だもとに立ちふさがった佐々木小次郎は、腕組みしたままひくく笑って、

「京流吉岡をなやませるとは不埒な下郎、伝七郎の刃に討たれてしまえ。幸いと、六道の辻も近い」

両岸の群集にも聞こえるような大声をはりあげた。ここだ、と伝七郎は野太刀をふりかぶって、駆けあがりざまに切りこんだ。腹背の敵で極度の緊張が逸平の巨軀にみなぎった。丸太は最後の力でもって、これをなぎ払っている。さしもの凄剣も音たかく、宵闇の空にはねとばされた。

伝七郎は滑るように後ずさった。太刀が遠くの河原に戛然と鳴るまえに、

「岸柳佐々木小次郎が助勢いたす！」

同じく大音声に叫ぶや、手裏から小柄がやみに銀線ひいてとんだ。逸平、本能的にふりかえりざまに打ち払う。が、狡猾な小次郎の長剣は、その体のくずれをねらっていたのである。

たっと駆けよる小次郎の姿が、逸平の視野いっぱいにひろがった。せつな、彼の脳裏を死の影がつらぬいた。

——切られる。

あやの顔がその一瞬にひらめいて消えた。

逸平は、左肩から右わき腹へ、しゅっと火のかたまりが走るのを覚えた。

すさまじい絶叫を天に噴いてどっと欄干にぶつかると、のけぞってくるりと一転した。巨岩をたたきこんだようなしぶきが小次郎のおもてをぬらした。

「やった」

わあっという歓声が河原をゆする。

ゆうゆうと血のりをぬぐいながら、これでおれの名はまたあがる、とうなずいている小次郎であった。

――伝七郎をはじめ吉岡一門がてこずった男を、岸柳佐々木小次郎さまが切らはった。それも一太刀で、とな……うわさが目に浮かぶのか、冷笑にゆがんだ蒼白のおもてを、賀茂の宵風が静かになでていった。

血とどろ

1

昨日から降りだした時雨が、昼まえに少しこやみになったが、また激しくなった。

東山もこのあたりは、松谷、または小松谷という名称があるほど、松が多い。そのこずえに降り注ぐ時雨の音は、老人の昔ばなしのように、じめじめと陰鬱で果てしがない。

小松谷と清水の坂のあいだにほそい延念寺坂がまがりくねって通っている。その坂の途中から、清水の流れの音のするほうへ少し踏みつけ道を入ると、南へむいた斜面に朽ちた茅廬がうずくまっていた。

茅茨ほどよく切りそろえれば、孤楼にふさわしい草庵だったと思われる。いずれ室町幕府の隠士の持ち物か、乱世から遁竄した公卿の花鳥風月を楽しんだところでもあろうか。

松林がふかいせいか常でも明るくないが、時雨にこめられて夕暮れのように暗い。

床下のあたりで、こおろぎがめいるように鳴いていたのがふいにやんだ。

「うーむ、うーむ」

突然、うめき声がしたのだ。

蓬庵のなかである。

「う、うーむ、痛ウ……ううっ」

サーッとこずえを揺すって雁渡しの風が時雨を吹きこんだ。疼痛と、冷たい雨滴で、ぽっかり大鳥逸平は目をさました。

「——み、水はねえか、水は。うーん……」

と伸びをしようとして、

「痛ッ……」

締め木にかけられているような痛みが、全身を貫いた。

顔がかっかっとほてって、頭が重い。耳鳴りがする。頭の芯に熱を持っているようだ。痛みに耐えて上体を持ちあげようとすると、ぐらぐらっとめまいがした。

で、がっくり頭をつけて、ようやく、逸平は、おのれの置かれている位置を見まわした。

ほの暗くてよくは分からないが、荒れた草庵らしいとは見当がつく。天井はくもの巣がはりめぐらされているらしく、大きな女郎ぐものすーっと降りてくる影が、ほの明るい外光に見えた。

ほこりっぽいし、かびくさい。同じ汚く、朽ちかけてはいても、蛞蝓の五郎蔵の家のほうが、なんとなく暖かい。

松籟と時雨のみの声に、山の中であることに気がついた。
「はアて？　おれアいったいどうしてこんなとこにいるんだ」
この痛みじゃあ、どうせけんかしたに違いねい。
これほど逸平さまをやっつけるとは、大したやつだ。
「――一体、どやつだ……？」
まだ頭はもうろうとしていた。が、全身にみなぎった痛みが、左肩から右胸部への袈裟がけに走っているのを自覚すると、
「あっ……」
勃然として記憶がよみがえった。
「あいつ……佐々木小次郎の野郎に……」
迷霧が風に吹き払われるように、あのときのことが一つ一つ眼前に彷彿と浮かび、明確な像となってきた。
場所は四条河原だった。
「あん畜生だ……痛ッ」
恐ろしい刃風だった。長剣物干し竿が、ぴゅっと川風を切って左から右下へ――
思いだすと、逸平は、ぶるっと震えた。
「あのなげえ刀にゃ、とてもかなわねえやな……」
あれがせめて三尺そこそこ（時は慶長半ばだ、戦国の大太刀野太刀が横行していたから）ぐらいなら、こうもむざんな敗北は喫しなかったと思う。

やせ我慢や空威張りではない。兵法——というほどのものは知らないが、けんかの場数は踏んできている逸平だ。

かなりの豪傑ともわたりあったし、早い話が、彼に心服している茨組のなかも多くは武士。関ガ原の戦の生き残りなどの浪人のより集まりで、いずれも腕に覚えのある連中ばかりなのだ。

「だが、よくいのちがあったもんだ」

意識が回復すると、豪胆な逸平は、疼痛に濃いまゆをしかめながらも、傷口の深さを指でまさぐった。

包帯がしてある。なにやら縞目もわからぬ布だ。べったり血がこびりついて、乾いていた。

血の乾き具合いから見ると、あれは昨日の出来事ではなさそうだ。

「何日たったろう……」

そう考えると、猛烈に空腹を感じた。ぐうっと胃の腑がうなった。

「何日も……こうやって寝ていたのだろうか。一体、だれが、ここへ？」

連れてきて、介抱してくれたのか。

おんな歌舞伎の幾島丹後のあでやかな容姿を思い浮かべたとき、足音が近づいた。——丹後か……？

逸平は身を起こそうとして、むうっと苦痛のうめきを漏らした。

2

「おう、気がついたようだな」

あでやかどころか、びんと腹にひびくような男の声だった。
壮漢である。まだ若い。逸平とおっつかっつの年齢だ。六尺ゆたかな巨体も似ている。
四尺近い太刀を横たえたまま、それっきり、一瞥もせずに、着物を脱いでいる。
ぬれた衣類を乾かすつもりだろう。
「お、おぬしか……」
と、逸平は苦痛をこらえて見あげた。
「てまえを、救うてくれたは？」
「――うむ」
「かたじけない……傷は浅くも、いまごろは賀茂川の青ぶくれで流れているところだ」
「うむ」
にこりともしない浪人である。
誇ったりてらったりするふうもないが、さりとて謙譲や卑下もしらない。むしろ、豪気で情の強い性格らしい。
「おぬしがいなければ、地獄で火あぶりになっていよう」
相手が黙っているので、逸平は独りでつづける。
「死ぬのはかまわんが、どうも地獄は好かんのでね。おれア悪いことばかりしてきたからな、どうせ極楽には行けん。とすると、地獄行きを救ってくれたおぬしに、礼を言わにゃならん」
「よせ」
隆々たる筋骨を見せて、くだんの浪人はさえぎった。

「あまりものを言うと、傷口はふさがらぬぞ」
「礼ぐらいいいだろう」
「わしはあの時」
と、浪人ものは粗朶を折りながら言った。
「四条河原で切り合いがあっていると聞いて、五条から河原をのぼっていた。そこへおまえが切り込まれて、流れてきたゆえ助けあげた。それだけのことだ」
「百ぺんでも頭を下げるぜ」
「よせ」
と、するどい声でまたさえぎって、
「兵法修行の第一は、おのれのからだに気をくばるにある……」
「ははあ。すると、おぬし、兵法者かい」
それには答えず、粗朶と枯れ葉を集めて、火をもやしにかかっていた。
——この男のなまりは中国すじだな……。
逸平は武蔵の生まれだし、茨組には諸国のあぶれ者が集まっている。少し話せば、大体どのあたりか生国がわかる。
——中国も備前か播磨、いや、美作あたりか……。
それにしても、この兵法修行を口にするだけ困苦欠乏に耐えているのだろうが、なんと汚い風体なことか。
衣類を脱いだのはしらみでもとるためではないかと疑われるほどあかじみていた。着替えもな

さそうだし、たっつけ袴もすそが裂けて、両刀がなければぼろをまとった物乞いとしか見られまい。

むろん、月代ののび放題の頭は、油気もなく、櫛を入れたことすらないようにむさい。それに加えて無精ひげである。角張った強情そうな顔に高いわし鼻とまがまがしくするどい目……。

山中で出会えば、だれでも山賊としか思うまい。が、まだ山賊のほうが奪ったものを身につけたりするから、いくぶんましかもしれない。

ただ、兵法修行の証拠らしいものは、下帯ひとつの裸になっても、わき差しは前身に差したままだし、剛刀をひざもとに引きつけて離さぬことだ。

それに、針金を通したような筋骨、岩をたたんだというにふさわしい胸板の、前後ところきらいなく打ち身擦り傷の変色した跡だらけ。

――ふうむ。まず二、三十人に袋だたきにされたというかっこうだな。相当修行しただろう……。

となが めていると、ふいに、その男はふりむいた。

「ひとの打ち身の心配せずと、おのれの傷の具合いでも聞いたらどうだ」

にやりとする。逸平は、度肝をぬかれて、あ、と言った。

白煙を噴いて、ちょろちょろ枯れ葉をなめまわす火に、浪人ものの彫りの深い顔は赤々と映えた。

「う、う、まったくじゃ。おれは、おれが傷はどうかのう」

「死にはせぬ」

人を食った男である。べつに悪気があるとも見えない。

「そうか。死なぬか……」

妙なもので、この男の口から聞くと、医師に太鼓判を押されたような安心感があるのだ。逸平は元気がわいてくるような気がした。

「ところで、いったいおれは何日こうやって寝とったんじゃろ」

「まる三日になるか」

ぶすっと浪人ものは言う。

道理で空腹なわけだ。しかし、三日も無断で伏見の屋敷に帰らないのでは、さぞ本多百助信勝、激怒していることだろう。

——怒っても仕方がないやな。死にかけていたんだからな……だが、こんどは帰参がかなわねいかもしれないの……。

そうなればあきらめるだけだ。どうせ中間奉公。逸平ほどの強力と顔があれば、どこかへもぐりこめる。

「あ、そうそう、まだ恩人の名前を聞いていなかったっけ」

大きな声になって、うっと痛みに語尾をのむと、わしか？　と、浪人ものは顔をふりむけた。

「作州浪人、宮本武蔵」

ぶっきらぼうに言ってから、はじめてうすく笑った。

「あわもちがあるが、食うか？」

3

同じ時刻ごろ、四条西ノ洞院の辻に近い一軒のまんじゅう屋の店先に大勢人が集まり、がやが
や騒いでいた。

時雨はこやみになって、うすく日がさしている。四条の通りには、まんじゅうに味つける酒粕のうまそうなにおいが低く流れていたが、群集はそのせいではない。

おもてのあかり障子に、墨黒々と、左のような一文がしたためられていたからである。

来る九月十七日蓮台野において吉岡憲法と試合つかまつらんとするものなり　寅ノ下刻相ま
みゆること

作州生まれ　宮本武蔵

「へえ、大変なこっちゃ。兵法所の先生と試合するんやと」
「ほんまかえ」
「ほんまかいうて、吉岡道場から十間と離れとらへんで、うそついたらわかるこっちゃないか」
「そらそうや。やけどなア、作州生まれ、宮本武蔵たら、聞いたことおまへんがな」
興味の焦点はそこにかかっていた。
西ノ洞院を肩で風をきってきた五、六人の、一見して無頼連中とわかる男たちも、のぞきこんで、
「おい、血胤之助」
「なんじゃい、大馨」
「宮本たけぞうちゅうやつ、知っとるけ」

「知るものか、吉岡憲法と試合するほどのやつといえば、この京にはたんとおらんはずじゃ。まず……」

「佐々木小次郎めじゃろ」

お神楽の長次が言うと、とたんに血祇之助は渋い顔になったが、

「うむ、きゃつも入れねばなるまいて」

と、大蟇を見た。

大蟇疣右衛門は額にはち巻きのように襴金の布で包帯していたし、首抜血祇之助は右手を首からつるしていた。いずれも、六条三筋町の遊郭で佐々木小次郎にやられた傷である。

一番ひどかった蛞蝓ノ五郎蔵は、まだ起きあがれずに寝こんでいるのだ。

そのほか、傷野大炊之介、荒熊組人、嵐山呑蔵等々、威嚇的な変名で京大路で風雲の去来を望む茨組の面々の四肢の傷はいずれも小次郎に受けたもの。

「いめいめしいが、きゃつは強いよっての」

「じゃが、世間に名の通っちょる兵法者というと、小笠原源信斎、伊藤弥五郎一刀斎、それに奥ノ山休賀斎……これくらいではないか」

「もう一人入れるとすりゃ鹿島林斎くらいや」

「まっこと、宮本たけぞうたら、どこの馬の骨か、思いあがった若僧でもあろうてよ」

そのあいだに、まんじゅう屋の亭主に聞きに入った八丁飛びの猿太が、

「ちょ、ちょ、ちょっと、大変な和郎やそうな」

と、もどってきた。

「なんやア、八丁猿、大変たなんや」
「その、たけぞう野郎や。なんでん今朝がた、吉岡道場で門弟衆を五、六人、打ち殺いたそうな」
「ひえっ、ほんまか」
「ほんまや。ここのまんじゅうのあんこはうまいよっての」
「何言うちょる」
「あんこのうまいまんじゅう屋が、うそこねるかいな……」
わいわい言っていると、お神楽の長次のそでをそっとひいたものがある。
「何すんねん……！」
と、突っかかった語尾が、とろりととろけた。
「あの、ちょっとお伺いしたいことが……」
ぽっとほおに紅葉を散らしたのはあやである。
「あなたさまがたは、茨組のお方でございましょう」
「ああとも。わいはお神楽の長次いうて……」
と言いかけて、はっと気がついた。
「や、おまえは、こないだ三筋町の遊郭で」
声が大きかったので、ほかの者たちもあやをふりかえった。
「おう、あのときのよか娘ばいの」
と、これは入道頭で胸毛の濃い荒熊組人、最初から青山権之助のめかけお扇よりも腰元のあやに目をつけていた男だ。

無聊と酔いでお扇とあやをからかったことが小次郎を敵にまわす結果になったのだが、美人の一徳か、べつにあやを恨みに思ってはいない。

自称豪傑たちだし、まだ日は高い。

「あんときゃ食らい酔うとったけんな、堪忍しときない」

九州の少弐の遺臣荒熊も入道頭をぺこぺこさげる。

「いえ、そんなことはもう……」

四条の大通りだ、わびられるとあやのほうがいたたまれない。

「実は、大鳥逸平さまのことをお聞きしたいと思って……」

「逸平がことかい」

首抜血祇之助が割って入る。

「ええ……町のうわさでは、お亡くなりになったとやら、ほんとうでしょうか」

と、聞くあいだに、もう美しいひとみに透明な滴がにじんでいる。

「うむ、死んだ」

と、血祇之助はきっぱりと言った。

「佐々木小次郎に切られての、なんでも川下五条のあたりでだれやらに救いあげられたともいうが、あれから三日、いまだに存生の話を聞かぬゆえ、まずもっての……」

性格でもあろうが、涙もろい猿太や人のいい荒熊は、そこまで断定的に言わいでも、と思っているあいだに、あやの双眸がみるみるくもって、

——泣かれるな……。

「なに、ひょっとして生きているかもしれんけんの、そぎゃん悲しまんでちゃ……」

と口をはさんだときは、ほろほろと白玉が血の気を失ったほおに流れて、

「ああ、逸平さま！」

さっとおもてをおおうと、あやはその場にうずくまってしまった。

娘らしく、やせがたではあるがしっとりと年ごろの肉のついた肩がこまかく震えて、黒髪が揺れ、ひくい嗚咽が時雨を誘った。

なみだ雨のなかで、無頼豪傑たちが手をつかねて顔を見合わすばかり。

首抜血舐之助だけが、好色な眼を、あやの腰のあたりにさまよわせている。

4

日が暮れてまもなくだった。入り乱れた馬蹄の音が、延念寺坂の途中でとまった。

「あ、あそこじゃ」

「あれか、ほかにはないか」

時雨はやんでいた。松脂の燃えるいやなにおいがした。騎馬の武士たちは手に手に松明をかざしていたのである。

「あれに違いない。呼べ、だれか」

ばらばらと飛びおりると、肩怒らして、蓬庵に近づいた。

「宮本どのが住まいか?!」

耳を澄ましたが、返事がない。

武蔵は小半刻前にふらりと出ていったのである。うとうとと眠りかけていた大鳥逸平が、その声で目をさました。

「宮本武蔵！」

癇癪おこしたように、別の男が叫ぶ。

「いないのかッ。果たし合いの返事を持って吉岡道場よりまいったぞ」

驚いたのは大鳥逸平。

——うはっ、悪いところにきゃつら。

傷口をおさえ、歯を食いしばって、身を起こした。布団などはむろんない。わらやむしろを夜具にしていた逸平、はって隠れようとしたが、

「いないのか、たけぞう！」

「さては隠れたか。探せ」

調子づいて、わらわらと蓬庵を取り巻いた。

松明の火の粉をとばしながら二、三人が中をのぞいて、

「いない！」

「そんなはずがあるか。宿所はここだと申して、返事がなくば吉岡が負けたと笑うなどと……」

「——や、いた！」

これは、いうまでもなく、逸平をみとめたのだ。

「宮本たけぞう！」

わめいて、松明が集まったが、きっと一様に刀の柄に手をかけたのは、道場を荒らした手練の

ほどを思いだしたからである。が、
「違う！」
逸平は声をふりしぼった。
「おれは、宮本ではないわい。う……」
「なに、別人だと！」
松明が天井を焼くかのように蓬庵に流れこんだ。火の粉がちりちりとくもの巣を焼いて、ふっと消える。
「やあ、いかさま違う。別人じゃわえ」
聞いた者たちに、ほっとした空気が流れた。逸平も同じだった。が、それは数瞬にすぎなかった。
「手ひどい傷を負うているらしい」
その同情の眼をたたきつぶすような怒罵が起こった。
「そやつ、そやつだぞッ」
「なに?!」
「先日、四条河原で若先生と争うたは」
「え、こやつが……佐々木どのに切られたやつか」
むずと襟がみつかまれた。
事実だから詭弁の弄しようはなかったし、
「ちいッ……」

——傷さえなければ、こやつらの四人や五人……。

歯がみしながらも、逸平はなすすべがなかった。傷口の痛みに耐えるのが精いっぱいで、

「う、う、……放せッ」

と、わめいた。

「お、おれが深手の癒えぬと知って、ちいッ、け、けんかの蒸しかえしかッ。ひきょうな……」

「下郎が、ひきょうもへったくれもあるか。来いッ」

「ははは、若先生へのお土産だ、引きずっていけ」

「新刀だめしにかっこうだな。生き胴だ」

手ごわい武蔵がいないと安心して、勝手なことを言いながら、手をとり足をとり、庵の外へ引きずりおろしてしまった。

「あ、そうそう、忘れるところだった」

「なんだ。あ、返事か」

気のきいたやつが、目立つ柱の上部に書状を小柄でとめた。

「こうやっておけば見なかったとは言えまい」

武蔵の挑戦を受けて、三代吉岡憲法の名で応じて立ったのである。

もし、まんじゅう屋のあかり障子を破ったとしても、無名の田舎兵法者に敗北したことになる。一人の市民の目にふれたことはすべての都人士に伝わったことを意味した。名門たるもの一笑に付せない。笑われることは名門にどろを塗られるに等しい。剣の道は、恥辱をもっとも卑しいものとした。よしや敗北に終わろうとも、正々堂々たる勝負の結果であれば武神に恥じない

が、逃げたり隠蔽したりすることを、兵法者の下と見なしたのである。
延念寺坂の急な傾斜を、ふたたび幾つかの松明が白煙と火炎をなびかせて下った。
赤土みちは時雨でぬかるんでいる。
逸平のからだはありあうなわで縛られ、しんがりの馬がひきずって走った。くどいようだが、赤土のぬかるんだ道。
「う、う、ううむ、痛ッ、く、くそ！　こん畜生！　殺せ、殺せッ！」
気が遠くなるばかりの痛みだった。
顔も、頭も、ただどろだ。乾いた傷口の血が、ばりりっとはがれる音を聞いたように思った。
さしもの逸平も、悶絶しそうであった。
その顔に、傷口から噴きだした血が、ぱっとかかる。生温かく塩っぽい血だ。
——もう助からねえ。畜生！　もう助かりっこねい。あや、あや！　あや……!!
東山から、灯ともしころの京大路小路を、腐った魚のように引きずり回されて、ただ逸平はかすんでいく意識のなかで、清純なあやの面影を暗い空に描いていた。

恋ぞいのち

1

……木の芽春雨

降るとても
なお消えがたき
この野辺の
雪の下なる
若芽をば
いま幾日ありて
摘まましと……

哀調を帯びた歌が、鐘の音、笛のお囃子に乗って流れくる油小路の屋敷街。

この二人静の近江節は、近ごろ京の女童のあいだで歌いはやされていて、珍しいものではない。が、その節まわしの巧み、お囃子方の笛のひびき、鉦や小鼓のつぼを心得えた音色は、素人の手すさびとも思えない。

「――なんや、河原の舞々でも来とるような……」

扇子売りが、小路を通りながら、うらやましそうにつぶやいた。

屋敷の門前には、藍瓶から出てきたばかりのつやつやしい膚をした立派な馬がつないであった。轡、しっぽともに灰いろの逸物で、大鳥逸平が見たら懐かしがるだろう。供待ちでは、あの富という中間が、せっせと銀象眼の鞍をみがいている。

ここのあるじ青山権之助は、こんな立派な馬や鞍は持たない。客のものなのだ。

その客は、奥の客間の床柱を背にして、杯を含みながら、華やかな小袖の動きを目で追っていた。

「いかが、石見どの」
と、青山権之助は、ちらりと客の顔をぬすみ見た。
「同じおんな歌舞伎でも、雑人ばらと青天井のもとに見るのとは違いますな。十六夜の月はあり、珍味佳肴に舌鼓を打ちながら歌舞音曲を聞くとは、いささかの趣でござろうが」
「いささかのう」
客は低い声で相づちをうつ。
小柄だし、色白の細おもての、ちょっと見は品のよい翁の風貌ではあるが、ぎょろりと目をむくと、一瞬残忍で老獪な性格がのぞく。年のころは還暦前後であろう。
少しばかり皮肉に聞こえる返事だったので、権之助は笑顔をこわばらして、
「お杯がからだ。酌を！」
と、お扇をにらんだ。
「はい、これは気のつきませぬことを」
日ごろになく、お扇はしなをつくって、ちらっと色っぽい目で客を見ながら、
「さ、おすごしなされませ……」
客はしかし、お扇のほうを見ようともしない。幾島丹後と三人の若い女の蝶のような踊り姿に結構目をほそめているのだ。

……春立つと
いうばかりにや
み吉野の

山もかすみて
雪の消えしあとこそ
道となれ……

二人静はつづいていた。これは謡曲からとりいれたもので、おんな歌舞伎の演目のうちでも上流階級に好まれていた。

――佐渡から出てきた男が、楽しくないはずはないのに……。

青山権之助は、かなりの費用をかけてひらいた今宵の宴の効果を、そっと胸算用していた。

――食えぬやつだ、能楽師あがりめが！

客の名は大久保石見守長安という。

さきごろから佐渡奉行の要職にある。

が、その地位が要職視されるに至ったのは、この下賤の男が金掘りの術にたけていたからにほかならない。

彼の素姓を洗えば、能では本流たる金春の家である。父は七郎喜然。兄は及連。初姓は大蔵、字は藤十郎。甲斐の武田信玄に仕えて士分であったが、武田滅亡後は浪々の身となった。

彼は最初一能楽師として仕えたが、金掘りにかけては天才といわれた。天才というほかはない。山師が鉱脈を探りあてるのは、現今では科学的な方法によるが、昔は、山相や断層の色別、砂の味、草木の種類または棲息の昆虫などに頼っていたという。

彼、藤十郎にはその天分があった。一見して山の相で鉱脈の有無を判別したのである。甲斐の流し金で著名な武田の軍用金の多くは、彼が探りあてた山から出た。

彼はろくに剣術も知らない。政治の才もない。軍学についてはもとより盲。にもかかわらず士分に列して土谷姓を名乗ったのは、一に右の功績による。

長い浪々の果てに、五十の半ば過ぎてから、

「おれには山師としての天分があるのだ。もう一度、世に出ねば、死ねぬ……」

そう決意した。謡をもって取り入ったのが相州小田原城主大久保相模守忠隣であった。

そのころ、徳川家康は征夷大将軍の地位を得て、なお二つの懸題に腐心していた。一つはいまだに大坂城に在って豊家の残党と西国の人気を掌握している秀頼母子。一つは六十余州を政治するに黄金の不足である。

当時、金山は少なかった。

甲斐のそれは掘り尽くされていたし、佐渡も上杉、豊臣の手で荒らされ、実際の産出量は非常に少ない。ある記録によると、慶長七年には二十貫足らずしか出ていない。

小判にすると、一両は四匁四分だから四千五百余両。これでは採算がとれない。後世のように四人を使っていないから、坑夫一万五千人の人件費その他の費用を差し引くと赤字になる。

「だれぞ金掘りの名人を探しだせい」

家康は諸侯に命じた。忠隣は、藤十郎の履歴を知ると、言上して、佐渡に派遣した。

藤十郎は昔の腕利きの坑夫を甲斐で集め、佐渡に渡って、廃坑をしらべ、縦坑を深く掘り進めるなどして、産金額の上昇を図った。

山師の天分は発揮されたのである。廃人が正常にもどるように、佐渡の金山は続々と黄金を吐きだした。

2

——歌がじみだ……。

と、青山権之助は考えていた。長安は好色と聞いている。

権之助は、舞いおさめて下がろうとする丹後を呼んだ。

「もそっと……こう、面白い踊りはないか。その、男が好くような、ぐっと砕けたところをな」

「でも」

と、丹後は美しい歯並びをちらと見せて、微笑した。

「お屋敷方では、野卑な歌は……」

「野卑とまでいかないでも、ちょっと、その、色っぽいやつだ。世の中は男に女、女に男。の、そうではないか」

「ほんとうに、ほほほほ、恋なさけのあれこれ、わらわも見たい」

と、お扇は目もとを赤らめて長安を見た。

あでやかな丹後の襟もとや胸のふくらみをなめるように見つめている長安は、含み笑いをしたまま何も言わない。

「たっての御所望でござりますれば」

丹後は一揖して下がると、お囃子方と打ち合わせした。

横笛がつやめいた音色ではじまり、乱調子の鼓はやや道化たすべりだしだったが、ちーんと鉦が入ると、二人の女が唐紙のかげから出てきた。

一人は男装して細身の大小を落とし差しにしている。
金扇をひらひら舞わせながら、あやしく腰をくねらして、えくぼの中へ身を投げばやと、思えど底のへびがこわい、などと戯れる。
先の二人静は、謡曲からとったものだから、石見守長安にしてみれば珍しくもない。が、こうした民謡になると、まるっきり卑俗の面白さにつられると見えた。身を乗りだすようにして、脇息に置いた手の指先が鼓に合わせて拍子をとっている。
……扇のかげで
目をとろめかす
主あるおれを
なんとかしょうか
しょうかしょうかしょう……。
どぎつい振りで、男女の指がからむ。そでがからむ。一つにもつれる。
権之助は、我知らず上気していた。今宵の宴は成功だ、と思った。
大蔵太夫金春藤十郎は、家康の内命を受けた最初の半年間に掘りだしたのは五十万両に少し欠けたが、次の半年には百万両を超え、副産物として銀銅も十数万両にあがるという手腕を示したのである。
それだけにはとどまらず、無尽蔵の金鉱として、以後産出額は百に一つも減ることはないという太鼓判を押した。家康の喜びはひとかたではなく、二千石を与えて旗本に列し、佐渡金山奉行に任じた。改名も、その機会に、相模守忠隣の勧めでしたのである。大久保の名をもらい長安と

名乗った。ついで、石見銀山の開発をまかせられるに及び、石見守に任官した。俸禄は一躍五千石にあがった。

旗本としても五千石取りは沢山はいない。

破格の出頭である。猿楽はいうまでもなく、賤業から出た芸術である。文字どおり匹夫の身で、またたく間にこの地位を得たことは、多くの嫉視を招いたが、黄金の前には自ら膝行する者もまた少なくなかった。

この青山権之助がそれだ。

このたび一分判金の造幣に関し、意見を徴するために家康の招きに応じて上洛してきたのを幸い、油小路の屋敷で宴をもうけた。むろん、魂胆があってのことだ。

長安の満足そうな表情を見て、権之助は小用にでも立つように、さりげなく席をはずした。立つとき素早く目まぜしたので、ちょっと間をおいて、お扇も後を追ってきた。

「おい、丹後を抱かせねば、五百金貸せとはいえまいな。やっぱり……」

「あの目つきやよって、ねえ、ぞっこんどすえ」

権之助は旗本に似げないばくち好き。もともと二条城御番で、京伏見の富商に知己が多い。うんすんカルタで五百両も負けこみ、首がまわらなくなっていたのだ。明日にも東西手切れになるかもしれない時勢である。来年の禄米を質入れするというわけにはいかない。

「だが……丹後がうんというかの」

「おんな歌舞伎はそれが身上や。踊りよりそのほうが上手やおへんかえ」

けいべつしたようにお扇は笑う。自分が歌い女だったことは忘れているのか。

「幾らと切り出せばよかろう」
「あれ、太夫を買うたことがないような顔してもだめどすえ」
「何を言う、こいつ。それどころではないわい」
まったく、痴話げんかをしているときではない。

3

屋敷に呼ばれて歌と踊り、そして酒の相手、その次にくるものが何であるかは、幾島丹後は知りすぎるほど知っている。
「こおとわり申しまする」
と、返事はにべもない。
「こ、これ、そのように情ごわに申すな。旗本青山権之助がかく頼んでおるのじゃ」
「どなたさまのお頼みであろうとも、丹後はおんな歌舞伎の舞台をつとめる者、閨までお約束した覚えはありませぬ」
「そりゃそうじゃ。だから頼む。ほんの一刻でよい、お相手してくれい。五両だすぞ」
そのころの五両だ、大金である。が、丹後はうなずくふうもない。
「おことわり申しまする」
「ならば、十両。いやか、十三両ではどうじゃ？　不足らしいの。では、十五両まで出そう。ぎりぎりだ、あまり値あげするでない」
「ほほほほ、好いたお方なら値下げ致しましょうほどに」

と、丹後はくちもとだけで笑い、
「女は好きな男にこそ身をまかせるもの、びた一文ほしがりはしませぬえ」
「では、長安どのを」
「きらいでござります」
「はっきりと申したのう」
真実あきれた声で権之助はくどく言った。
「そうきらったものでもあるまい。もともと金春の出じゃ。猿楽でおまえとも無縁ではないし、佐渡石見の金銀奉行、五千石の石見守だぞ。むしろ光栄ではないか」
「おんな歌舞伎ふぜいが、とおっしゃいます？」
「む……まあ、そうではないか。ほかの女なら喜ぶ話だがの」
「では、よそさまに当たってくださりましょう」
「まあ落ち着け。今宵一刻で十五金では、幾島丹後が安売りと考えているなら、心得ちがいだぞ。相手は半年に百万両もの金を掘る石見守。お気に入りになれば側室に出世だ」
「ほほほほ、一千万両よしや掘ったとしても石見守さまのものではありますまじ。すべては将軍様のものではありませぬかえ」
「違いない。が、四斗俵の米を一升升で四十ぺんすくいだしてみろ」
「……」
「俵ひだに五勺や三勺残る。いいか、年に二百万両だぞ。俵ひだとはいわん、石見守のわらじになんぼ金がつく」

丹後はあきれた。権之助の根性の汚さ、こずるい目があまりに哀れで口がきけなかった。
「な、五千石の知行は石見守にしてみればへみたいなものじゃ。われわれはまず十万石以上の身上はあるとにらんでいる」
顔をみるのもいやになってきた。ふわりと、香を漂わせて立ちあがった。
「いま一度申しあげまする。この丹後は好きな殿御には身も心も投げ出すなれど、きらいなものはきらい、生まれ損ないのおなごに候いて、千金積まれようと膚の切り売りは致しませぬ」
するっと廊下へ出るのを、
「申したな、ぬけぬけと」と、そでをつかまんばかりに権之助も追って出て、「申せ、好きな殿御とはだれじゃ」
「さあ」にこりとして、「まだござんせぬ」
「こやつ、青山を嘲弄するか。いないとは言わせぬぞ」
「でも、ないものをあるとはうそつきになりましょうえ」
「石見どのがきらいなら、この権之助ならどうじゃ。空き家なれば住んでくれようか」
「丹後の好きな殿御は、男らしゅうさっぱりとしたきっぷのある……」
「くっ、きっぷだとか、男らしいとか、だれをさしてぬかす」
「たとえば……」
「たとえば？」
ごくりとつばをのみこむ青い顔へ、
「無法者なれど、大鳥逸平さまのような……」

「い、逸平……あ、あの無頼、茨組の！」
権之助のような身分の者には想像もつかぬ女心だった。驚きはしかし彼だけではなかった。
「え？　逸平さまが……」
口走った者がある。酒肴を石見守のもとに運びかけたあやだった。
「逸平さまを御存じ？　逸平さまはもうお亡くなりになったと聞いたのに」
「いいえ、生きていなさんすえ」
丹後はあやしみながらも微笑して言った。
「今宵、こちらへ参上する途中で会いましたもの」
「まあ！」
ぱっと、喜悦がほおにのぼった。
「ひどいお姿で、四条の吉岡道場の門弟衆に馬で引きずられて、どろだらけ血だらけになって……」
「え?!」
「でも、心配ございますまいえ。大きなお声で何やら怒鳴っていなさんしたもの……」
それだけでは、しかし、あやは安心ならなかった。
膳部を置いてしまって、丹後にとりすがった。
「本当に、吉岡道場の方々が、本当に、逸平さまを、そんなむごい……」
うわごとのようにあえぐ取り乱した姿を、客間から出てきた石見守が、じっと見つめていた。
お扇も逸平を思いだして、複雑な面持ちであやの顔から視線をそらさない。権之助はお扇の心

中をはかりかねて、きょときょとしている。
あえぐ娘の髪を優しくなでながら、丹後の胸もなぜかざわめいていた。
——あんな無頼者を、あたし……好きなのかしら……。
意地で口走ったことが、あの日から胸の底にひそかに忍んでいた思いであろうか。
丹後は、あやの真摯な黒水晶のようなひとみに見られると、ふっと後ろめたい狼狽を感じた。

霧の中

1

——お助けしなければ……。
身をさいなまれるような恐怖と危惧に駆られて、あやは四条西ノ洞院へ急いでいた。
丹後が帰ってしまったあと、後片づけもせず裏口からとび出してきたのだ。
方策はしかし何もない。泣く子も黙る室町家兵法出仕、吉岡一門に傷ついた身を拉致されたと知っても、女の細腕で何ができよう。
だが、ひとしお胸をしめつけるような逸平への執着は、理非や可不可を熟考するゆとりを与えなかったのである。
いい考えも浮かばないまま無謀にも、あやは吉岡道場の門前に立っていた。
お扇の供で度々訪れていたので、取り次ぎの内弟子は見覚えていて、

「佐々木どのは不在だぞ」
と言った。
その言葉が、あやに暗示を与えた。
——あの方におわびしたら……。
吉岡道場は名門である。逸平の不埒を怒っても、卑劣に惨殺するようなことはない。
恐ろしいのは直接手をくだした佐々木小次郎の冷酷非情な大太刀。
あのとき三筋町の遊郭でお扇主従をかばったのも、たおやめに同情したというより、事を好んでの飛び入りというほうが真実に近い。
——でも、悪い方ではなさそうだから、あたしがおわびして許していただこう……。
女には親切だったのだ。
淫奔なお扇と痴夢に狂う美青年武士の姿は、処女の膚を鳥膚だたせるほど、おぞましい図であったが、逸平の救出を考えると、好悪の感情も殺さなければならなかった。
四条西ノ洞院の辻にたたずんで待つあやを、三筋町へ行き来の嫖客が、十六夜月のあかりに顔をのぞきこんで、
「太夫より麗しい辻君ぞな」
そでをひいたり、腰に手をのばしたり。あやはふりきって逃げるが、その間に小次郎が帰ってきては、と思うと遠走りはできない。
そうやって小半刻も待ったろうか。
立売町のほうから、肩をゆする特徴のある歩き方でやってきた武士が、

「――そのほう、青山の侍女ではないか」

と、声をかけた。

「こんなところで何をしている？」

「あ、佐々木さま！」

恋人に会ったように、あやはほっとした。

「あの、あなたさまをお待ちしておりました」

「なに、おれを、か。お扇のことづけでも」

「いいえ、あたくし……おねがいがございまして」

小次郎は疑わしげに、じっとあやを見つめたが、急に、にこりとした。好きではない。にやけた白面武士と思うのだが、その微笑は、夜桜のほころびるにも似た美しさがある。

小次郎も、いまさらのように、あやの美貌に気がついていた。

華やかな美青年兵法者として、その周囲は常に絢爛たる花にうずめられていた。楚々たる風情の野菊は大輪の花かげに隠されている。好色な男ほど、艶冶で濃厚を望むものだ。十六夜月は静かな情緒であやのたぐいまれな美貌を小次郎の胸に焼きつけたのである。

「聞こう。そなたの頼みとあれば、小次郎のなしうるかぎり、かなえてやりたいの……」

小次郎の全身から、一種の色気が、女を引きつけずにはおかない磁石のようなものがあやを包みこもうとする。

あやはそれに逆らうように言った。

「逸平さまを助けてくださいまし。許してくださいまし、御無礼をはたらいたことを許して……」

逸平が生存して吉岡道場に拉致されているとは、小次郎には初耳だったらしい。

我を忘れて哀願するあやは、小次郎の驚愕が気がつかなかった。利口な小次郎は多くは言わずに、ただあやのしゃべるにまかせた。

縷々としてわびる声音の優しさに、陶然となったかのような小次郎は、やがて朗笑して言った。

「ほかならぬあやの申すこと、聞き入れずば男の面目つぶれよう。ちょっと待て」

すたすたと道場へ入っていったと思うと、待つほどもなく出てきて、

「困ったことになった。逸平はすでに連れていんだというぞ」

「え？　どこに」

「蓮台野だ」

小次郎はあやの表情の動きから目をはなさずに言った。

「すでにうわさは聞いておろう。明朝、あそこで兵法の試合がある。吉岡清十郎は逸平の首をはねて血祭りとし、武運を祈るそうな……が、まだ遅くはない。行くか？」

2

蓮台野は四条からおよそ一里たらず。朱雀大路のはずれが千本で、丹波街道の長坂口。昼間なら左方に氷室山麓から涼々と流れきたった紙屋川の清流がのぞめるし、右手に応仁の乱で灰燼に帰した梶井御所の跡と船岡山がある。丹波路はそのあいだを北へ延びている。その口はなに蓮台寺地蔵院があってその地所だから、渺茫たるこの原を蓮台地と呼び蓮台野というのである。

佐々木小次郎があやを連れこんだのは、蓮台寺山門と道一つへだてた千本桜の閻魔堂だった。

「――ここですの？」

と、夜道一里の疲労をからだに見せて、あやは不審そうに見まわした。

「うむ。そういう話だ……」

閻魔堂はもとより堂守りも眠りに入って、名高い桜樹が数十本。だいぶ傾いた十六夜月をさえぎっている。

「この中かもしれぬ……」

小次郎は、優しく左手をあやの腰にまわしたまま、まわり縁にあがってもっともらしく格子の間から手をさし入れた。観音びらきを開けようというのだ。

その道にはたけた小次郎が、まわりくどい手間をかけてここへ連れこんだには、それだけの理由がある。

あやの処女を奪うのに多少の抵抗は覚悟しなければならなかったし、(その抵抗もまた楽しみの一つなのだが)たっぷりと時間をかけて処女のはだを堪能すれば、やがて暁になろう。辻に両者の姿が現れてから袴はいても充分試合見物には間にあう。

――逸平さまがとらわれておいでになる……。

ひたすらに救出を考えるだけで、あやには小次郎の邪心が見ぬけなかった。

観音開きが、ぎイッときしんであいた。

「あや、入るのだ！」

ぐっと、腰にまわした手に力がこめられた。熱いくちびるが、あやの耳朶に触れて、

「かわいいの、あや」
そのときはじめて、小次郎の魔手に気がついたのである。
「何をなさいますッ」
逆らうくちびるをそれて、男のくちびるはなめらかなほおに押す。
ふたりのからだは、もつれて堂内に倒れこんだ。そのとき、むっくりと起きあがった黒い影が、
「非道はよしたがよかろう」
落ち着きはらった声である。
「う?! な、何者だ……」
さすがに狼狽して、ぱっとあやから離れる。わき差しの柄に手がかかる。
明月も、堂内にわずかな反射光を及ぼすだけである。その声の主の容貌はもとより見定めるべくもない。
「見た、富田流の小太刀」
黒影は微動だにせず喝破した。
機先を制されて、小次郎は思わず右手を離してしまった。圧倒されたように、じりじりと堂外へさがり出ながら、
「う?! うぬ、名乗れ」
「作州浪人、宮本武蔵と申す」
「きさまか!」
突然の出現も異とするに足らぬ。ここで充分の眠りをとって暁の試合に望むつもりであったの

だろう。

ゆらりと武蔵は身を起こした。塗りのはげた剛刀を左手にさげて、縁に出てきた。月は堂のなかめうしろにある。

両者のあいだは二間。じっとにらみあいが続くと思われたが、さすがに小次郎、不利を察してばっと木陰へ入った。

しかし、武蔵にはこのとき、大事を控えて争う意志はなかったのである。

「おぬしが名は？」

と問う声音にそれが感じられた。

「越前の佐々木小次郎！」

たたきつけるような叫びにも、

「承った」

と、大きくうなずいたのみである。

それから武蔵がしたことは、あやを逃がすことであった。

堂守りのところに行くように促して、

「あ、有り難うございます」

と、あやが黒髪をすって走り去るのを見とどけてから、

「佐々木どのとやら、今夜の始終はそれがし見なんだことに致そう。それがお互いのためだと思う」

「――要らざることだ」

「そうか。それならそれでよい。ただ、それがしは二刻ばかりの後には大事がある。つまらぬ夢は見たくないのだ」

いいしれぬ憤怒が胸に黒くうず巻いていたが、剣を交わす闘志は小次郎に失われていた。

この宿命的な両剣士の最初の対峙において小次郎が気合い負けしたことは、八年後の西海の小島の凄烈な勝負を暗示していたともいえる。

堂内にもどろうとする武蔵の背に、小次郎はつばするような叫びを浴びせた。

「ことわっておくが、武蔵、おれの剣法はすでに富田流ではないッ！　岸流というのだ。覚えておけい」

3

蓮台野における勝負がどのようにして決着がついたかは、読者周知のことに大誤ないから詳述は省く。

吉岡清十郎は一撃で右肩を砕かれ悶絶した。

門弟たちに担がれて道場へもどってから息を吹き返したといわれるほど、あっけなく、また恐怖的な試合であった。宮本武蔵の名が洛中洛外に喧伝されたのは、右の試合が京すずめに与えた影響力の多少を示すものにほかならない。

そのことは、吉岡一門の名声が失墜したことを意味した。一門の人々、ことに舎弟伝七郎の憤激は頂点に達した。

「兄者、だらしがないぞ。武蔵の垢首、おれがぶち切ってくれる」

武蔵に挑戦の使者が立つ。

使者は返事を持参してもどった。諾である。五日後の同時刻、場所は糺ノ河原。

逸平はその間、吉岡道場の納屋に犬のようにつながれていた。

「あの折は小次郎どのが止めたゆえ、惨敗したのじゃ。こんどこそ、血祭りでさいさきを祝っていくぞ」

伝七郎は、逸平のふとい猪首を毎日のぞいては腕を撫して笑う。

「なにをぬかしやがる。逸平さまの首っ骨ア鋼でできているんだ。刀のほうが折れるから、そう思いやがれ」

毒づきながらも、内心やはり平静でない。

もっとも、家人が医者にかけてくれたので、もともとがんじょうな体軀は傷口をふさぎ、八分通り治癒したようだ。

試合の朝。未明に起き出て大騒ぎのうちに支度を整えた伝七郎は、腹ごしらえと元気づけに伏見の濁り酒をあおりながら、

「納屋の犬を引いてこい」

と命じた。庭には生き胴だめしの土壇が設けてある。

「きゃつを血祭りにして、その血の乾かぬうちに、兄者の敵、武蔵をぶった切ってもどるぞ」

愛刀に素振りをくれていると、

「若先生！」

と、あわを食った内弟子が、

「おりませぬ。きゃつの姿が見えませぬ」
「なに、そんなあほうなことがあるかッ……」
瓶子が染め小屋との中仕切りの建仁寺の塀に当たって砕けた。
「探せッ。遠くへは行くまい」
早速、手わけして邸内外を捜索しはじめた。が、小半刻たっても逸平の姿は現れない。
「逃げたのだ」
不運の兆しであるように皆の額が曇るのを庭前のかがり火の火あかりに見わたして、なぜか佐々木小次郎のみ、にやにやと薄ら笑いを漏らしていた。
やがて、時刻が来て、伝七郎が、
「武蔵も一人、われも一人、なんじらはすっこんでおれい」
門弟の供をふりきって一人出かけたあと、小次郎はぽつんと言った。
「いまごろ、宮本武蔵め、血あわを吹いてうめいているかもしれぬて……」
ぎょっとしたように門弟たちはふりかえった。
「なんと！　奇怪なことを仰せられる」
「ははは、冗談だ。が、おぬしら、そうあってくれいと、腹の底では願っておるのであろうが」
「これは聞き捨てならぬ！」
吉岡一門の興亡をかけた試合に、だれもが興奮していた。
肩ひじ怒らせて詰めよる一同を、恐れげもなく見まわして、片ほおの笑みを消さぬ小次郎である。

「大鳥逸平を逃がしたのはおれだ」

と言い放った。

「え?!　そのもとがか?!」

「まあ、聞け。これには深謀遠慮あってのこと。吉岡一門を案ずるあまりのことだ。逸平は愚鈍だが、無法剣はかなりに利かせる。逸平は武蔵を憎んでいる。というのは、武蔵がきゃつの女を手込めにしたことをおれが教えたからだ。いいか、逸平めに勝ちめはないが、武蔵を疲れさすにはかっこうの先陣ではないか。武蔵の疲労に乗じれば、よも伝七郎どのもおくれをとるまい。の、これは武略だ。吉岡の名誉を保つにはやむをえぬ兵法であろうが。どうだ。ははは」

門弟たちは黙然とうなだれてしまった。

燃えさかるかがり火のあかりを横顔に受けて、小次郎の白皙のおもては桃色に美しく映える。が、その真意は奈辺にあったのだろうか。

そのころ、宮本武蔵、大鳥逸平、吉岡伝七郎の三人は、それぞれの思いを抱いて糺ノ河原へ急いでいた。

有り明けの弦月を覆う濃霧が洛中洛外に立ちこめた暁であった。

おぼろ影

1

濃い霧であった。

二十日の月もわずかにその所在を示して、ぼんやりとにじんでいる。

霧は川のせせらぎからわき出てくるもののようであった。惜しみなくもくもくとわきいで、あざやかにうずを巻いた。暁の風に吹かれては流れ去り流れきたる。

さきほど東山から、濃霧をつらぬいてきこえてきた鐘の音は、寅の一点（前四時）であろうか。

ここ洛北の糺ノ河原は、暁の濃霧にこめられて、ただひそやかな賀茂川の淙々たる声のみが占めていた。

東の空が白んでいくにしたがい、おぼろに木立の影が見えてくる。

牛の乳のような冷たい霧の中に、さきほどからたたずんでいた影があった。

「――おそい！」

吐き捨てるように、影はつぶやいた。

「もう来てもよいころだ……」

耐えきれぬように歩きだした。

霧は晴れそうになかった。暁闇がうすれてくるにしたがい、濃霧のあつみが思ったより深いの

がわかった。

人里から離れているので、霧も濃いのであろうか。

糺ノ河原は賀茂の流れが高野川と合流するデルタ地帯である。現在の葵橋は出雲路橋とも呼ばれ、糺ノ森に近く河合神社があるので河合橋とも呼ばれていた。

橋を渡って左が糺ノ河原だ。その影は、しっとりとぬれた石ころの河原をいったりきたりしながら、時々橋のほうをふりかえった。

濃い霧は、それでも少しずつ、徐々に、気を持たせて晴れていくようであった。橋のかげは、しかし、五間はなれると夢のように淡い。

「遅い！」

かっとつばを吐いて、その男は石ころをけった。

「武蔵のやつ、さては怯したか」

驕慢なその声は、四条道場の吉岡伝七郎のものであった。

約束は寅の下刻――まだ時刻には至ってない。

「――早すぎたかな？」

張りきりすぎて、乗り込みが早かったようだと気がついたとき、橋板を足音がした。

――来たッ!!

伝七郎はぱっと肩にかけた羽織を脱ぎ捨てた。

したは三つ組み革だすきで十文字にそでをはらい、袴の股立ちもとってある。鬢のほつれをとめた柿いろのはち巻きは、さっき締めなおしたばかりだった。

革足袋が小石をけちらした。おぼろな影も急ぎ足に橋をわたってくる。

伝七郎は鍔もとを握って走った。その影が橋を渡りきるのと、伝七郎が走りつくのと、どちらが早かったろうか。

「待ち兼ねたぞ！」

それであいさつは充分だった。やにわに、伝七郎は抜き討った。

「あぶねえ！」

その影は横へとんだ。霧にぬれた石に足がすべって、どっと転倒した。

伝七郎の胸に、一瞬ではあったが、

——もろい。もろすぎる？

疑いがかすめたが、しかし、霧を裂いた剣光と、勝利の予感が瞬後に打ち消して、

「食らえ！」

拝み討ちに、必殺剣をたたきつけた。

2

火花がシュッと霧を焼いた。伝七郎の剣はむなしくかわされて、石をそいだのだ。

くるくるっ二転三転して、斜面を転がりおちたそのからだは、ばしゃっと水しぶきをあげた。

「しめた！」

伝七郎も息つかず剣をふりかぶって追った。

「武蔵！　京流の凄剣うけてみるかッ」

「なんだと?!　京流だと!」

水ぎわで半身をおこしながらのそやつの声を伝七郎は聞いていなかった。駆けよりざまに切りつけた。

「やっ、うぬは伝七!」

片ひざついたままに抜きあわした刃が、がっきとからんだ。咫尺の近くに相手の顔が——はじめて、伝七郎は相手が宮本武蔵にはあらず大鳥逸平であることに気がついた。

意外さに、はっとした。そのわずかな気のゆるみを意識したとたんに、伝七郎は手から刀がはなれたことを知った。

おのれの刀が宙へ——弧を描いてみごとなまでにとんだのを彼は見た。

霧はうすれていた。折から東山の峰を割ってさっと差してきた朝日が、その剣にキラリと映じた。

それが、伝七郎がこの世で見た景色の最後であった。うず巻いて流れる紗のような霧は、澄んだ秋の朝の空を背景に桃いろに映えて、この世ならぬ美しさに見えた。

——極楽……。

消えていく意識がつぶやいた。

わき差しに指をかけたまま、ばしゃッと彼は水ぎわへ倒れた。どこを切られたのかも、いま死んでいくことも意識にはなかった。

逸平の剛刀が伝七郎の脳天から鼻柱まであざやかに、あまりにもあざやかに割っていたのである。

朝日のなかに、鮮烈な噴血は黒く見えた。

「やれやれ、すんでのことに、こちらがお陀仏になるところだったわい」

盛りあがった肩が波うっている。

爽涼の気がみちた河原である。

もうびくりとも動かない伝七郎に、ふっと哀れをもよおして、逸平は片手拝みに、

「迷わずに成仏しな。おめいが吹きかけたけんかだ、しかたがねえやな」

逸平は伝七郎を切りに来たのではない。目的は宮本武蔵だった。幼なじみで最愛のあやを、武蔵が手ごめにしたと聞いたからである。

武蔵はおいらには命の恩人だ、が、あやのはだを汚したのなら、許しておけねい……。

単純な逸平だ。不正や暴力に対しては、一顧もせず、全身でぶつかっていく。

兵法理論などはまるっきり知らない。刀や槍の使いかたはけんかで覚えた。いわゆる〝切りおぼえにおぼえ候〟という、当時の一般的な考えを一歩も出てはいない。

力と度胸にまかせて、言いたいことを言い、したいことをして、堂々と胸を張って生きてきている。

血刀をせせらぎで洗っていると、

「や、伝七郎はもはや……」

驚愕の声がした。

うすくなった霧のなかに、宮本武蔵のぼうぜんとした顔が見えた。

逸平は血のこびりついている刀をさげてふりかえった。

「おいらが切った」
「おまえかッ」
「そうだ。やい、武蔵！　こんどはうぬが相手だ。来い！」
「なに？」
「しらばっくれるな。うぬはあやを汚しやがった。恩人にゃちげえねいが、あやを汚されちゃ逸平はがまんならねい」
「あや？　あやとはだれのことだ」
武蔵の顔は相変わらず無精ひげに覆われている。
しかし、その表情にはみじんも暗いかげはなかった。逸平はたじろぐものを覚えながらも、
「ちゃんと佐々木小次郎から聞いた。うぬはあやを千本桜の閻魔堂で」
「バカな」
一笑に付す、というよりむしろ腹だたしく武蔵はいった。
「小次郎ずれの言を信じてか、愚か者め」
「な、なんだと！」
「わしは兵法修行を志してより、酒を断ち、女を断った。天下一の兵法者になるまでは、酒色を断つことを武神に誓うたのだ」
「……」
「あや――あやとはあの娘のことか。それなれば、とうに家へもどっておることであろう。会うて一切を聞け。わしの口からは何も言うことはない」

3

兵法修行のため酒色を断つ——

逸平にしてみれば信じられないほどの決意であった。

だが、武蔵が街っているのでないことは、助けられて以来、起居を共にしたわずかのあいだでも充分知っている。

いまも、抗弁しようともせず、そういったきり、伝七郎の傷口へ視線をおとしている姿からは、一時の糊塗やうそは感じられなかった。

「さては、あん畜生、佐々木小次郎のやつ、おいらをだまして……」

いきまく逸平を意識の外において、武蔵は独りごちた。

「要らざる腕だてしてくれた……」

伝七郎の死体からあふれる血潮が清冽なながれに真紅のけむりのようにひろがり、ゆるやかに流れていく。

「逸平、おまえは兵法の試合のじゃまをした」

きっと武蔵はふりむいた。ぎょっとするくらいすさまじい形相になっていた。

「お、おいらはべつに……」

「わしは伝七郎を切りたかったのではない。わしの兵法で京流を負かしたかった」

「……」

「おまえは心ないじゃまをいれてくれたぞ」

逸平はぞっとした。足もとから冷えがのぼってきた。刀をいつか下段にかまえて、じりじりと後ずさりしていた。

「そ、そんなにいうのなら」

と、彼はあえいだ。

「伝七はおめいが切ったことにするさ。京流も兵法も、おいらの知ったことじゃねい」

「わしは剣に生きる男だ。おまえなその功をもらおうとは思わぬ。ただ、わしの兵法が一つだけ成長の機会を逃したのが残念でならぬ」

武蔵は背をむけた。

それっきり一瞥もすることなく、橋を渡って大股に去っていく。

いつごろからか集まってきていた男女が、風に分けられるように道をあけた。

「ちぇっ」

逸平は、舌打ちして刀をおさめると、伝七郎の死体を抱きおこした。

血はまだ流れでていたが、気にする様子もない。肩にかついで歩きだしたのである。

「――あらッ」

四条河原には、女かぶき、幾島丹後大一座ののぼりが朝風にはためいて、さわやかな音をたてていた。

楽屋の垂れむしろをあげて女の顔がのぞいた。

「まあっ、あのときの！」

胸をそらせて瞠目すると、とんきょうな声で、

「太夫、太夫、あのあばれん坊ですよ。ほら、長ギセルの」
「――え？　逸平さまが」
幾島丹後の寝みだれ顔がのぞいた。
「ま、ほんとうに逸平さまだこと。あんな血だらけな男を！　あれっ、夕霧や、あれは吉岡の若さまではないかえ」
驚きは丹後ばかりではなかった。
京の町々、賀茂川べりの人々は、大鳥逸平の声に眠りを破られてとびおきていた。
「吉岡伝七郎と宮本武蔵の兵法試合はかくのごとし。ねぼけ眼こすって見ろやい」
二、三間ごとに怒鳴りながら行くではないか。
兵法の試合は死をかけている。
その勝敗の帰趨に心を動かされるのは、あに、今日のプロレス、野球の比ではない。
「切った、勝った、宮本武蔵が吉岡伝七郎を切ったぞう」
ありったけの声でわめいていく逸平のあとに、ぞろぞろと群集がくっついていく。
雪ダルマ式に増える行列の先頭のほうは、いつか茨組の荒くれたちでうずめられていた。
「ちょ、ちょっと傷口を見せろ」
「うほッ、脳天唐竹割りというやつさ」
「なんと、作州の武蔵たら、恐ろしいやつじゃな」
「先日は憲法さま、今朝は伝七郎さま、吉岡一門はわやでないか……」
ぞろぞろと長蛇の列がとまったのは、四条西ノ洞院吉岡道場の門前だった。

吉岡一門はかがり火の余燼のまだ漂っている邸内で結果を案じていた。
伝七郎は、心おきなく勝負をするため、一門に足どめを命じていったのである。
それが死出の旅だったとは。
あわれな伝七郎のむくろを見ると、一門の人々は、もう逸平への憎しみどころではなかった。
また、逸平へ武蔵の恨みを晴らすには世間の目があるし、茨組の顔が多すぎる。
「――御苦労でござった。そのもとは末期の様子を御覧じられたならば、お話しいただけまいか？」
二刻まえに変わる丁重なあいさつだった。
――こいつア弱った。うそはからしき下手なんだが……。
そいつは御免こうむりたいというと、茨組の連中が、
「もったいぶるなよ、逸平あにい」
「そうとも、入んな入んな。わっちらも聞かしてもらわア。座頭の平家よりなんぼか面白かろう」
わいわい騒ぎたてて、押しこまれてしまった。
怜悧な佐々木小次郎は、この様子を見ると、美しいくちびるをゆがめて裏口からそっとぬけだした。無法者大鳥逸平の不死身には、なにかかなわないものを感じていた。

4

逸平の生存を知ると、あやはこれ以上油小路の屋敷奉公はがまんができなくなった。

——逸平さまは愛してくださる……。

——二人で力をあわせれば……。

異郷でもなんとか暮らしはたとう。

無頼だが心根は優しく、剛力の逸平と所帯を持つことを思うと、それこそ草の褥に萱の屋根でもいとわない。

処女の堅い乳房をいとしく抱きしめて、あやはふるえるほどの喜びにぬれるのだった。

——明日は本多さまの宿所にたずねていこう……。

思いたつと実行に移したくなるのは坂東っ子のせいかもしれない。あやの血は若い音をたてて流れている。

——もしもだんなさまがお怒りになったら……かまやしない、お給銀なんかもらわなくったって……。

逸平のひろくたくましい胸に抱かれることを考えると、わずかの給銀なぞ問題ではなかった。

だが、

「暇をくれだと?」

青山権之助は濁った目をすえて、

「どうしたというのだ、急に?」

「ほんとうに、急にそないことといわれても困るえ」

お扇も柳眉をひそめる。

権之助のまえではめったにヒスを起こさないから、時を見はからって申し出たのだったが、

「理由はなにかえ。不足でもあってかえ?」
武家女房を気どって、まだ言葉は優しいがそろそろ目つきがおかしくなってきた。
「いいえ、べつに不足など……」
「ならばよいではないかえ。のう、だんなさま」
「うむ、急に暇をくれといわれてもな」
権之助も苦い顔になっていた。
あの大久保長安から五百金借り出し策は不成功だった。
幾島丹後が一夜の伽を拒んだからでもあったが、気まり悪い思いをしながら借金方を頼んだ権之助に、長安は五十両を投げ出し、
「今宵の酒肴代としましょう。返金には及びませぬ」
と、軽くそらしたのである。
十分の一では利息にしかならぬ。権之助は方策がたたず、今宵もまずい酒をかさねていたところだ。
「――それとも、何かえ?」
お相伴の酒で、お扇の目もとは桜いろに染まっている。
「ほかに、何かいえないことでも……」
とろんとした目の光は、ちょっと見にはあやしいなまめかしさをたたえているが、狂気の一歩手前と知っているから、あやはひざを固くして、
――ああ、やっぱりだめだったわ……。

悲しい涙を胸に感じていた。

「そうであろうが、あや！　わたしたちに何か隠しているやないか」

「……」

「男……おとこかえ？　おまえ、処女だなぞというて、かくしおとこがあるのであろう！」

……いけない……！

お扇が血の道を起こす。これは序章だ。

「これッ！　あや、白状しい、おとこがあってそのような」

いつか握りしめていた杯が、ぴしっと、あやのひざにあたった。

「あれっ」

思わず腕をあげて、ずずっとさがった。

「お許しくださいまし。さようなわけでは……」

「言いや、言いや、おとこであろうが」

「よせ」

男の目には、女の狂態は醜いばかりだ。権之助は立ちあがろうとするお扇のそでをとらえて引きもどした。

お扇のこめかみに青筋がたって、びりびりふるえている。紅唇がかわいて、火のような息を吐いている。

——正面からみれば、女夜叉だな、こいつ……。

灯を消せば、これ以上はあるまいと思う床上手の面白い女なのだが。

権之助は、お扇にふっとうとましいものを感じると同時に、

――あやは処女だったのだ……。

あらためて思いだした。

彼は自分の目が婢女を見る主人とは違ったものに――男のそれになっているのを隠しもせず、ほそくまるい肩や、胸の堅いふくらみ、腿のゆたかさなどをなめるように見た。明日にも開花を待っているような、ふくらんだつぼみの清純さと、肉体の期待を読みとっていた。

「事と次第によっては暇をやらぬでもないが」

「あ、では」

ぱっと、あやの顔が喜びにかがやいた。

「だが、急では困る。かわりを見つけるにしても、すぐというわけにはまいらんし。一応ひと月と限ろう。ひと月がまんして奉公せい」

「ええ、どうしてもひと月はねえ」

お扇もいった。

胸はまだ怒りに波立っていた。ひと月のあいだに、うんといじめて牛馬のようにこき使ってやろう、とお扇は思い、権之助は権之助で、

――ひと月あれば、お扇のすきをみて、無垢のはだをたっぷりと楽しんでやろう。処女のまま変な男にくれてやるのは惜しい……。

と、舌なめずりしていた。

恋は炎か

1

「――なんじゃ、きさま、生きていたのか」

主人の本多百助信勝は、怒るどころかあきれ顔で、

「吉岡道場の者とかに、きさま切り殺されてしまったと、妙なやつが注進にきたが……」

その早のみこみはお神楽長次らしい。

信勝は、使いに京へやるとき、

――仏の顔も三度じゃぞ。こんどこそずぼらすると許さん……。

と、天下に鳴りひびいた魁異な容貌で、はったとにらみつけたものだ。

こんどこそ帰参はかなわぬものと覚悟しておそるおそる伏見へもどったところが、百助信勝のほうは新仏になっていると思っているから、

「幽霊ではないか、きさま」

と、あきれて、足を見た。

拍子ぬけがして、あらためて怒る気にもなれない。

「しようのないやつだ」

といって医者を呼んでくれた。応急手当しかしていないから、肩の傷は化膿しかけていたのだ。

逸平がもどったと聞くと、伏見じゅうの屋敷の奉公人たちが、傷見舞いかたがたあいさつにきた。

「ふえッ、大変な傷でござんすねえ」

「なアに、のみが刺したくれえよ」

「のみにしちゃでっけえのみだ。吉岡ですかい」

「うんにゃ、越前の佐々木小次郎といってな、小生意気な前髪野郎よ」

「へえ、前髪ってエと、ガキなんで」

「大人子供ってやつだ。おいらと幾らも変わるめえが、のっぺり野郎だもんで、前髪に派手小袖でな、女にもてたくってしようのねい野郎さ。いつかは、あん畜生、敵を討ってやる」

「のっぺり野郎なら、わっちも打ち殺してえや。ところで、兄い、吉岡の伝七ってやつを切ったなア宮本なんとかじゃなくって、逸平兄いだってうわさがありますぜ」

「え、な、なにを言いやがる。ありゃ宮本武蔵よ。滅法界もねえ強い野郎での。実ア、おいらも武蔵に助けられたのさ……」

どちらにしても実力のない中間奉公人たちには大鳥逸平は英雄である。

若いし、たくましいし、十日たたぬうちに、逸平は健康をとりもどした。主人のお声がかりだから、医師も高貴薬を使ったのだろう。生まれが生まれだし、育ちが育ちだから、薬のききめは早い。

十月の声を聞いてまもなくだった。

ある日、逸平はばくち場のけんかの仲裁を頼まれてとんでいった。

「やめろやめろ。大鳥逸平だ、両方とも手をひけ」
ひきわけて事情を聞くと、又市という男が借りた金を返さないのでこの始末だという。
「又市、そりゃおめいがわりい」
「堪忍してくんねい。実ア、おいらも人に貸し金があるもんだから、つい……」
「貸し金？　じゃア、そっちから取り立てて払いねえ」
「それが……できねえんだよ。できるくれいなら、とっくに取ってら」
「なぜ、できねえ」
聞いているうちに、逸平、腹が立ってきた。
貸した相手は武士だから返してくれない、というのだ。
「ふうん、おめいは、あの梁にでもぶら下がったほうがよさそうだの」
「く、首をつれってのかえ、逸平兄い」
「まあ、そうだ」
「そんな薄情なことを言わねえで」
「なにが薄情だ。やい、又市。てめえが貸した金はビタ一文とれねえ。借りた金は返さなきゃ仲間に面がたたねえ。そんなどたん場に立たされて、貸し金をとりに行けねえなんて、それでも男かえ？　股ぐらにゃ何があるんだえ」
「そ、そういったって、相手アさむれえだから」
「さむれえだから、なんだってんだ？」
「こちとら草履とりとは違わアな」

「何が違う？　どこが違う？　手が三本あるか。目が一つで口鼻がねえか？」
「そんじゃ化け物だ」
「さむれえだろうと大名だろうと、貸し金は貸し金だ。さむれえがおっかなくって貸し金もとりに行けねえようなけつめどの小せえやつは、なかまじゃねえ。さっさとぶら下がっちまえ」
又市は情けない顔で、逸平の顔を見、腕を見、盛りあがった胸を見た。
「そ、そうだ、逸平兄い、おめえが一緒にいってくれるんなら、百人力だがよう」
「世辞アぬきだぜ。大鳥の逸平は五人力さ。それでよかったら、どこへでもいってやら」

2

武士といっても、十石かそこらの合力米を拝領している下士だった。三笠弥平太（みかさやへいた）という。
「――なんの用だ」
横柄な顔で、宿所にあてられた弘明寺の庫裏に突っ立ったまま二人を見おろした。
さかひげをひねりながらにらみつける目に、又市はぶるぶるふるえだした。
「実は、あの、先夜の……」
言いよどんで逸平を見ると、彼は上がりかまちに大あぐらをかいて、うまそうに紫煙を輪に吹いている。例の長ギセルを失ったから、これは安物の竹のやつだ。
――た、助けてくれねいのかよ……。
又市は、ここへ来たことを後悔しながら、思いきっていった。
「先夜、その、お貸ししました銀子を」

「なに、なんじゃと！」

三笠弥平太はふといまゆをつりあげて、

「先夜の銀とは一体なんだ。おれに貸したと？　あほうぬかせ。おのれのごとき虫ケラに借銀しようか」

「いえ、あの、先夜、ばくちで、てめえが丁で勝ち、あなたさまが半の負けで……」

「ばくちだと。こりゃ！」

あわてて、三笠はあたりを見た。

朋輩が板戸のむこうで碁を囲んでいる。

当時のことだ。たびたびばくち禁止のおふれは出ていたが、下士のあいだでは賭博は盛んだった。が、草履とりから借銀しているなど不名誉きわまる。

「ば、無礼なッ」

つばをとばしたと思うと抜刀した。すっと左足がさがる。又市は身を翻すまもなく、左肩から右わき腹へ——大袈裟に切りはなされて、奔騰した血潮にまみれてぶっ倒れた。

逸平は、キセルを口からはなして、じろりと又市を見た。

そして、はじめてのように、三笠弥平太を見あげた。大あぐらをかいたままである。

「たいへんなことをおやりなすったね」

「致し方ない。無礼討ちだ」

三笠は肩を波うたしていた。白眼が血走っている。

碁石を握ったままとびだした朋輩に、

「いい掛かりをつけられたゆえ、切った」
三笠はそうとりつくろった。朋輩も、
「ウジ虫を切ったのか。中間、早く片付けろ」
なんだ、という顔でもどる。
逸平は腹の底からぶつぶつと煮えたぎってくるものを感じた。
「――どうなさいやすね」
と、三笠をじろりと見あげた。
「どうとは？　なんだ」
「いえ、お届けして切腹なさいますかね」
「バカを申せ、たかが下郎一匹……」
「ああ、さようでござんすかえ。じゃ、しかたはねえ、覚悟しておくんなさい」
「覚悟だと？　いらざる告げ口をすると」
「冗談いうねえ。大鳥の逸平は気がみじけえんだ、そんな回りくどいことをするけえ。おいらが又市のあだを討つだけさ」
「なに?!」
ぎょっとして抜こうとするより早く、逸平の手が三笠の大刀をひき抜いた。
わき差しをぬくひまを与えず、
「思い知れ」
殴りつけるような一刀――横なぎに払った。

びゅっと血が横にとんだ。右手がひじのところからはなれ、わきの下をざくっと胸まで切りこんだのである。

「げっ。三笠が」

朋輩が碁石を捨て、鯉口きってとび出すのへ、

「うるせえやい。静かにしろい」

血刀をふりかぶって、

「おいらア、又市の敵を討ったまでよ。殿様野郎には言いたいように伝えるがいい。こんどこそア仏の顔もがまんがなるめえ。こっちでお暇を頂きやすとな」

それだけ言い捨てると、血刀かついで、韋駄天走りに逃げだした。

——やっぱり、こうなる運命だったんだ……。

淡泊な気性だから、未練はない。

伏見を出るときは三日月が初冬の空に浮いていたが、途中から沈んで、暗い街道だった。寒風のなかを汗まみれでひた走り。

京へ入ってくると、まず目ざしたのは、洛東妙法院にほど近い下町。例の蛞蝓の五郎蔵の家。

「いるか。おいらだ」

例によって足の踏み場もない荒れた男臭い家の中に、黄色い炎の黒いすすけむりをあげている燭台を囲んで大きな男が五人、茶わん酒をあおっていた。

「お、逸平兄い」

大嚢疣右衛門が席をあけた。

「どうなさった」
「ふん、とんだことよ。さむれえを一匹ぶった切ったんで、こっちから追ん出てきたのさ」
「へえ、とんだ花合わせだの」
と、あきれた声をだしたのは傷野大炊之介。
「やいやい、何が花合わせだ。ひとがマンマの食い上げだというのに、にやにやするやつがあるけえ」
「なにね。切ったり切られたりが、どうやら茨組の作法らしいや。ごろうじ」
傷でひっつれたくちびるをしゃくった。車座のまんなかに三宝がおいてあり、飯の桶が載っていた。
逸平のぞいて、
「や、これは……なめくじらか」

3

桶のなかには生首が入っていた。
大童の髪もすさまじく、かっとみひらいた目が無念げだ。まだ生きているもののように、すごい表情だ。
「供養しているところたい」
入道頭の荒熊組人は、指し樽からじかにわんにくんだ酒をザブッと生首にあびせて、
「酒の好きなやつじゃったばってが、首だけになりよっては飲めんたい。こげなことになるとな

ら、もちょっと飲ませてやりゃよかったばい」

言葉は荒いが、情は濃い入道だ。

ふん、と首抜血舐之助が冷笑した。ひっつれ眼が、生首をじっと見て、

「見ろ、なめくじらの五郎蔵、生きているときから男っぷりがいいとは思わなんだが、首だけになっても、こう、なんとなくなめくじらそっくりだのう」

だれも笑わなかった。

「一体どうしたんだ、これは」

「切られたのさ」

わかったことを、という顔で血舐之助が、

「東ノ洞院大路でこいつ死んでいた。だれが切ったかしらんが、なかまの首をからすに突っつかせるわけにもいかんでの……」

「さアて、弱ったな」

逸平は疣右衛門のくんだ酒を一気にあけてから、腕を組んだ。

「弔いをしてやりていが、おいらに追っ手がかかるかもしれねえ。それに、当座の銀もねいので、なめくじらに借銀しようと思ってきたんだが」

「困ったのう」

と、大炊之介が、

「われらもからっけつじゃ。この酒アおどかして借りてぎたもんでの」

「やれやれ、茨組もこりゃ落ちめばいの」

「弱った……」
「弱ることアねえさ」
血舐之助がわんを指し樽にほうりこんで立ちあがった。
「これから借りにいこう」
「あてが、あるか？」
「金銀なんざ、天下の回り持ちさ」
尺余の長い柄を血すべりせぬように、みごなわで巻いた大太刀をかんぬきに差して、にやりとする。
火ざらの油がつきかけたのか、灯芯がチリチリ虫鳴きした。黄色い炎がゆらめくと、男たちの影は仁王のように壁に動いた。
「行こう、行こう」
みんなぞろぞろ立ち上がった。
もう深更だった。夜詣での人影もなく、五条の橋がいたずらに長い。
凍るような川風が賀茂の河原から吹きあがってくる。革袴のすそから冷たい風がのぼってくるようだ。
「寒くなったな。まるで冬だ」
「十月ではないか。もう冬さ。これで霜月になると比叡颪がの……」
なめくじらの生首が目にちらちらする。
逸平が追われる身になったことといい、先ほどだれかいったように、茨組にも冬のきびしさが

迫ったことを感じていた。

無頼者がなんとなく寄り集まっただけで、盟約とか目的とか何もない吹きだまりの枯れ葉みたいなものだったから、大風でも見舞われると分散してしまって、悔やむことはない。

が、同じような浪人の立場で、世間の白眼に抵抗して肩を組んだことが、やはり離れがたい情が通じている。

五人とも同じ思いなのか、むっつりと押し黙ったまま歩を運んでいた。

沈鬱な表情だった。蓬髪を逆だてる川風に追われるように、彼らは街すじへ入っていった。

「早く東西手ぎれとならぬかな。こうむしゃくしゃしてくると、戦でもないことにはおさまらぬ」

首抜血舐之助がだれにともなくたたきつけるようにいった。だれかが大きくくしゃみをした。

「おい、その家はどこだ？」

逸平が聞いた。血舐之助はきょろきょろと家がまえや塀などに記憶をもとめながら、

「たしか、このあたりだと思ったが……」

「たよりないのう」

「――あ、ここだ、ここだ」

立ち止まったのは油小路。なんと、青山権之助の屋敷ではないか。

「おいッ、これアなんとしたことだ」

「しっ」

「首抜、ここはおれの知っている女が……」

「あやどのだろう」

血祇之助が大きくうなずいて、
「だから来たのさ」
「どういう意味だえ、やいッ」
「大きな声を出すな」
と抑える血祇之助の声も低いものではなかった。
「ここの旗本青山が金銀たんまりあることは聞きだしてある。そいつをそっくりもらって……」
「やい、逸平はならず者にゃ違いねいが、まだ盗みはせぬぞ」
「容儀ぶるな。おぬしはあやを盗みだせばよかろうさ……」

4

その血祇之助のゆがんだ笑いの意味をさとったのは、邸内に忍びこんでからであった。
裏木戸は——なぜか、開いていた。
それも考えてみれば不自然なことだったが、そのときは、
——あやを盗みだして……。
降ってわいたような明日の幸せが現実化する喜びで、たしかに逸平は前後をかえりみる余裕を失っていた。
前からねらっていたとみえ、指図は血祇之助がした。
大曩、傷野、荒熊は街角で見張り、逸平と二人で入る。金銀を五人でわけるのはなめくじらの家、等々。

いつもは、そんなきちょうめんなところのない血祇之助なのである。

「――あ、逸平、ありゃなんじゃ？」

血祇之助が指さした。

勝手口につづく小部屋からほのかにあかりがもれている。いつぞや、お扇をたたきこんだ泉水にぐっと突き出た松の太い枝から、何やら白いものがぶら下がっていた。

「げえッ、あやではないか！」

目を凝らした逸平は、はじかれたように、灌木をとびこえて、駆けよった。

あやであった。

あわれ、寝巻きの上から太い麻なわでぐるぐる巻きにされ、足が水面につくかつかぬか――宙づりにされていたのだ。

「あや！　だ、だれがこんなむごいことを」

逸平は手をのばして、

「あの気違い女か、権之助か。ふてい野郎だ。いま助けるからな」

「あ、いけませぬ！」

あやはそのままの姿勢で苦しげに叫んだ。

「に、逃げて、逸平さま」

「ああ、連れて逃げるとも」

「いいえ、はかりごとです。これは逸平さまを殺そうというはかりごとなの。危ない！」

「なんと?!」

とっさにあやの言葉が解せなかった。
が、逸平は聞きかえそうとした背に、刃風を——おぼえのある刃風と、
「くせ者、かくご！」
黄いろい声を聞いて、
「しゃっ?!」
ふりかえりざまに背後をないで横にとんだ。
ざくっと手ごたえがあったが、逸平は重心を失ってよろめいた。もんどり打って泉水に落ちるお扇にかぶさるようにして、逸平も落ちた。
凍るかと思われる冷水だった。
ぶるっとけもののように全身をふるわせてはい出そうとするのへ、
「ああ、危ない！」
ふたたびあやの声。
仁王のように立ちふさがった首抜血祇之助が、大上段に大太刀をふりかぶっていた。
「血、血迷ったか」
「逸平、あやはおれがもらった」
へそまで切れろとばかりの一刀——
あやは思わず目を閉じた。さけようもない凄絶な太刀だった。
鏘然たる刃の声とともに、ふたたび水音がし、あやの脛まで冷たいしぶきがかかった。
うおっと、けものじみた悲鳴は、逸平のものか、血祇之助のものか。

ひょろりと、血舐之助が立ち上がった。泉水から出た。二、三歩あるいて、棒立ちになったと思うと、がぼっと黒いものを——血を吐いた。

そして、その血をなめるように、ばったり倒れた。

「い、逸平……」

かすかな、秋虫のいのちの灯が消えるような声で、血舐之助はいった。

「お扇が……きさまに恥をかかされたと、恨んでいたぞ。女の、女の色の恨みは、おそろしいぞ……」

お扇がこと切れたことを知らないのか。

「首抜、おいらはおめえに裏切られようとは思わなかったぜ」

寒気にふるえながら、逸平はあやを助けおろすことも忘れていた。

血舐之助は風の吹きぬけるような声で笑った。ゆがんだくちびるから、ぶくぶく血あわを噴きながら、

「あやが……あやの膚が、ほしかった……」

自嘲の声が、がぼっと、最期の血あわで消えた。四肢の痙攣はその後にきた。

お扇と血舐之助がどういう経路で結びついたかわからないが、共通の利害がこの悲惨を招いたのだ。

逸平はあやを助けおろすと、

「もう大丈夫だぜ」

全身ずぶぬれではあったが、あやとの生活を思うと寒気も感じない。

「去のう。こんな屋敷にいることアねいな。これから去のう」
「ええ、どこへでも。あ、少し待って。着替えを……」
「そんなものアいい。なんとしてでも買ってやら」
「いいえ。そのままでは逸平さまが……」
「おいらなら平気の平左だよ。さ、去のう」
裏木戸から出ようとしたとき、大蟇疣右衛門が走ってきた。
「いけねい。役人だ」
「ちえっ。大蟇、逃げろ。明日なめくじらんところで落ち合おう」
足音がみだれ、なにやらわめく声が聞こえた。
荒熊か傷野が誰何されたのだろう。逸平は、あやをこわきに抱えると、血刀を右肩にかついで宙をとんだ。

朝妻舟

1

京の所司代は、いうまでもなく歴代天皇と皇族に対する目付を主眼として設置されたものであったが、この少し前から京町奉行が廃され、所司代板倉勝重がこれを兼ねていた。
したがって、洛中治安の役人もその輩下である。

葉月半ばに家康が帰国したので、いくぶん警戒はゆるんでいたが、冬に入っては放火、強盗、辻切りが増加する。

所司代のちょうちんをかかげた役人が、三人組み五人組みで洛中を見まわっている。

挙動不審と見られた荒熊組人が役人を投げとばしたのが彼らを緊張させた。

いてた夜空を裂いて、呼び笛がひびいた。

それは、一犬虚にほえて万犬これにならう、というにひとしかった。たちまち、やみのかなたで遠く近く、こたえる笛の音がきこえてきた。

「これアいかん」

逸平は血刀をとりなおした。

呼び笛とはよくいったものだ。呼ぶのにこたえ、こたえては呼び、次第に輪をせばめてくる。

盲滅法に逸平は横道へ駆けこんだ。が、前方をかすめたちょうちんにおどろいて、またまがった。

「どうしよう、あや」

「どうでも」

と、あやは逸平の厚い胸にすがったまま、

「あやは、逸平さまと御一緒なら……死のうとも」

「死ぬものか。殺すものか。やっと一緒になれたおいらたちだ。くそ！」

一刻も離れられない。だが、鬼神をひしぐ逸平でも、この囲みを突破するには、あやが足手まといだ。

目の前に築地が見えた。
——寺か？　墓地に隠れて……。
と思ったとき、かたっと音がした。裏木戸があいて、ちょうちんが出た。ひょっくりむじなのような顔がのぞいた。
役人ではないことが、逸平をほっとさせた。彼は血刀をとりなおして威嚇しようとすると、
「あんれ、先日の……」
「なに？」
「本多さまの逸平の兄いじゃがせんけ」
「逸平だが、おめいは……あ、富か。ただの富か」
いつぞやばくちですてんてんにした大久保長安の草履とりではないか。
「丁度いいところであった。実ア追われているんだ」
「へえ？　あの笛がさいで」
富はちょろちょろとあたりをながめ、逸平を見、あやを見、にたりとしてうなずいた。
「ようがすて。合点ですて」
「引き受けてくれるか」
「ねい、この西行寺にはわっちのお殿様がお泊まりなんで、役人は入れんですて」
「この女だけでいい、かくまってくれ。頼んだぞ」
むじなづらで小心者らしいが、悪人ではなさそうであった。逸平は身をひるがえした。
あやが呼びとめようとしたときは、逸平の姿はもう半町も先を走っていた。

そのときは、ちょうちんと呼び笛が方二、三町の地域を包んでいた。

叫喚は傷野大炊之介が自慢の大車輪で大太刀に血を吸わしているのであろうか。

突然、眼前にちょうちんがとんできた。

「あっ！」

役人が投げたのだと気がついたときは、おもてをふってよけながら、片手殴りに切り下げていた。

六尺棒が足の間に突きだされる。逸平の巨体は三尺とんだ。

「御用のすじだ、刀を捨てろ！」

「なに！」

その声にむかって丈いっぱい、血刀をたたきつける。相手は受けた。が、受けたまま、頸動脈に切りこまれてのけぞった。

「のけ！　のけ！　のけ！」

一声ごとに、刀はひらめき、血はそのたびにしぶいた。返り血がなまぬるくおもてに流れる。

逸平もどこか切られたにちがいない。が、全身がかっかっと火のようで、局部的な疼痛は感じなかった。

「くそ！　くそ！」

逸平は走った。切った。そして走った。

2

斬死したのは、傷野大炊之介ひとり。荒熊も大轟も切りぬけて、妙法院近くのなめくじらの巣へ帰ってきた。

「――そうか、死んだか」

逸平は残りの冷や酒をあおりながら苦笑した。

「もうあの百傷も見られねえ。首抜のおかげでとんでもねいことになったの。この巣も長いことはあるまいぜ」

「どげんする、これから」

荒熊が入道頭に受けた傷をまゆをしかめて酒で洗いながら、

「京も住みにくくなったばい」

「ふん、お天道さまと酒のにおいはどこへ行っても縁は切れまいが」

「――大轟」

と、逸平はいった。

「みんな集めてくれ。茨組をどうするか、みんなの話を聞いてからにしよう」

「承った」

大轟抚右衛門は、押し入れをごとごといわせていたが、破れ編み笠を捜しだして、昼まえの光がまぶしい小路を出ていった。

そのあと、奥の部屋で逸平はひと眠りした。

荒熊が刃こぼれした刀をひきそばめて役人に備えているというものの、太平楽に雷のようないびきをかいて眠りほけている。

「豪傑も多かばってが、こげな男も少なかばいの」

茨組のなかまが、追われとんびのように、三々五々集まってきたし、やがて日が暮れたが逸平は目をさます様子がない。

「いつまで眠る気じゃろ」

そのまくらもとで、なかまたちは暗い額をよせあって、

「いけんの、いけんの、所司代が浮浪人狩りやるそうなぞ」

「茨組に目をつけてか」

「革袴組では五、六人ひっくくられたちゅうの……」

「いっそ火でんつけるか」

「放火してどうする?」

「知れたこと、京じゅうの金銀財宝そっくりちょうだいするべえ。手むかうやつはぶった切り、ついでに若い女も……」

「聞こえるがの」

と、お神楽長次がそいつをひじで突っついて、

「逸平兄いはそないことが大きらいやよっての、あかんあかん」

「あかんか。火つけも、女さらいも、強盗もあかんいうたら、路銀の出どころがないわ」

「なんぞ方策があるじゃろ……したが、いつになったら目エさますことかいの……」

いらいらしてくるが、逸平に畏服している連中だ。酒がなくなると、近所から柿や榴をもいできて食う。

夜半、足音あわただしく大蔓疣右衛門が帰ってきた。破れ編み笠をなげ捨てると、

「大変じゃ。逸平、一大事だぞ」

乱暴にゆさぶって、腕をひっぱる。

「あアあ、いい気持ちで寝ているところを、何をさらす」

「寝ぼけている段か。西行寺に寄ってみたところ、大久保長安は出立したというぞ」

「大久保？」

「ほれ、おぬしの女、あやのことよ。もはや西行寺にはいないぞ」

あっと、逸平は冷水を浴びたように目ざめて、はね起きた。

「あやが、なんとしたと?!」

寝耳に水の驚きであった。

身の危険も忘れて、彼は小路へとびだした。

なかまがとめようとしたが、奔馬の勢いであった。狂った猪にこそひとしかった。

西行寺に走った。

「――いない！」

納所坊主をつかまえて聞くと、すさまじいけんまくにおびえて、

「一刻あまりまえに発足なされました」

という。

「あやもか。女もか。女も連れてか?!」

「女? 女なぞ知りまへん……」

うそをいっている顔ではない。

むじなの富が悪心を起こして連れ去ったのだろうか。

大久保長安は佐渡奉行である。道は決まっている。逸平はその足で追うことにした。

京から大津まで二里二十五町——ちなみに、この里程基準も家康の命で先ごろ大久保長安が制定したものである。

六尺を一間、六十間を一町、三十六町を一里と定め、東海、北陸、東山三道に一里塚を築いて旅人に便ならしめたのも、一昨年新設の所務奉行に任じた長安の発案である。メートル法施行で現在の一里塚はわずかに史跡のおもかげをとどめているだけであるが——閑話休題。

ひた走りに逢坂山を越えて大津まで、判刻たらずで駆けぬけた。

暁の一番船が、いま船着場を出たところ。

「おーい、その船待った!」

汗の流れるにまかせて、逸平は呼ばわった。

空はやや白んでいたが、船上は暗い。わずかに馬や人影が見えるくらいだ。

「待てえ!」

「呼んでもむだだね」

と、笑いながら人のよさそうな老人がいった。

「朝妻船は呼び返しがきかんでの」

朝妻船は北陸道を京へのぼる者の船便であった。往古から湖北の大港として知られ、ことに寿永の乱後、都落ちした平家の女房などの遊君とおちぶれ船を流して客をもとめたという哀話が、世上にその名をとどめているが、慶長のこのころは、ただの船便で、港も米原に移るにしたがい、朝妻船の名はすたれかけていた。

「な、なんとかせにゃならんのだ」

「一体、どうなさいました？」

「あやが……おいらの女が連れていかれたのだ」

「へえっ。そら、悪いやつじゃ」

老人は急に逸平の手をつかんだ。

「よっしゃ、わしの舟に乗りなされ。追うてとりもどしなされ」

「かたじけねえ！」

「こうござらっしゃれ」

小舟は足が速い。幸いと風がない暁で、三十石ばかりの帆はだらりと垂れている。

すぐに追いついた。逸平が舷にとび移ると、

「そちは先日の下郎ではないか。なんとしたぞ……」

大久保長安が、小柄なひょろりとした姿で床几からのびあがった。

3

あやの姿は、朝妻船のなかには見あたらなかった。

十人ほどの家来と、あの『黒あらし』という長安の愛馬。そして、多少の荷物。その積み荷も人間を入れるほどのものはない。

長安は、逸平の無礼をとがめもせずいった。

「富から聞いたが、あの女は西行寺を出立まえに出ていったというぞ」

「……」

「よほどそちが恋しかったとみえる。ははは、そういえば、河原の舞々でなんとやらいうたあの女も、そちを好きじゃとの。わしもあやかりたいくらいじゃ……」

揺れる燭の灯かげにも、鶴のような痩軀のせいか、終始微笑をたたえているせいか、翁のように清潔さに見えた。

富と直接話したかったが、あるじがそういうのだ。『黒あらし』のくつわをとって富はこちらをむいていた。目があうと気弱そうに視線をそらす。

——何かあるな……。

とは思ったが、船内にいない以上、ひきさがるよりほかにない。

暁闇の湖上を小バカにしたように遠去かっていく朝妻船を、くちびるをかんで見送る大鳥逸平だった。

どこへ行ったのだろう？　ほんとうに、西行寺から一人で……。

あやにはなめくじらの住まいを教えてはない。では、伏見の本多家へ行ったろうか？

先夜、油小路に招かれた長安が、あやの可憐な容姿に目を細めたことを知らない逸平には、どうしても長安が疑えない。

あの、富があやに手をだして、あやは逃げだした……いんにゃ、あのむじな野郎はそんなきたねいことはしねえはずだ……。

苦い酒だった。

親切な老人にともなわれて、町はずれのとある家で酒肴の膳をふるまわれた。

木賃宿のようであったが、化粧の女がしどけない姿で酌にきた。女郎屋か、と気がついた。女の話では、老人はここのあるじの弟ということであった。

「銭はないぞ」

最初にことわったが、

「おもい人の行方が知れぬとはお気の毒なこっちゃ。銭の心配なさらんでよろし」

こんな商売に似合わない親切心が、うつろな胸にしみた。

酒量は底の知れない逸平だったし、酔おうと思っても一向に酔えないまま、杯を重ねた。さすがにおかみは渋面つくっていたが、いまさらいやとはいえない。

昼をまわってからだった。

おもてを通りかかった浪人の群れの中から、奇妙な声をだした者がある。

「逸平兄いやないか」

「ほんなごつ、こらよかところで会うたばい」

なまりに、荒熊組人の九州弁を聞いた。

八丁飛びの猿太が駆けよった。大嘉疣右衛門、お神楽長次——この四人づれだった。

「おう、おぬしたちか」

見まわした目に、四人とも、大小の生々しい傷、包帯ににじんだ血が異変を象徴している。四人はこもごも話した。

「そうか——所司代にやられたか」

あれから役人に囲まれて、なかまの多くは切られたり捕らわれたりした。四人はいのちからがら東山に逃げこみ、江戸へ下るつもりの道中というのである。

「——江戸か……」

いまの逸平にはなんのあてもない。生きる気力さえ失ったようであった。

石山寺の鐘が七ツ（後四時）を打ちはじめたとき、あの老人が息せききって走りこんできた。昼船の客を見なかったか、というのである。

老人は野洲沖で漁をしていたが、近くを通った昼船に四、五人の武士に囲まれるようにして、美しい女性が見えた。様子がどうやらお話の方らしいと思い、急いでこぎもどったのだが、という。

「それだ！」

逸平は瓶子を投げ捨てて立ち上がった。

「ひと船おくらして、くそ！　そうはさせぬ。行き先は米原だな」

礼を述べる間も惜しく逸平は走りだしている。

「おい、まて、まて。おれたちも一緒に行くぞ」

大蟇たちは追って出たが、荷駄の馬を無断でひきだすや、鞍もない背に飛びのった逸平に問屋場人足とともにぼうぜんとするばかりだった。

十六里八町の道のりであった。逸平は馬腹をけりつづけた。駄馬は何度か脚を折りそうになったが、あわをかんで走った。

米原についたときは、もう空に星が光りはじめていた。

「船着きはどっちだ?!」

馬上から往来の者に怒鳴った。

船着きに馬をあおってきた逸平の耳に、

「逸平さまッ、逸平さ……」

女の声はあやのものであった。

朝妻船は着いていた。客はほとんど降りて、上りの客が乗りこみかけていた。

逸平は見た、四、五人の武士にひきずられるようにして砂浜を遠去かるあやの白い姿を。

「おのれ！　待てい」

もうひとけり、馬腹は血を吹いたのか馬は悲しみと憤りをこめていなないた。しんがりに追いつくや、馬上から切りさげた怒りの太刀。どこを切ったか致命傷を与えたかもしらぬ。

二番目のやつに迫った。そやつはけなげにもふりむいて刀をわきがまえにとった。

「うぬ、女さらいめ、死ねッ」

鮮血を切っ先からとばして、怒りの二の太刀が、しかしむなしく宙を切っている。あざやかに身をかわした敵になぎはらわれたのか、馬はするどいいななきでがくっと前脚を折った。

逸平のからだは三間も先へ投げだされた。が、起きあがりざまに夢中ですくい切りしたのがきまった。

返り血をなめて、逸平は三人目へ追いすがった。

その形相がすさまじかったのだろう。抜刀したまま、わき差しをぬいてなげた。これをはねとばした血刀は、そのまま渾身の力をこめて心ノ臓を刺し貫いていた。砂をかんで突っ伏した男の背に足をかけてぐいと太刀をひきぬいたとき、彼はあやの悲鳴を聞いた。

漁師のものであろう小舟を見つけた二人が、あやを乗せて沖へこぎだしていたのである。

「あや！　助けに行くぞ、どこまでも！」

五日の月が空にさえていた。その月光を砕いて、逸平はあやを追った。どこまでも、どこまでも――

夜ふかく

1

研ぎべりの鎌を思わせる月が、竹生島の肩にかかっていた。

月はゆれていた。島かげの上、竿頭一尺にさえざえと光ってゆれている。

湖上にいまにも転落しそうな月を――見あげているうちに、あやは目まいをおぼえた。

小舟が大きくゆれて波に乗っているのだ。

不安と恐怖と船酔いで、胸がむかついてきた。吐き気がこみあげる。

あやは、ふなばたにしがみついたまま、のびあがるようにしてふりかえった。

「逸平さまーッ」
何度目かの叫びだった。
すでに、逸平の影も見いだせぬひろい湖水を、涸れた声はうつろにすべり月光の砕ける波間に消えた。
「逸平さまーッ」
「――よせ、むだなことじゃ」
ぐいと片そでをひかれた。
あやが湖水に身を投げるのを危惧しているのか、その年配の武士は、最初からたもとをつかんだままだった。
「逸平、と申すか。あの暴れ牛め、いまごろはおぼれてしもうたことであろう」
「ああ、逸平さまッ……」
「冥福でも祈るのだな」
感情をおもてに表さないのは年の功か、不気味なくらい、落ち着いた男である。
大久保長安が目をかけているのであろう、属吏の根性を腹の底から持って生まれたような物堅い気質に見えた。
轟下につけられた三人の足軽を失ったことにも、まゆねひとつ動かす様子がない。
艫をあやつっているのは、これは三十前後の上背のある壮漢。慣れぬ艫をとるために肩はだぬいでいたが、隆々たる筋肉が月光を浴びて、露にひかった木の根瘤のようであった。
「やれやれ、骨を折らしおったぞ」

彼はほえるような声でいった。
「このへんで少し休むか」
「小田井、休むのは後にせい。まだ安心はならぬぞ」
「なんだ。おぬし、おぼれたというたではないか」
「なまなかなことでは死ぬる男とも見えぬ。放心は禁物じゃ。とにかく、先を急ぐことだ」
「ちぇっ、腕が凝って棒のようだ」
それでも、ぶつくさいいながら、小田井久馬は船足をおとさなかった。
「殿よりの大切な預かりもの、早々に追いついてお渡しするまでは気をぬいてはならぬのじゃ」
有村瀬左衛門という名だった。
やせてはいたが、針金を通したように、腕に緊張を見せて、あやのたもとを放そうとしない。
「——ああ、逸平さま……」
はげしい絶望におそわれて、あやは泣きくずれた。
——もう会えない……あたしは遠い見知らぬところへ連れていかれてしまいます……。
どこまで非運なふたりなのか。
不幸な星のもとに生まれた身を悔やんでもしかたがなかった。だが、故郷の武蔵大鳥村から出たきり、二度と相会うことがなければ、このような悲しみを知ることはなかったにちがいない。
運命はあまりにも酷薄であった。
——なぜ、京で逸平さまにめぐり会わせてくださったの！
天の配慮が、いまはうらめしい。

神が憎い。

空腹に、美味な料理をにおいだけかがされたように。いや、そんな程度ではなかった。心細い異郷での恋しい人とのめぐりあいは、地獄での仏にもひとしい。

いま、その逸平の手から隔離されたことが、厳然たる事実となってあやを襲った。

打ちのめされたように、ふなばたにおもても伏せて、あやは死を思った。

——死にたい……。

涙にぬれた目に、まさに五日の月は湖面に没しようとして、竹生島が夢のように淡く見えた。死の恐怖が消え、五彩の夢幻のもやが彼女を柔らかく包んだ。

——逸平さま、あやはまいります……。

ふらふらと立ちあがろうとした。

ぐっとそでが、ふたたびひかれた。

「放して！　お慈悲です」

かなしい声にも耳をかたむけぬ無情な手が肩をおさえた。

「死ぬのはそなたの勝手。じゃが、われらの役目が終わった後にしてもらいたいものじゃ」

奇妙なほど落ち着きはらった瀬左衛門であった。

2

三人が翌朝、かなり日が高くなってから目をさましたのは、飯ノ浦の漁師の家であった。

昨夜遅く、この砂浜にあがって泊めてもらったのである。

「お目ざめか。よく眠れたかの」

小田井久馬が手ぬぐいをしぼりながら入ってきた。

あやは黙っておもてをそむけた。一夜のうちに憔悴が目立って、目にはクマができているし、透き通るばかりに青白いほおだった。

昨夜は何度脱出をこころみたことか。

そのたびに、有村瀬左衛門がむっくりと身を起こした。無言なのが、一層不気味に、あやを威圧した。

彼女は帯も解かずにうすい夜具に身を横たえて、独りしのび泣いた。そうして、はげしい疲労には逆らいがたく、いつか泣き寝入りに寝こんでしまったらしい。

「顔を洗うがよい。すぐに出立じゃ」

瀬左衛門はもう旅支度を整えてわらじのひもを結んでいた。

このあまり健康とも思えない痩軀初老の男は、いったい昨夜は一睡でもしたのだろうか。

役目大事の緊張が、気力を充実させているだけかもしれないが、若さにまかせて懶惰に見える久馬よりも怖いような気がする。

「なんだ、朝飯もとらずに行くのか」

「追われているものと思え。あの狂い牛めは、骨が舎利になっても追ってこようぞ」

「そうかなあ」

久馬も、凄絶な逸平の太刀さばき、怒髪をさかだてた猪のような姿を思いだすと、しりがむずむずしてきて、

「それなら握り飯なと結ばせるか」
「干し飯がある。途中で湯をもらえばよい。問題はどの道を行くかだ……」
外に出ると、すぐ目の前に賤ガ岳がこんもりと盛りあがっていた。高い山ではない。四百メートルそこそこの小山だ。
七本槍で有名な古戦場。もっとも、そう古い話ではない。が、なんといっても関ガ原の戦からまだ五年。戦話は関ガ原に奪われている。
「殿はどのあたりを通っておられるか」
北陸の本街道は、この賤ガ岳のむこう木之本から山にかかって、中之郷、柳ガ瀬、椿坂からけわしい坂道を栃ノ木峠を越えて越前に入る。
朝妻船を一便ちがい……半日の誤差がある。
「もう椿坂峠にかかっているかもしれんな」
「とすると、本街道を急いで追うて、追いつくのは今庄か武生あたり……」
本街道はしかしさけねばならなかった。
追跡の目をくらますために、敦賀道をとることにした。遠まわりになるから、さらに一日くらい遅れる勘定だが、
「なあに、佐渡までに追いつけばよいわさ」
と、小田井は何を思ったかにやにやして、
「美しい女を連れての旅。いい気保養になるというものだ」
「それどころかッ」

瀬左衛門はむずかしい顔になってしかりつけた。

集福寺で朝飯とも昼飯ともつかぬものを食べた。干し飯を熱湯で浸して湯づけにして食べる。携帯食糧である。昼すぎには三方ガ峠を越えて越前に入った。

これから下りになって、疋田、小河口から敦賀にでる。

山坊六里の道を強行したので、敦賀に着くと、豆が破れて、あやはもう一歩も歩けなくなってしまった。

「やむをえぬ。宿をとろう」

苦い顔で瀬左衛門がいうと、久馬はにたりとして、

「あたりまえだ。美女には無理だった。殿に言上すれば、治癒するまで出湯になり逗留せいと仰せあるだろう」

「小田井、おぬしだけ先に走って殿にお知らせしてこぬか」

「そ、そりゃいかん、いかんよ。おれがいないと、有村老人一人では心細い」

「老人呼ばわりはよさっしゃい。まだ腕ではおぬしにおくれはとらぬ」

「どうだか」

と、久馬は全身で軽侮をあらわにして、

「老寄りの冷や水というからな。大言壮語はよしたほうが御身のためだろう」

3

昨夜は泣くだけ泣いたせいか、涙が涸れたように絶望がうすらいでいた。

――どうせ佐渡までは百何十里。ひと月ちかくかかるのだから……。
そのあいだにすきを見て逃げだせばいい。それは不可能ではなさそうであった。
――逸平さまは必ず探しに来てくださるはず……。
それは恋を知った処女の信仰にちかい絶対的なものだった。
――いざというときに、足が萎えていては逃げだせない。今夜はゆっくり疲れを休めましょう……。
あやは逸平のおもかげを胸に抱くようにして目を閉じた。手を胸にあてて寝ると夢を見るというが、逸平の夢であってほしい。
敦賀はそのころは一漁村にすぎず、木賃宿などもない。
三人は村はずれの水神の社に雨露をさけて仮寝の宿としたのである。
どれくらい眠ったろうか、彼女は胸苦しさのあまり、うめきをもらした。寝がえりをうとうとして、はっと、目がさめた。
「あっ……」
重いものが、からだにかぶさっていたのだ。
「だれ！」
はねのけようとして、気がついた。顔にかかる臭い息、むうっと汗臭い男。
「あっ、放して！」
「し、静かにせい。な、な、黙っていればだれにもわからぬことだ。殿にもわからぬ」
狼狽しながら、ずうずうしく久馬はささやき、その無骨な手はあやの胸をまさぐり、あわただ

しく腰にすべりおりる。
「なにをなさいます。きたない！」
「な、なにがなんだ。なにがきたないものか。男と女はだれしも……」
盤石のような重いからだなのだ。
あやは腕を突っ張り、顔を、耳を、頭を、胸をはげしく打った。が、柔らかい女の手は、小田井の厚いほおにはむしろこころよい刺激でしかなかったし、その抵抗は、一層たくましい男の情欲をあおった。
「し、静かにせい。おたがいが楽しめばよいではないか。の、騒ぐなというのに。有村が目をさます……」
「とっくに目はさめておる」
やみのなかから瀬左衛門の声が聞こえた。
「あっ……」
「たわけたまねはよせ」
静かな声だったが、罪悪感がさすがに小田井の行為をやめさせた。彼ははじかれたようにあやのからだから離れ、大刀をつかんだ。
しかし、瀬左衛門は身をおこす気配も見せずに、
「寝ろ。明朝は早立ちじゃ」
といっただけだった。
殺気は消えた。久馬の情欲も消えた。瀬左衛門を切り、食禄を失ってまで、あやのはだをもの

にするほど狂っていたわけではない。

「許せ、どうも、おれア……寝ぼけたらしい」

照れたように、くっくっとやみの中で笑い、ごろりとほこり臭い床に身を投げると、まもなくずうずうしいいびきがもれてきた。

——助かった……。

あやはほっとした。

と同時に、こんな男にもてあそばれようとしたじぶんのみじめさが悲しかった。

そのまま、まんじりともせず、夜を明かした。

翌朝、まぶしいほどの旭光のなかでも、久馬は格別わびるでもなく、謙虚になるでもなく、けろりとしていた。

あやを見る目も昨日に変わらない。

瀬左衛門もあらためてとがめるでもなかった。ほんとうに寝ぼけてのことと信じているのか。だが、不必要な口は一つもきかない瀬左衛門の黄色くしぼんだような表情を見ると、そんな単純な意味ではなさそうに思えた。

敦賀の浜からは船で行くことにした。

あやの足が治癒するまで一カ所に滞留できないからである。

海上三里ほどで船を捨てた。陸地にかかると、すぐに山越えだ。山中峠の難所には干し魚を運ぶ馬を頼んだ。

「手間のかかる女だ」

久馬が舌打ちするのを、

「役目ではないか。物見遊山ではないぞ」

「それにしても足弱がすぎる。これでは、寝間もちとものたりないようだのう。殿も酔狂な方だ」

「殿も以前は猿楽の巧者。おぬしのような獣じみたところはない」

「ははは、女にはおれのような男が好かれるのさ。胸毛のない男は一人前ではないと、ある女がいうたぞ」

「たわごとは置いて、道すじに用心怠るまい。あの狂い牛がどこからとびだしてくるやもはかり知れぬでの」

瀬左衛門は、峠にかかると、馬わきから離れず、刀の柄袋もはずしていた。

――小心者め、逸平は琵琶湖でとっくにおぼれていようわさ。二度と現れるものか……。

久馬は逆側の馬わきを歩きながら、あざわらった。目のまえに、あやのほそい足がぶらぶらしている。裾褄からもれる脛の白さが、ふっと昨夜の感触をよみがえらせる。

――処女なんだ、やはり……。

必死の抵抗には、男を知らない女の恐怖と不安と憎悪があった。堅いつぼみを、手で、ひざで、じわじわと開かせるときの愉悦――それを思うと、血がかっと熱くなって、五体に逆流する。

久馬は、あわれに白い脛から目をそらせて顔に噴きだした汗をぬぐった。

「――有村さん」

と、いつにない笑いを含んだ声でいった。

「一丁、賭けようか？　あの狂い牛が出るか出ないか。出ないほうにおれア百両でも賭けるがね」

瀬左衛門は、緊張にほおを青くしていて、答えようとしない。

しかし、久馬には誤算があった。殺しても死なない大鳥逸平は、その夜、忽然と出現したのである。

4

その夜の泊まりは今庄の宿。越前では福井、武生についでの北陸街道の宿場だから、木賃宿が軒を並べ、問屋場もある。

三人がわらじをぬいだのは、宿はずれの『荒井屋』。背戸から鍋倉山への道がついている。夕餉を終えて、ふろの順を待っているときだった。

おもてで大きな声がした。

「ちょっとものを尋ねるが、京からきたあやというおなごは泊まっておらぬか？」

――逸平だ！

三人が同時に聞いた。

反射的に、久馬があやにとびついた。抱きすくめて口をふさいだ。

瀬左衛門のほうは片ひざたてるや引きそばめた大刀の鯉口をおしくつろげた。闖入すれば抜き討ちに切る気がまえである。

「――あやという名だ」

ほえるような逸平の声が筒ぬけてくる。

「十七歳でな、美女だぞ。坂東生まれだが、京でも上臈におくれはとらん美女だ。おぼえはないか……」

歯ぎれはよいが、このあたりでは聞き慣れないたたきつけるような調子なので、すぐには意味がのみこめなかったのであろう、この家の亭主がなにやらくどくどとしゃべりだしたのが逸平には通じないらしく、

「いるのかいないのか、美女だからわからんはずはない。おまえは女がきらいかい。うそつきめ。女ぎらいの男なんてうそつきか不具だ。うん、美女はだれが見ても美女だからな。たしかにこの宿場に着いたのを問屋場の帳付けが見たのだ……」

瀬左衛門は、そのあいだに素早く着替えや破籠などを笠にいれて、久馬にあごをしゃくった。あやは口をふさがれて、手足をばたばたさせていたが、久馬の腕から逃れることはできなかった。

横抱きにされたまま、裏口から連れだされてしまった。

「――驚いた」

と、長嘆息して久馬がいった。

「あやうく百両ふいになるところさ」

「冗談どころか、急げ。あの様子では地獄までも追ってくるぞ」

街道を横切り、日野川を渡った。

街道は武生までは川につかず離れず北上している。北ノ庄の西郊で足羽川を合わせ、九頭竜川

に合流して日本海に注いでいる。
この川沿いの道を二人は風のように走った。
さるぐつわをかけられ、手首を縛られたあやは、久馬に横抱きにされて虚脱したようになっていた。
川霧がよどんでいる道であった。木々が、星が、走馬灯のように流れた。瀬の音が遠ざかったと思うと、ふいに耳のそばで聞こえたりした。
どれくらい走ったろうか。
時間も距離も定かではなかった。あやはほとんど失神したようになっていた。
「――はて、道をあやまったらしいぞ」
久馬が肩で息をしながら足をとめた。
川沿いの道が、いつか上りになっていたのである。水の流れにひとしく走っていたはずなのだ。
「いや、この川は武生までは平行しているはずじゃが……」
追いついてきて、瀬左衛門は笠と荷物をそこへ置いて、流れをすかし見た。
すでに上弦の月は沈んで、星かげだけが頼りの山路だった。
「なるほど、川をさかのぼっていたな……久馬、これはいかにも誤ったぞ」
「どこで迷うたか。無我夢中でとんできたが」
「これは支流じゃ。思いだしたぞ。たしか湯ノ尾のあたりで流れが分かれていたようじゃ」
「そうか。では、そこまでもどろう」

「うむ。じゃが……急ぐこともあるまい」
瀬左衛門は考え深げにいって腰をおろした。
「逸平めはわれわれのことに気づいたはず。とすれば、いまごろ本街道を狂ったように走っているであろう」
「なるほど」
「じゃま者は先へやるにしくはない。あの狂い牛め、佐渡まで盲滅法に走っていくにちがいない。殿の一行に追いつけば、こんどこそ騒動じゃ。殿の手にかかるか、土地の役人にひっくくられるか……」
「なるほど。そのあとから、おれたちがゆるりと行くか。なるほど」
「思いどおりにいくかどうかは別。とにかく、あやさまに休息を」
「あやさま」
「殿のおもい女、お部屋さまではないか。大切にせねば役目を果たしたことにもならぬぞ」
「やれやれ、まるで赤子のようだ……」
久馬は、草むらに女体を横たえると、さるぐつわを解き、手首のいましめを解いた。
だが、まだ宙をとんでいるようで、あやは奄々としてうすい胸をあえがしていた。えりをあわせ、すそをなおすのもやっとで、身を起にすこともかなわない。
すそのみだれを気にする女の手が、星あかりのほのかななかで、妙になまめいて見えた。
ほおが熱くなった。瀬左衛門に心のうちを悟られるのを恐れるように、白い牙をむく流れに目をそらしながら、

「――久々に湯を浴びようと思った矢先に、また汗をかかされたわい。有村さん、村名主の家でも探して宿と湯にありつこうではないか」

5

深夜にたたき起こされた不満も不審も、黄白のまえには霧散してしまうのか、村名主は若干のゆずり葉銀を握らされると急に恵比須顔になって、作男や下女に支度をいいつけた。

「あやさまが先に」

と、瀬左衛門が勧めるのを固辞して、あやは二人のあとから湯をつかった。

小田井久馬の情欲にほけたような目がたまらなかったからである。

わずか数日ではあったが、旅のあかはまるでひと月も着替えしなかったように湯を汚した。

湯桶のなかに身を沈めると、けだるいような解放感が四肢の関節を伸ばすようであった。

――いまごろ、逸平さまはどこに……。

逸平のたくましい胸板を思い、腕の頼もしい強さを思うと、切なさでいっぱいになる。

湯のおもてから、恥じらいながら顔をだしているような双の乳房が、無性にいとしい。

――これも逸平さまのもの……。

ひとりほおを赤らめて、そっとすくうように手のひらをそえる。処女の誇りとかなしさを秘めて、乳房はひそかにあえいでいた。

このふろは下から燃すのではなく、別に沸かした熱湯を注ぐものであった。ひろい土間の一隅に湯桶をすえただけだ。

囲炉裏ばたの灯も、へっついの火あかりも直接照らさないから、うまい具合いに暗くなっている。現在でもある地方ではしばしば見うけられることだ。

二人を先に入れてしまえば、卑猥な視線をむけられないから、と、あやが思ったのは軽率だったようである。

ほの暗いところで、のびのびと湯をつかい、あかを洗い流すと膚をふきにかかったとき、彼女は異様な息づかいを聞いた。

荒い呼吸だった。

あかりとりの窓の外に。

——だれ……?

はっとして、胸を覆った。

が、いま時分だれも外にいるはずがない。馬か、牛か——家畜の呼吸が聞こえたのだと思いかえした。

しかし、それは瞬後に消えた。

窓のそとに燃えるようなひとみがあった。ぎらぎらと油を流したような双のひとみ——

あやは我にもなく悲鳴をあげていた。

「だれかきて!」

寝所から、瀬左衛門が刀をつかんでとびだしてきた。囲炉裏ばたから名主の老爺も腰をあげた。

「どうなされた?」

「だれか、外に……」

あやは、湯桶のかげにうずくまって、きれぎれに叫んだ。恐怖と羞恥で顔があげられなかった。
なに、だれが、さような……」
勢いこんで瀬左衛門が走りだそうとするまえに、妙に肩を怒らせて久馬が入ってきた。
「なんだ、何を騒いでいるんだ」
「あ、久馬。き、きさまかっ」
「なんのことだ」
「卑劣なことを！　何度申せばわかるのじゃ」
「うるさいの、おれアちょっと夜露にうたれてきただけだ」
白々しい弁解のうちにも、久馬の視線は、暗がりのなかに白うさぎのようにうずくまったあやの膚をなめまわすように光っている。
湯気に包まれて、五体を洗う処女の姿態を存分に見たのだ。
日ごろにない瀬左衛門の怒りが、かえって久馬を居直らせることになった。
「くそ！　じゃまな老いぼれめ」
口走るや、一足さがって、ぱっと抜き討ったのである。
「バカッ」
瀬左衛門はかろうじて抜きあわせた。
「死ね、死ね、じゃま者め」
刃風するどく久馬は切りこんでくる。
「くそ！　この女の裸を見て、が、がまんができるかい。くそ！　糊扶持なぞくそ食らえだわ」

「久馬、狂気したか。気を鎮めい」

目は血走っていた。瀬左衛門は一歩一歩さがりながら、すきを見て刀をたたきおとそうとしたが、自慢するだけ久馬の太刀さばきは確かなものだった。くわえて殺気が剣勢をすさまじいものにしている。

名主屋敷は時ならぬ切りあいで大騒ぎになった。

――いまなら逃げられる！

あやはいつまでもすくんではいなかった。

好機だと思った。すばやく膚着をまとうと、着物をつかんで戸外に駆けだした。

切りあいながら、しかし瀬左衛門は見逃さなかった。

「や、女が……女をとらえろ！」

だれへとなく怒鳴った。

ふりかえりもせずに、あやは走った。もとより道は不明だ。方角を案じている余裕もない。ただ二人の手から逃れるだけでいい。

星かげだけの暗い道。杉や山毛欅にその星の光さえもさえぎられると、墨つぼのなかを泳いでいるようであった。

大勢の足音や叫喚に追われて、やみくもに彼女は走った。

草にすくわれ、石ころにつまずいて、何度も倒れた。足のなまづめもはがしたらしい。だが、疼痛よりも、凍るような夜風よりも、自由への希望がはげしく、ほそい脛をむちうった。

道はつまさきのぼりになって段々ほそくなっていた。

途中で息をいれてふりかえると、松明が白煙を引きながら幾つも追ってくる。
神さま、助けてくださいまし！
冷たくまばたきをくりかえす星へ祈った。祈りながら走った。
と、ふいに、足は宙をふんであやは前へのめった。星座がくるりと回転した。
柔らかな女体は容赦なく羊歯の茂みへたたきつけられ、急角度の斜面をはげしい勢いで転落していった。

暴れ太刀

1

死の淵――奈落の底へ落ちていきながら、意識のあるあいだ、逸平の名を連呼していたあやであったが、
逸平はそれと知る由もなかった。
北陸街道を、ひたすらに、あやの影をもとめて走っていたのである。
武生でも、北ノ庄でも、手がかりのあろうはずはなかった。
北ノ庄では大久保長安の一行に追いついた。
長安は三日間城下に滞留した。いまをときめく徳川家康の二子結城秀康六十七万石の城下だから殷賑をきわめていたが、逸平はばくち場や馬市をふりかえりもせず、長安の一行を監視した。

宿坊も探ったが、あやのいる様子はなかった。

三日目に長安たちは発足したが、その同勢の中にもいない。彼女を押しこめたような荷駄も見あたらない。

「さア、わからねい。いったい、どこへ隠したか」

今庄の宿から逃げだした三人連れというのは、あやと護送の武士二人に違いなかった。

「――どこではぐれたか。行き違ったか？」

見当がつかないのだ。

それでも、見え隠れに長安の一行を尾行して大聖寺の城下までたどりついたが、ここで逸平、さすがの豪毅の男もへたばってしまった。

無理もない。もう六日間も満足な飯にありついていない。大津でふるまいにあずかって以来、畑の大根を生でかじったり、道ばたの地蔵様のお供物を失敬したりしてどうやら飢えをしのいできたが、もう一足も歩けなくなってしまった。

足を萎えさせたのは、鼻先に漂ってくるうまそうなにおい。大聖せんべいと書いた小旗が店先の蒸籠の湯気にあおられてひらひらしていた。

簀ノ子台の上には竹皮包みのよもぎもち、きな粉まぶし、ごまもちなどが並んでいて、旅人にひさいでいる。

土間では片はだ脱ぎの男衆たちが、ほがらかに杵歌にあわせて、べったんべったんとついているのだ。

逸平は、はっと我にかえったときは、ふらふらと土間に入ってきてしまっていた。

「お疲れさまでございます。どうぞこちらへ」
ゆったりと太った色の白い女――多分、この家の女房であろう、あいきょうたっぷりに床几に招じられると、もうあとへひけない。
――ええい、出たとこ勝負じゃわい……。
度胸をすえて、
「もちをくれい」
「はいはい、もちはどれがお好みでございましょう？　きな粉、よもぎ……」
「なんでもよい、三人前がほどくれい」
味などわからなかった。おそろしい速度で次々と手をのばしてもちを食い、白湯を飲んだ。三人前では足りるはずがない。二人前追加して、これもぺろりと平げてしまった。
「ううむ、どうやら人心地ついたわい」
店中の者があきれ顔になって、
「大聖寺もちはうまいだけでなく、大きいのでも自慢でございます。お客さまは十人前召し上がったのも同じでございますな。おあとはいかがで」
「もう要らん。ほしいのは酒だが」
「あいにくと酒は置いてございませんが、御所望ならとり寄せて」
「いや、酒屋のぶんまで損かけては済まぬ」
「え？　なんとおっしゃいます」
「実はな……」

けろりとして逸平は白状した。
「無一文なのだ」
「え?!　御冗談を……」
「おれは冗談やうそのつけん男だ。無一文といったら、真実、無一文」
「けっ、そんなら、おまえさま……」
「わからんやつだ。いっそ裸になってみしょうかい」
そういわれてみれば、同じ旅のちりあかにまみれたにしても、少しひどすぎる。六日間はったらかしの髪はほこりをかぶったうえに元結いがゆるんでいるし、かびのように月代も生え、下半面は無精ひげでおおわれている。革足袋は湖水にとびこんだとき脱げたのだろう、右足だけで片っ方はすり切れた足半といういでたちだから、裸にするまでもない。
「食い逃げする気だな、われは」
もちつき男たちが杵や薪ざっぽうを手にしてぐるりととりかこんだ。
街道すじだから、こんなことには慣れている。
「たたきのばしてお役人に渡してしまえや」
「俵づめにして大聖寺川へぶっこむか」
わいわい怒鳴り散らすのを、食後の充足感に浸りながら、ゆっくりと逸平は見まわした。七、八人いるが、びくともしない。
「もちのようにのばすかい」
「なにっ」

「俵づめにして、鮒の餌にして一文でももうかるかい」
「この野郎、食い逃げし損なって何をいうことかいの。ぶっ殺すぞ」
「ははは、越前者は欲がないのう」
逸平は腹をかかえて笑いだした。
「いったいもち代は幾らだ」
「一個びた二文で十五個じゃからびた三十文、永楽銭なら八文でびた二文つりをくれてやるわい」
「ふうん。それでは、おまえの手間賃は幾らだ」
「なんでい」
「手間賃よ。もちつき男が一日働いて幾らだ」
「永楽二十五文よ」
と、その男はそっくりかえった。
「御城下では一番の手間ぞな」
「よし、決まった」
逸平は、ふいに腰をあげると、杵をひったくっていった。
「半日、もちをついてやる」
「……」
「文句はあるまい。もちつきと牛殺しなら、大鳥逸平、余人におくれはとらぬ」
もろはだぬぐと、無数の刀傷にいろどられた隆々たる筋肉の塊が、力自慢の男たちをもたじろがせた。

この交渉をうしろから見ていた女房が、にっと片えくぼをきざむと、男衆をかきわけて出てきた。

「お話はわかりましたよ。それなら、半日といわずに明日いっぱい働いてくださらない？　そうすれば路銀のたしになるくらいのものはあげられるし……」

2

天衣無縫、豪毅磊落な大鳥逸平でも、無一文の道中にはつくづく弱った。粗衣や垢面にはとんちゃくしないが、空腹と疲労には敵し難い。

幾らかでも路銀を手にできるとあれば、一日のロスは大した影響はない。

それに、あやの一行は、あるいは後ろにいるかもしれないのだ。

もちをつきながらも、時々、目をあげて往来を見た。

そんな逸平を、もち屋の女房――お咲という名だった――は、太ったひざにタバコ盆をひきよせてすばやりながら、

「――おまえさま、武家奉公していたようね」

何かと話しかけては、ほれぼれと逸平のからだに熱っぽいまなざしをむけていた。

夜になるともちつき男たちは帰ってしまい、差しむかいで夕食の膳についた。ちゃんと冷や酒もある。

「――ほう、越前ではもちつき男に酒まで飲ませてくれるのかい」

「あら、おまえさまだからじゃないか」

つやっぽく、お咲はにらんだ。
「そのからだではまず二升口とにらんだけれど、どう？」
酌をする手つきも慣れたものだ。
酒が口をなめらかにするのか、しどけなくひざをくずして、
「――あたしくらいかなしい女はありゃしない」
と、亭主の愚痴をこぼしはじめた。
亭主の喜三次は前田侯のもと包丁人だったが、ばくち好きからお役を解かれて、いまでは北ノ庄で馬子や人足の元締めみたいなことをしていて、ときどき思いだしたようにここへくる。
「――あたしのからだが欲しいときだけくるのはいいけど、バカにしているじゃないか、ひと月に二回かせいぜい三回。そんなにあたしのからだはつまらないのかしら……そのくせ、たまにくると、もうこっちの都合の悪いのなんかはおかまいなしなのさ。さかりのついた犬みたいなのだから。それアもう、月のめぐりだろうとなんだろうと……」
膚がほてるのか、襟をはだけて、逸平にしなだれかかった。腿がすそを割って顔をだすのも平気なのだ。まるい乳房をのぞかせて、ぐいぐい豊満なからだをこすりつけてくる。
「ねえ、逸平さまとやら、手前勝手な亭主を持った女房を、あわれと思ってくださいましな……」
杯も銚子も捨てて、火のようになった白い腕が逸平のふとい首にからんだ。
「弱ったな……」
逸平はふうっと吐息をついていった。
「おいらは女房を持ったこともないし、その亭主どのも知らんからな」

「だから、だから、あたしも勝手に好いたらしいお方と添い寝をしたい。ねえ……」
熟れた果実のような朱唇が迫った。
逸平は首をそらして目を閉じた。まぶたの裏にあやの清潔なくちびるが膚が浮かんだ。
あやに操をたてようとする気持ちと、強烈な美酒への誘惑が、一瞬、逸平をぐらつかせた。
くちびるが重なった。
かちかちと女の歯は鳴っていた。甘い——と感じるよりも、正直なところ火に触れたようで、瞬後に逸平は女のくちびるから逃れた。
「許せやい。どうも、あやに済まん気がする」
「あや？　なにさ、あやって」
「女だ。美女だ。おいらの女房になる女ごだ」
「そんなひと、忘れておしまいな」
「あほう。忘れられんから、越前くんだりほっつき歩いているのではないか……」
はげしく表の戸を打つ音がしたのはそのときである。
なにやらわめく声が聞こえ、人数も少なくない様子。
「——やあ、夜なかにもち買いらしい」
「あほうなことを。いまごろもち買いなんて……」
たしなめるようにいい、お咲はからだをふるわせてしがみついた。
お咲にはもうその夜の訪問者がだれかわかっていたにちがいない。腕も脚も膠着したようになっていた。

そこへ板戸をとうとうたたき破って、裏表からどかどかと男たちがなだれこんできた。いずれも肩を怒らせて、手ごろな得物――それは棍棒や、錆槍や、鎌や、打ち刀や、あるいは鉄鞭などとまちまちではあったが――をひっさげていた。

「あ、おまえさん……」

「お咲、この唐変木アなんじゃい」

横柄な顔でほえたのは、布袋さまにひげを生やしたような男だ。やけに腹を突きだしていて、まるで育ち盛りみたいに着物の前があっていない。

瞥見したところ、二十人ばかりいる。そのなかに、永楽二十五文と威張ったもちつき男の顔も見えた。

――ははあ、そういうわけか……

その男が、ねたみと憎しみから、北ノ庄まで注進にいったにちがいない。

「こ、このひとは……もちつき衆で……」

「ふん、ふん、おまえに手をだそうと思うて座りこんだのけ。ふていやつじゃいの。どうしてくれべいか」

「ち、ちがうぞ、それは！」

逸平、思わず叫んだが、いままでの情熱がいっぺんにさめて土気いろになっているお咲を見ると、陳弁する気持ちがなくなった。

「うん、当たらずとも遠からずだの。おぬしが亭主野郎かい。女房一人で置きっ放しにしておくと、こんな虫もつく。これに懲りたら、女房孝行をすることだぜ」

「まったくじゃい。ところで、その虫の始末はどうするけ」
「どうとも勝手にしやがれ」
二十人ぐらい切り払うのは難事ではなかったが、誘われたとはいえ人妻とくちびるをあわせたということが、逸平の良心を責めた。あやへの贖罪の意味もあった。
「ええ度胸じゃい。その面をさらしてくれようほどに、泣くまいぞ、ほえまえぞ。うぬら、俵づめにしてしんぜろや」
無精ひげの布袋があごをしゃくると、男たちは餓狼のように逸平に殺到した。

3

「――やれやれ、情けない姿になったもんだ」
逸平は三日三晩後悔した。
俵づめとはただ食いしたときのしられていたが、まさかこんなこととは思わなかった。けんかで簀まきにされて川にほうりこまれたことはあるし、ほうりこんだこともある。せいぜいそんなことだろうと予測していたが、似て非なる辱めだった。
両手を麻なわでくくられ、サン俵に入れられた。首だけだしてすっぽり四肢を俵づめにし、もち屋の前の往来の真ん中に、三尺ほど掘り下げた穴に生き埋めにされたのである。
首だけでているから、まず死ぬようなことはないが。
「七日もたてば勘弁してやる」
そういう布袋に、

「十日でも平気だぞ。おれア大鳥の逸平だ」

その意地もせいぜい一日で、さすがの逸平も泣きたくなった。

苦痛には耐えたが、往来の老若男女の侮蔑の目、あざけり、ののしり——そうした屈辱がたまらなかった。

犬が来てぺろぺろなめたり、悪童たちに牛のわらじを投げられたりした。逸平は歯を食いしばって忍んだ。

お咲は布袋に北ノ庄へ連れ去られたようだ。

路銀がないばっかりに、とんでもねいことになってしまった……あやはいまごろどこを歩いているか……。

目を閉じて、ひたすらに、あやのことを考えることにした。

春ではないのがせめてもの救いだった。好奇心の強いありに耳や鼻に入りこまれては狂い死にするかもしれない。だが、夜明けの寒気もかなりきびしいものだった。

土の中だけは意外に温かいことを発見したのだが、夜半からしんしんと霜がおりて、鼻の頭なぞ凍りそうになる。

——くそ！　死なぬぞ、死ぬものか、あやに会うまでは！

生き埋め三日目だった。

飽きたのか、見張りの子分がどこかへ行ってしまったあとに、通りかかった男たちがある。

暗やみにちょうちんもなく、なにやら談笑しながら来たのだが、

「——お、おっと危ねい。道の真ん中に冬瓜を転がしたどあほうがいるさかい、つまずくところ

や」

「冬瓜だと。ありゃ首ではねいか。人さまの首だ」

「なに、首が落ちているのか？」

十三夜月があるはずだったが、雨雲が空を低く覆って星あかりもなく、街道は暗い。四人連れは足をとめて酔眼をみはった。

「なるほど、首らしい」

一人が頭にさわった。

う、ううむ、と、逸平は朦朧とした意識のなかで声をあげた。

「はて、この首な生きとるばい」

「ほほう、生き埋めだ。こいつはひでえ。助けてやろうではないか」

「あかん。どうせ罪人かなんぞや。かかわり合いになりまっせ。やめとこ」

「薄情なことばいうな。助けちゃろたい……」

言い争っていると、

「ううむ……」

首がうめいた。息もたえだえな声が、

「助けてくれずとよいが、酒をくれ……」

「ほっ、酒だとよ。こいつ、おれたちが酒を持っているのがよくわかったな」

「――さ、け……酒を！」

「まだいうとる。へんなやつじゃ。よしよし、一合くらい合力してやる」

一人が背に指し樽をかついでいたのである。
ひしゃくで芳醇な香のするやつをなみなみとくんで口のところに持っていくと、
「かたじけねえ」
渇いた口にも礼をのべることは忘れない。ごくごく飲み干して、
「もう一杯……」
「ちょっ、いけずうずうしい罪人やで。われは地獄へいくんでも閻魔に酒ねだるつもりかいな」
いきまいて、首をけろうとする脚を、
「待て待て、見おぼえのある顔のようだぞ。それに、声が……猿太、付け木に火をともしてみろ」
硫黄の燃える青い炎のあかりに、逸平の首が浮かびあがった。
「やっぱり、逸平兄いだ。おい、逸平兄いだぞ」
「ほんまや、逸平兄いの首や」
「どあほう。首の下には胴体がついとるわい。だれだ、冬瓜と間違えてけたくろうとしたのは」
「うへっ、堪忍」
「わびるなアあとだ。さ、早く掘りだすんだ。猿、おめいのさび刀で土を掘れ」
大曩祖右衛門、お神楽長次、八丁飛びの猿太、荒熊組人の四人だった。
京のあばれ者の集団茨組の生き残りだ。所司代板倉勝重の弾圧を逃れて東国へくだる途中、大津で再会したのだが、はなればなれになっていたのである。
寒気がきびしい北陸路だ。土は凍てて堅かったが、荒くれ男四人がかりだから、ほどなく助けだすことができた。

逸平は立とうとしたが、へなへなと崩れてしまった。
「いけねいや、脚腰が立たねい」
無理もない。三日三晩座りずくめでひざや腰のつがいがさびついたのか、まるで機能を失っている。
「大蟇、肩を貸してくれ」
「承った。ところで、兄い、どこのどやつがこんな目にあわせたのだ」
「そや、このまま去ぬることはあらへん」
と、長次もいきまいた。
「こないけちな城下くれい、火イつけて燃やしたろ」

4

短気なお神楽の長次は、早くも火打ち石の音をたてている。
「よせよせ、火つけはいけねい」
と、逸平はやめさせて、
「詳しいことはあとから話すがな、この一件はおいらが悪いんだから」
「いいも悪いもあらへんがな。だいいち、逸平兄いは、あてらから見りゃ聖人君子やさかい、悪いいうたかて知れてるがな。せいぜい食い逃げやろ」
「当たった」
髪をふりみだして、久しぶりに逸平は哄笑した。酔いがまわると元気をとりもどしてきて、

「ところが、それはよかったが、口を吸ったのが悪かった」
「毒でも吸いよって……」
「女だ、女の口だ。人の女房だ」
「そら、うまいことしなはった」
「なアに、ちょっとだ。情の濃い女での、おいらに抱きついての、離れんのだ」
「うむうむ、おっぱいもんでくれてか」
「もむところまでいくものか。亭主が二十人ほどうじ虫つれて踏みこんできたわい」
「惜しかことしたなあ」
と、荒熊が長嘆息して腹の底から残念そうな声をだした。
「ちょんびり口を吸って、生き埋めのさらしものとは、ひどすぎるばい」
「なアに、軽いぐれいさ」
本人のほうがさばさばしている。
「とにかく、おいらが悪いのだから、恨むな。讐することはない。それより、見張りがもどってくると面倒だ、しりに帆かけて突っ走ろうぜ」
五人は鰓口おさえて大聖寺の城下を走りぬけた。
幸いと月は顔をださない。途中からばらばらと時雨がたたきつけてきたが、一同には走跡をくらましてくれる天の配剤のように思えた。
佐渡へ行くつもりだから、ひたすらに街道を北へ北へと走った。
金沢の城下へついたのは翌朝、まだ濃いい霧がよどんで、早立ちの旅人や商人がちらほら起き

だしたころだった。

およそ十五、六里の道に半夜を要したのは、足萎えのような逸平を守っての逃走だったからである。

「やれやれ、ここまでくれば一安心」

「所司代に追われるよりも気骨が折れたぞ。逸平兄い、足の具合いはどうだ?」

「うむ、足慣らしになったようだ。いくらかいい。これで罷法でもすりゃ元どおりになるだろう。八丁飛び、かっこうな木賃宿をたたきおこせ」

「ねい、もう起きていますさ」

五人は木賃宿にわらじを脱いだ。

金沢は北陸一の雄藩、前田利長の城下だ。豊家五大老の一人で、亡父の利家には徳川家康も誓紙をとられたほどで、一目おいている。後世になっても、三百年間、百万石を一石も欠けなかったほどで、大名中の大名。金沢の城下も北陸一に恥じぬ街の広大さ殷賑ぶりは、城下口を一瞥しただけで、およそ推察はついた。

当時の旅人は常に自炊がたてまえで、したがって旅宿も木賃という名のとおり自炊に必要な薪炭を給し屋根を貸す代金をとったものだが、大きな宿場や城下のそれでは、旅客のもとめに応じて食事も酒肴もそろえてくれた。

五人はまず空腹を満たし、河北潟のわかさぎをさかなに杯をあげた。

逸平の無事を心から喜ぶ四人である。世間からは鼻つまみ者の粗暴な連中だが、単純で淡泊なのだ。豪傑を気どる稚気には愛すべき点が多い。

権謀術数常ならぬ暗雲のもとで、こうした男たちは、いつも貧乏くじを引いている。陶然となったところで、逸平は、あやを奪いかえせなかったこと、最終的には佐渡まで行くつもりであることなど、決心を吐露した。

「――あやどのの顔なら知っている。手わけして宿屋を捜そう」

「五人でやりゃわけないこっちゃ……」

「面目ねいが、大鳥逸平の一生一度の恋だ、手を借りるぜ」

「水くさいことは言わんがよか。さ、もう一つ……」

荒熊が銚子をとりあげたとき、この家の亭主の顔がのぞいた。

「もし……」

しなびた青い顔が痙攣していた。

「なんだ、木賃か。出立のときに払うぞ」

「いいえ、あの、お役人さまが……」

「なに！」

杯が手からすべった。その手が刀をつかむ。

5

「追い返すがよかッ」

と、かみつくように荒熊がわめいた。大蔓も片ひざだてて、

「そうだ、役人にゃ用などないぞ！」

「――こちらに用がある」
亭主を押しのけて役人が入ってきた。
たっつけ袴に足ごしらえも厳重な武士が二人。あとは足軽だが、いずれも土足のまま、袋鞘を払った槍を手にして、緊張で目をひきつらしている。
「このあたりにまごまごしているとは、お上をないがしろにする不敵千万な賊めら。神妙にせい」
「な、なんだと！」
「すでに十重二十重に宿は囲んだ。逃れる道はないのだ。往生ぎわをよくしたらどうだ」
「うぬ！」
とっさに五人が大聖寺の一件を思ったのは無理もない。
気の荒い連中だから、どたん場にきても神妙にする気はなく、
「あほうばらが、捕まえるなら捕まえてみろ。茨組にゃ腰ぬけは一人もいねいわい」
大蟇疣右衛門がみごなわ柄の大太刀をぎらりと抜き放った。
「や、刃むかうぞ。からめとれ」
役人たちもつられて抜刀した。するどく呼び子が鳴り、それは遠近の笛の音を呼んで、わーっと喊声があがった。
脅しではなく、よほどの人数をくり出してきた様子だ。
「みんな、刀をひけ」
座ったままの逸平が静かにいった。
「切りまくるもいいが、なにやらおかしなふしもある。せっかくお迎えに来てくれたんだから行

ってみようじゃねいか」

たかがお咲とのたわむれが、こうした騒ぎを惹起したとは考えられなかったのだ。

大小をとりあげられ、後ろ手に縛されて奉行所へ引かれた逸平たちは、牢屋にほうり込まれてしまった。

どうなることか、と思ったが、奉行下役の尋問が始まって、ようやく判明した。盗賊と間違われたのだ。

少し以前から城下に盗賊が横行していた。城主利長の上洛で取り締まりの気のゆるみをねらってのことで、その数は五人とも六人ともいわれる。その残忍さといったら、商家に押し込み金品をかすめるだけでなく、婦女子をなぶり、みめよい女は拉致してしまう。男たちはすべて斬殺して目撃者を抹殺するという凶悪さが、城下をふるえあがらせていたのだ。

「昨夜は不逞千万にも重役のお屋敷から御息女をかどわかし去ったのじゃ。木賃を調べたところ、運悪くおてまえがたが泊まりあわせたゆえ、ついきゃつらと誤った次第」

そういわれてみると、たしかに風体はよくないし、人数まで符合している。

「下役の率爾、なにとぞ御寛恕くだされたい」

奉行に丁重に陳謝された上に、若干の路銀までもらった。一度はことわったが、無礼つかまつったおわびのしるし、と押しもどされると、

——銀の十匁や二十匁、百万石の屋台骨にひびきはすめい……。

と、受けとってしまった。

ついでだから、役人にあやのことを調べてもらったが、それらしい者は見あたらないという。

翌朝、五人は城下を発足した。

「――やれやれ、とんだ目におうたものよ」

「よりによって盗賊に間違われようとは思わなんだの」

「しようない。どう見たかて殿様に間違われる面がまえやないさかい、無理おへんわ」

「だが、当分の路銀にありついたばい。こげな間違いならちょくちょくあってもよかたい……」

四人とも意気揚々としていた。

逸平は、ともに歩きながら、いつかじぶんだけ沈鬱な表情になっていることに気がつくのだった。

「――どうした。足がまだ痛んでか？」

心配げにのぞきこむ大蟇の心づかいもうるさいのだ。

「いや……」

言葉少なにむっつりとかぶりをふる。

――おれとしたことが、どうしたことだ……。

楽天的で陽気だったことがうそのように、寂寥がひしひしと迫ってくる。四人が浮かれれば浮かれるほど、逸平の心は逆へ逆へと暗くめいってくるのだ。

それがあやへの切ない思いだと気がついたとき、逸平は裂けるような痛みを胸におぼえた。

「あや、どこにいるのだ……」

思わず口走った男の目には光るものがあった。

北陸路には冬がこようとしている。末枯れた広野のなかに、一すじの街道はどこまでものびて

いた。

湖賊の宴

1

金沢の城下をでておよそ一里あまり——百坂の村を通りぬけ、森本にかかったころから空模様があやしくなってきた。

四人は急ぎ足になった。

道祖神の前で、ふとかがんでわらじの緒をむすびなおした大蟇疣右衛門が追いついてくると、

「——妙なやつがくるぞ」

と、前をむいたままいった。

「なんやね？」

八丁飛びの猿太が目をくるくるさせた。

「つけられているようだ。おっと、うしろをむくな。歩いてろ。何者かわからぬ」

「どない風体のやつかいの？」

「変なやつだ、それが……」

背中をみつめられているというのは、うす気味の悪いものだ。ふりむくなといわれると、一層、その衝動にかられる。

「うほっ、首すじがもぞもぞするばい。なんでもよか、ぶった切っちゃろか」
いらだったように入道頭をかく荒熊を、
「――気にするな」
と、おちついた語調でたしなめたのは逸平である。
「何ほどのことができるやつではない」
「なんじゃあ、おぬし知っていたのか」
ふりかえりもせず逸平はいった。
「背中にこぶのある男だろう」
「……うむ、ねこ背の」
「せむしだ。城下口の茶店で団子を食うていた男だ。あとになり先になりして、ちらちらおれたちの様子をうかがっていたのを知らざったのか」
逸平は微笑した。
茨組の詮議もここまでくればあろうはずがない。京をへだたること七、八十里、すでに加賀ノ国である。
大の男五人に一人では恐れることは何もないのだが、そやつが奇怪なせむしだということで、お神楽の長次や猿太はもう我慢ができなくなった。
悪いことに、灰いろの雲がすっかり空を覆い、広野を吹いてくる風もなにやらなまぐさい。
「ええい、くそったれ」
猿太がわめくと同時に、荒熊もふりかえった。

「こらっ、そこのうじ虫、何をねろうてこそこそつけてくるんじゃい。懐中をすろうというのか」
よほど腹にすえかねたらしい。かんぬきに横たえた野太刀のそりをうたせて詰めよるや、だっと抜き討っていた。
せむしは仰天した。
「これはむちゃなことを」
意外にも——非難は街道わきの銀杏のかげからなげられた。飛鳥のような素早い身ごなしで刃の下をくぐりぬけていたのである。
不自由な五体とあなどったのが誤算か、荒熊入道はくわっと朱をそそいで、
「出てこい。ぶった切っちゃる！」
切らずにはおかぬ勢いだったが、
「よせよせ、入道。あやつを切っても一文にもならねいやな」
わらいながら逸平はとめた。
「し、しかし……」
「まあ、いい。うち捨てておくがいいわい。さ、行こう」
逸平にうながされて、しぶしぶ太刀をおさめたのを見ると、そのせむしは、
「えっへっへっ、おん大将のおっしゃるとおりで。えっへっへっ。てまえを切ってもびた一文にもなりやしませぬわえ」
奇妙な声で、へらへらわらいながら、一行のあとからついてくるのである。
こちらが立ちどまると、せむしも足をとめる。ふりかえると、へらへら愛想わらいをする。刀

の柄に手をかけて威嚇すると、ぱっと二間もとび下がる。歩きだすと、またひょこひょこつけてくる。

なんとも始末のわるいせむしなのだ。これでは無視しようと思っても気がかりでしようがない。

やがて街道のふたまたにきたとき、そのせむしは、奇妙な愛想わらいで近寄ってきたのである。

「えっへへへ、逸平さま、大鳥の逸平さま」

「――はて、兄いの名前を知っているとはいよいよもって怪しかやつめ」

いきまく荒熊をおさえて、

「なんぞ用か。いかにもおれは大鳥逸平、おれに用なら早くいえ。みんな気の短い連中だからな、怪しげなふるまいしていると冗談ごとでは済まぬぞ」

「えっへへへ、用がありゃこそお供してきましたがの」

「きさまが、おれに？」

「いえ。てまえの親方が、ぜひお連れしてまいれとのことで。いかがでござりましょう、すぐそこでございますがの、ちくとお寄りくださりませぬか」

五人は顔を見合わせた。みんな未知の土地なのだ。知人があろうはずがない。

「――そやつの名はなんと申すぞ」

「天堂弥九郎氏成」

せむしはやや胸をそらして、誇らしげにいった。

「関ガ原合戦の名誉でござりまするがの」
「はアて、天堂弥九郎……知らねいの。おぬし、聞いたことがあるか？」
「ない」
と、大蟇はそっぽをむいてつばを吐いた。
「おおかた具足はぎの足軽でもあろうわさ。行こう、行こう」
「もしッ、ひどいことをいわっしゃるな、大蟇疣右衛門さま」
「なに、こやつ、おれの名まで存じておるとは？」
「へいへい、こちらが荒熊組人さま、そちらのおふたかたが八丁飛び猿太さまにお神楽長次さま。いずれもけたいな名ゆえ、一度聞いたら忘れはしませぬわい」

2

逸平たちが寄り道する気になったのは、せむしの言動も奇怪で好奇心をそそられたし、いよいよ空がくずれて一颯の冷気とともに、大粒の雨がほおを殴りつけてきたからである。
案内のせむしは、まるで突んのめるようなかっこうながら、ぴょんぴょん弾みをつけた走りかたで意外に速い。
五人とも冷雨に追われるように笠をかたむけて走った。
ほどなく行く手に鉛いろの湖水が見えてきた。河北潟だ。
湖ぎわの小道を左に折れる。
一町ばかり行くと、せむしは湖へ入った。

枯れ蘆のかげに一隻の苫舟が隠されてあった。

「――お乗りくださいまし」

「ふむ、手まわしがよいの」

雨は一層はげしくなっていた。模糊として視界をとざし、水面は狂ったように牙をむき泣きさわいでいたが、せむしは巧みに櫓をあやつった。

一体、どこへ行かれるのか？　茨組の残党無法者五人にはその不安はない。むしろ好奇心でいっぱいなのだ。

「やい、竜宮にでも連れていく気か！」

雨のなかでどなると、せむしがどなりかえす。

「竜宮ではございませぬ。天堂屋形ですがの」

方角も案じようもないのに、せむしは勘でわかるのか、ちゅうちょも逡巡もなく舟をこいだ。

やがて雨が小降りになるころ、眼前に突兀と岩礁があらわれた。さして高くはないが、見るからに奇怪なかたちをしていた。

雨脚がほそくゆるやかになっていくと、ここが岬であることがわかった。

孤舟は岩鼻の奇岩乱石のあいだを縫うようにして入った。

そこに四、五人の荒くれ男たちがいた。

縞目もわからぬ布子を着たり、たぬきか何かかの毛皮の胴着をつけた――茨組の面々におとらぬたくましい壮漢たちである。

「おいでなさいまし。お頭がお待ち兼ねで」

岩壁には人丈すれすれの洞穴がぽっかり黒い口をあけていた。
「こいつアおかしなあんばいになったの、大蠹」
「こやつら、賊ではないか。海賊か」
「うむ、湖賊というところかい。ははは、面白いの。案内してもらおうか」
岩窟は急勾配になっていた。
水面より下におりるのである。壁面のくぼみに貝がらがおかれ、魚油が臭気とすすをあげながら燃えていた。
石の階段は水こけでぬるぬるして危ない。天然にできたものだろうか、岩窟の奥はかなり広かった。
思ったよりも明るいのは、一面に白砂を敷いてあるからであろう。
長持ちや唐櫃などを背にして、一人の巨漢が熊の毛皮に胡座して酒を飲んでいた。高蒔絵の美麗な短檠が、傲慢な顔を照らしだした。
「おお、よく参られた」
「――おぬしかい、天堂なにがし」
「天堂弥九郎氏成だ。大鳥逸平どのだな。さ、これへ」
と、いま一つの熊の毛皮を勧めて、
「まず一盞まいろう。お近づきのしるしだ。これ、酌をせい」
と、輩下にあごをしゃくる。
酒には目のない連中である。ちゅうちょなく大杯を手にした。

輩下たちはいい含められているのか、酌をする者、ぬれた衣類をたき火でかわかす者、岩窟あげての供応ぶりだった。

したたかに酒がまわってきたところで、

「天堂とやら、どうもふにおちぬがのう」

と、逸平はいった。

「おれたちは無位無官の浪人者。金沢の城下では賊と見あやまられて牢獄にぶち込まれた者だ。なにゆえ、こういうもてなしを受ける？」

「ははは、そのことそのこと。実を申せば、おわびのしるしなのじゃ」

「わび、とは？」

「その城下荒しの賊とは、われらのことよ」

天堂弥九郎はずばりといって、岩窟を吹きとばすような哄笑をした。

「なるほど」

と、五人も顔を見合わせて苦笑した。

「そうだとすりゃ、これはたんと馳走にならねば間尺にあわぬというものだ」

「いかにもいかにも。さ、飲んでくれい。酒はいくらでもある」

もとはただなのだから、気前がいいのは当然だ。

五人の酔いっぷりの見事さをながめていたが、天堂弥九郎は、

「どうだな、この岩屋は」

と、自慢しはじめた。

「太古にこの湖がまだ海とつながっていたころできたものらしいが、このあたりの者はなにやらたたりがあると言い伝えて、漁民も近よらぬ。絶好の隠れ場所よ」
「頭の上に湖水があるとは風流なことだな」
「気に入ったか？」
「気に入った」
「ならば、なかまにならぬか？」
弥九郎は待ってたとばかりたたみこんできた。
「おぬしらとわれらが一緒になれば鬼に金棒だ。もうけは山わけとすれば異存はあるまい」
へべれけになっていた長次がにょっきりと頭をもたげて、
「そら面白い」
と、手を打った。
「湖賊しょうばいも悪うはないの、逸平兄い」
「お神楽、われは黙ってろ」
逸平が肩をおすと、へなへなと倒れてしまった。
「のう、天堂。岩屋は気に入ったが、切りはぎ強盗はおれたちの性に合わんから断る」
「そうか、性に合わぬか。だが、見うけたところ懐中が重くて歩けぬというでもあるまい。では、二、三日だけなかまにならぬか。そうすれば、一人あて黄金五枚を進呈しよう」
「こりゃすごい話やないか」
こんどは八丁飛びの猿太がひざを乗りだしてきた。

じろりと逸平がにらんで、
「せっかくだが、天堂」
「ことわるか？」
「ことわろう」
「残念だな。こうまでぞっこんほれられてなびかぬとは、小野小町もよいところだの」
怒りをあざけりにかえてくちびるの端でわらうのを、
「なに。美しい男ぞろいゆえ、醜女の深情けは有り難めいわくなのさ」
逸平がこうやりかえしたとき、天堂弥九郎の背後の長唐櫃がかたっと動いた。

3

はっとしたが、弥九郎は肉の厚い顔をすぐ平静にもどして、銚子に手をのばした。
その一瞬の動揺を見逃す逸平ではない。
「天堂、湖水の下の岩屋ともなれば奇怪なことがあるものよな」
「う……なんだ」
「その唐櫃が動いたようだ」
「――まさか。目のせいであろう」
「それ、また動いた」
と、揶揄するように逸平はいった。
「ほれ、動く動く、なかに虎の子でも入っているのか」

「いや、何も……」
糊塗しようとしながら、焦慮で弥九郎の顔はゆがんだ。
「見損なうなよ、天堂。あばれの逸平は盗人の上前をはねるようなけちな男じゃねい。その唐櫃の中身はお見通しだ」
「なんと！」
「ほえるな、ほこりが立つ。いいか、櫃の中にはさるぐつわをかまされたお姫さまがもがいているのさ」
「きさま！」
天堂弥九郎はつと片ひざたてた。
杯を口へ運びかけたままこれをじろりと見返して、
「なあに、おれの知ったことじゃねいが、女のにおいがするようでの」
一合いりの杯を逸平は一気にあおった。
弥九郎は野太刀を引きそばめていたが、動じない逸平たちに気をのまれて苦っぽくわらいながら、
「図星だ」
と、しかたなくうなずいた。
「前田藩の重役、宍戸但馬の娘だ」
「やはりな。手足は縛ってあるのだろう、出してさるぐつわぐらい解いてやるがいい。どうせ身の代金めあてだろうが、死んだら一文にもなるまいぜ」

そういわれると、弥九郎は急に狼狽して錠をはずし、ふたをあけた。もろ手をさしこんで、
「ほう、すごい目をしてにらみおる。さるぐつわをはずすと、さぞわめきちらすことじゃろうて」
抱えだした。手足の自由をうばわれ、口までふさがれた姫は、勝ち気らしい大きな目に怒りの炎を燃やして男たちをにらみつけている。
「なるほど、わめかれては酒がまずくなる」
と、逸平もわらった。
役人どもが平静を欠いていたのも無理はない。
美しい姫だ。下半面をおおわれているが、冷たいくらい整った顔かたちで目に表情がある。きりっと柳眉が逆だって、後れ毛が蒼白なおもてに乱れているところは深窓の佳人ながら凄艶だった。
「――のう、大鳥の。おぬしらの力を借りたいというのは、実は、この姫、千絵とやら申すが、身の代金に黄金五十枚をゆすろうつもりが、微力でできぬ……」
逸平の表情をじっとみつめたまま弥九郎は語をついだ。
「おれが手下はぜんぶで十三人。寝込みを襲うなら武家屋敷とて恐れはせぬが、こういう取り引きにはちと手が足りぬ。で、おぬしらに合力してもらいたいと、こう頼んだ次第じゃ。いかがであろう、翻心ねがえぬか？」
「なおさらのこと、いやだな」
逸平はきっぱりとはねつけた。
「これが武士の意地とか恥をそそぐとあらば、なんぼうにも合力する。だが、ゆすりかたりと弱

い者いじめは、性にあわぬ」
「ふん、性にあわぬことばかりだの……」
「あいにくだったな。だが、おぬしがするのはおぬしの勝手、ずいぶんと盗人稼業にはげむもよかろう。では、馳走になった」
と、逸平はひざをおこした。
「――待て。いま一度！」
と、見あげた天堂弥九郎の目に殺気がひらめいた。
「ここまで腹を割って頼んだのを足げにするとは、武士の情けに悖ろうぞ」
「よせよせ、盗人に士道も蜂の頭もあるものか」
「こやつ！」
「怒るな。せっかくの酔いがさめる。ああ、そうか。ただ食いただ飲みされたのが惜しいのか」
逸平は銀粒をなにがしかつかみだして、
「酒肴の代は払うていこう。これで貸し借りなし」
ばらりと熊の皮の上に投げ捨てた。
黄金五枚に未練を残したような猿太を促して逸平は背をむけた。とたんに、弥九郎の手裏から白光がほとばしった。
いかな名人上手でも、ある動作から次の動作へ移る一瞬にはすきが生ずるものだ。その虚の一瞬に、必殺剣は的確な弧を描いて走ったのである。
片ひざおこしざまの抜き討ちは――小気味よいあの手ごたえで、当然、弥九郎に報いるはずで

あった。

間合いも、秒速も、遅疑はない。刀は骨まで断つはげしさで逸平をうしろ袈裟に——。

手ごたえと血煙は、しかし予期せぬかたちできた。

逸平のからだに刃がふれるはずが、ふっとむなしく流れた。がっと刃が岩に触れたような衝撃でひじがしびれた。瞬後に血煙を弥九郎は見た。

たしかに見た。それが弥九郎自身のからだから噴いたものと知るまえに、彼は名状し難い混乱につつまれた。刀を持った右腕を肩のつけねから切りはなされて、重心を失ったからだはくるりと半回転を描き、丸太を転がしたようにぶっ倒れていた。

剣光と血煙と断末魔の号泣は、湖賊たちの眠っていた野性をいっせいによみがえらした。

蛭巻きの野太刀、鞘のがたつく陣太刀などをひっこぬき、あるいは薙刀かまえて、

「首領のかたき」

「ぶった切れ！」

怒号とともに五人を刃ぶすまで取りかこんだ。

「猿太、長次、ぬかるなッ」

功を焦って踏みこんできたやつを抜き討ちに切り下げるや、大嶺疣右衛門は次の敵と鍔がらみになって、

「湖賊ごときにおくれをとっては茨組の名折れだぞ。ひるむな」

「おう、こないくそ蠅、ひと打ちや」

猿太は身軽いのが身上だが、長次は酔いがはげしいから腰がふらついている。

荒熊入道がこれをかばって切りむすぶあいだに、逸平の血刀ははやくも五人ほど切り伏せていた。

湖賊たちはなかまの半ばを失うとおじけづいて逃げだした。

隠れ住むには幸いな洞窟が逆に不利をもたらした。入り口の岩につないだ艫綱をほどく背に猿太の大太刀がひらめいた。

「――どうやら片づいたようだが、手傷は負わなかったか」

逸平はふとい息を吐いた。全身かえり血で真っ赤だった。

「入道が左のひじをそがれたが、大したことはなさそうだ」

と、大曇疣右衛門がいった。

「どうやら、面倒なものを背負いこむことになったようだの」

「湖賊の財宝か。貧乏人にばらまきゃいい」

「そらあかん。いのちと引き換えのもうけや。逸平兄い、金銀たらなんぼあっても重いことあらへんで」

猿太が口をとがらすのを疣右衛門はさえぎって、

「金銀のことじゃない。生きものよ」

「生きもの？　ああ、お姫さまかッ」

はじめて逸平は思いだした。

「金沢に引きかえさねばなるめいの」

4

千絵姫の無事なすがたを見て、宍戸但馬が大鳥逸平たちに感謝したのはいうまでもない。

「百万石の城下をおびやかした盗賊どもを退治したとは、恐れ入った腕前。浪人にうち捨てておくのは惜しい。当家へ仕官されぬか。そのもとの世話なら買ってもしたい」

但馬は喜びのあまり過分の礼金をくれたうえに仕官を勧めた。

重役というものの、百万石の世帯だから一万石余をちょうだいして但馬も城持ちである。

「欲を申せば、わしに仕えてもらいたいが、それではそのもとがいやであろう。御当家の直臣となれば出世は腕次第。わしと比肩する身分も、そのもとの器量ならば夢ではあるまいしの」

「それはそうですな」

と、逸平は世辞も遠慮もない男だから、

「仕官するなら大名を望まねばつまらない」

逸平は考えた。

思わぬ幸運が舞いこんできたものだが、いまの彼がもっとも望んでいるのは、大名への出世コースよりも、恋しいあやの消息であった。

大久保石見守の奸策で佐渡へ拉致されたと思うのだが、それも明らかではない。ひょっとするとまだ加賀ノ国のうちにいるかもしれないし、あるいはすでに越中か。

よしんば佐渡に連れ去られたとしても、一介の浪人よりは百万石の家臣であるほうが、いざというとき押しがきく。

そこまで考えて、彼は好意を受けることにした。
「肝いりをおねがい申します」
「おお、仕えてくれるか。主君もお喜びくださろう。家中の士気もあがろうし」
「ところで、仕官するとなれば四人の朋友を食わせねばなりませぬが、禄米はいかほど頂けますか」
「さ、それはわしの一存ではなんともこたえ兼ねるが。というのは、前例やら加判衆の意見なども参酌したり、何かと手続きが面倒でな。だが、悪いようにはせん。わしにまかせておけ」
そうでられると、いくら逸平でも、「なにぶんともよしなに」と一任するよりしかたはない。
ところが、いざふたをあけてみると、当分の間無役にて百俵。
「なんだ、たった百俵とは」
現在の貨幣価値にすれば四、五十万円の年俸だ。これでは豪傑五人の生活はなりたたない。もっとも、住居費は不要だが。
しかし、男がいったんまかせたことだ、いまさら苦情はいえない。
大鳥逸平はここに前田侯の家臣になった。
大蟇たち四人を引き連れて、裏御小人町に移り住んだ。
「――なにやらペテンにかけられたようだな」
「まったくや。逸平兄いの器量が百俵たア格安に値切りよった」
指し樽のかがみをぶち抜いて痛飲しながら、腹をたてたり慰めたりするが、逸平は、
「しかたがねえ、湖賊退治じゃそれくれえのものさ」

と、あきらめがよかった。

「これで一合戦おっ始まりゃ千石取りになってみせるわい。そうなりゃ、おぬしらにも二百石ずつくれてやろう。それを楽しみにがまんしてくれ」

「遠慮しねいで万石とりとなってくんねい。そうすりゃ、わっちらも二千石の殿さまだ。悪くないなや」

「だが、討ち死にすれば元も子もないぞ」

「なアに。おぬしが死ぬようなときは一蓮托生、おれたちも生きてはいないさ」

粗暴な連中だが、かぎりなく深い友情がうれしかった。

身が落ち着くと、あやのことが気がかりになってくる。

宍戸但馬にも頼んだが、他領内はじぶんの手で探さねばしかたがない。

猿太と荒熊が買ってでた。越後から佐渡へ、二人はあや捜索の旅にのぼった。

逸平はほうびの銀子をぜんぶあずけて、

「不足になればなんとしてでも送金するゆえ、しっかり頼むぞ」

と送りだした。

大蟇とお神楽は、食客のような家来のようなかたちでお長屋に転がりこむ。

本多百助の足軽下郎とちがい、下士でも一人前の武士だから、大鳥逸平も無頼の虫をおさえて侍奉公に精勤することにした。

武家の生活というものは、典礼やらお定めやらいろいろとやかましいことばかりで、規則をおぼえるだけでも大変だ。原則的にはどの大名も同じようなものとはいえ、旧主本多百助は三河以

来の旗本だが、前田侯は外様の雄藩。百万石の大大名だから、万事面くらうことばかりだ。そうでなくても窮屈なことが一切きらいな逸平である。

天衣無縫な羽がすっかりしぼんで、やつれが目立つほどだった。

さらに彼を悩ませたのは、但馬の姫お千絵さまだった。

あれ以来、毎日のように使いをよこす。宍戸但馬は城持ちだが、金沢城下に拝領屋敷がある。遊びに来いというのでいってみると、諸国の話をせがんだり、小姓を相手に試合をしろの相撲をとれのとねだる。そんなのはまだいいほうだが、自慢の琴を聞かされたり、和歌などのほうに話をもっていかれると、逸平はほとほと弱ってしまう。

コンプレックスを感じるような繊細さはないから、

「逸平は武骨者ゆえ、そのほうはとんと苦手でござる」

と白状しても、千絵姫は聞き入れない。

「謙遜しなくともよいの。そなたのような豪の者が歌の道に暗いはずはありませぬ」

と、つじつまのあわぬことをいう。

確信しているのだから始末にわるい。獰猛な湖賊の手から救出されたのだから、逸平を〝頼みある武士〟とひかれたのも無理はないが、一人ぎめに文武両道の達者と見なされたのには、単純率直な逸平たるもの苦しくてたまらない。

気性がはげしく権高い千絵姫は、恋文を書くということもないし、めそめそ泣くわけでもない。しげしげと屋敷に招くのは、逸平のほうから行動にでるのを待っているのではないか。近ごろでは病膏肓の気味で、侍女を遠ざけ、あかり障子を閉めきって二人だけになりたがる。深窓に育

った女ほど、そうしたことでは大胆だった。

だが、ひたすらにあやのおもかげのみを追いもとめる逸平には、権力と美貌をかさに着た姫の執心は、迷惑でこそあれ、うれしくもなんともない。

逸平くらい官位や権力をきらい憎悪する者はないのだ。千絵姫はいちばん難物の男に恋したわけである。

そうこうするうちに北陸路には冬がきた。

連日、雁渡しの風がすすきの穂をたたきのめすように吹きすさび、膚を刺す寒風には雪片をまじえるようになった。

霜月はじめのある日、夜来の雪が降りつづいて昼すぎにはひざを没するほど積もった。

八ツ下がりに退出してくると、お長屋の路地を雪かきしていた大蟇が、ひげづらをくずして懐中から書状をとりだして、

「きたぞ、きたぞ」

ひらひらさせた。

5

「きたかッ」

勢いこんで封を切ったのは、あやの消息だと早合点したからだ。一瞥して、彼ははげしく舌打ちした。

大蟇がにやにやしたのも道理、宍戸屋敷からの招待状だった。

今宵雪見の宴をもよおしたく、是非ともおいでくだされたく――という簡単な内容。千絵姫の名は書いていないが、千絵姫の侍女が持参したのだから明瞭だ。

「雪見とは風流だの。出かけるか」

大臺疣右衛門はまだからかい口調だ。

「あほうぬかせ。雪ならここでも見れるわい」

肩衣荒々しくむしりとると、唐紙になげつけて逸平はいった。

「大臺、酒を買ってこい。雪見の酒盛りをここでやろうぜ」

「おっと、そういうだろうと思うて、長次を走らせたわい。もうもどってくるころだ」

二人はそこで声を合わせてわらった。

長次がかついできた指し樽のかがみをぶち割って、ひしゃくでくんではそのまま口へもっていく。みえもていさいもない。もっとも素朴な飲みかたであった。

「うまいな」

「うまい」

「こうやっていると、京を思いだすなあ」

「茨組か。妙法院のなめくじらの家でよく飲んだっけ。なめくじらの五郎蔵の首を酒湯灌してやったけな」

逸平はふと首抜血祇之助のことを思いだした。それは当然あやの思い出につながった。

どこにいるのだ、あや……！

雪見酒が悲しみを呼びそうであった。逸平は、長次の手からひしゃくをひったくって、ぐいぐ

いあおった。

飲むほどに酔うほどに、三人はじっとしておれなくなってきた。

青天井のもとでのびのびとあばれまわった血が雪見酒によってよみがえったのである。

「ううむ、早く合戦が始まらねいか」

「たぬき将軍に催促したろか。いつまで待たすねん」

「面倒くせい、大坂城へ乗りこんで火薬蔵にでも火をつけたらどうだ。こいつがほんとの口火というやつじゃ」

大蟇が片はだぬぎになったと思うと、がっと刀をつかむ。

ええい！　腰をひねるや抜き討ち。からになった指し樽が真っ二つに割れ、勢いあまった切っ先がざくっと床板にめりこんだ。

「見切りの下手なところが蟇の蟇たるところかいな」

「ようし、こんどはおれが」

逸平が愛刀をひきつけたとき、玄関におとなう声がした。

「だれだア、あがってこい！」

「女の声や」

と、長次がひじをつかんだ。

「あかん、弁天さまのお出ましやないか」

「なに、弁天さまだと……？」

その耳に、はっきりと、

「大鳥逸平さまは御在宅でございますか」
聞き慣れた声は、千絵姫の侍女、楓にちがいない。
のっそりと出ていった逸平は酔眼をみはった。
楓だけではない。雪のなかに飴いろ網代がとまって被衣の女性がおりたってきたのである。
「――お千絵さまかッ」
逸平は驚きの声をあげた。
「さようでございます」と、楓がきんきんした声で、「いつまで待ってもおいでなきゆえ、直々にお迎えに参られたのでございますよ」
わびろ、感謝しろ、といわんばかりの高びしゃな調子がむっときた。
逸平はさすがにかすかながら狼狽を感じてひざをつこうとしていたのである。その言葉が反骨を刺した。
反射的に彼はぬっと頭をあげると、
「だれが頼んだ？」
昂然と胸をそらしてほえるようにいった。
「だれが来てくれと頼んだ？　あほうあつかいもいい加減にさらせ」
「まあ、なんということを！」
「帰れ帰れ。当家では雪見の宴がたけなわだ。女がくるとおしろいくさくてかなわぬ。帰れ帰れ」
「大鳥さま！　正気でござりまするか。姫ぎみにむかって、なんという雑言。無礼でありましょう！」

「たわけが、ほざくことよ」

と、逸平もたしかに酩酊していた。売られたけんかにこたえるような言葉は、制御のいとまもなく口を突いて出た。

「宍戸但馬どのは御重役だが、娘は娘、小便くさい娘に無礼もへちまもあるものか。そこらの雪でつらを洗って出なおすがよいわい。ははは、ははは」

「大鳥！　そなたは、そなたは……」

霏々として舞いおちる雪のなかに千絵姫はぼうぜんとして立っていた。

美しいおもてが引きつったように固着していた。真っ青だった。

——美しい！　雪女郎のようだ……。

ふっと、そう思ったが、とめどもなく滑りでるのは悪態だった。

「何を突っ立っておる！　雪見のじゃまだ。とっとと立ち去れ。さもなくば塩をまくぞ、塩を」

「お姫さま、だから、だから、楓が申さぬことではありませぬ」

侍女は文字どおりキキッと歯ぎしりした。

6

——父上に言いつけてあげる！

千絵姫は帰邸してもまだ胸はたかぶっていた。こんな侮辱をうけたことは生まれてはじめてであった。網代駕籠に持ちこんだ手あぶりの炭火のせいばかりでなく、全身が燃えるようであった。

「父上！　父上」

日ごろの慎みも忘れて、千絵姫は連呼しながら但馬の居間に駆けこんだ。
「なんじゃ、騒々しい。行儀が悪いぞ」
文机にむかってなにやら黙然と思案していた但馬は、静かにたしなめたが、千絵姫は惑乱したようにべったりと父の前に座って、
「死にたい！」
と、ヒステリックにさけんだ。
「千絵は悔しくて、悔しくて」
「どうした！　大鳥逸平のところに行ったそうだが、何かあったのか。実はそちに話したいことがあって待ったのだが……」
「千絵の話を先に聞いてくださいまし。もう悔しくって……殺してやりたい！」
ぼろぼろこぼれる涙をぬぐいもせず、彼女は逸平の無礼を告げた。告げるうちに屈辱感と悲しみがこみあげてきて、姫は黒髪をみだして突っ伏してしまった。
いたわりの言葉をはさみながら聞いていた但馬のほおに、次第に笑みが浮かんできたのである。
「そうか、そうか。やはり、さような不埒者であったか。丁度よかった。わしが聞きたかったのもそれじゃ。もはや泣かずともよい。わしにまかせておけい」
十七の千絵姫は、泣くだけ泣き、訴えるだけ訴えると、幾らか気も晴れたのか、なだめられてさがっていった。
独りになると但馬は、金網をかぶせた手あぶりに指をかざして書状に目をおとした。
それは本多百助信勝からのものであった。主君前田利長侯にあてたもので、激越な調子で左の

ような意味のことがしたためてあった。

「仄聞するところによれば、先ごろ武蔵ノ国生まれ大鳥逸平なる者を貴藩に召し抱えられた由。右の者は以前当家の小者にして不埒を働き逃亡致した者である。すみやかにお引き渡しを願いたい」

いわゆる「奉公がまえ」というやつ。

当時よくあったものだ。必ずしも各人とばかりはかぎらない。ゆえあって主従の縁を切ったやつが他の大名の家臣となるのは面白くない。で、文句をつける。

抱えたほうでも、新参者のことで大名づきあいが不仲になっては困るので暇をだす。契約を取り消してしまうのだ。

文句をつける大名の勢力が強いほど、浪々を重ねねばならない。現在の安易な雇用契約とはちがい、いのちをあずけた主従関係が断たれるにはよほどの理由がある。だから、奉公がまえされるほど思い知らされるというわけだ。

有名なところでは黒田長政における後藤又兵衛なども執拗に先々で横車を押されたものだ。

戦国三兎口として鳴らした豪傑の二代目、同名百助信勝からの奉公がまえだから、老臣たちはいまさらのように逸平を非難し、宍戸但馬に責任をおしつけた。

「そのような各人なら暇をくれて追放してしまおう」

保身のためにはしかたがない。そこでただ一つの難点は千絵姫の彼に対する慕情。

百万石家中で二と下らぬ美しい娘には甘い但馬だった。

姫の心が逸平から離れたとわかれば、あとは決断するだけ。残された問題は、

「なにしろ三人とも豪の者、すなおに立ちのくだろうか……紛糾するようならいっそ……」

くぼんだ目がぎょろりと光った。
宍戸但馬の名で逸平はじめ三人が招かれたのはその翌日のことである。
「盛大なる雪見の宴を催したく、是非――」
という。
お神楽の長次はてもなく喜んで、
「いい兄貴を持ったおかげや。わっちらもこりゃ出世の糸口やねん」
大蟇はそれほど単純でもなかったが、
「昨夜のじゃじゃ馬姫が口説きおとしたのかもしれぬ。でかけるかの、逸平兄い？」
「但馬の亭主ぶりを見に行くか」
雪はやんでいたが積雪は深く、城下を銀一色に化粧している。
大手町の宍戸屋敷に着くと、あるじ自ら出迎えて、
「ようこそみえられた。今宵はいろいろと趣向を凝らしてござる。まず女どもにあかをかかせよう」
「ふろか。馳走にあずかろう」
三人は豪華な湯殿へ案内された。
総ひのき造りで六坪ほどあり、半ばはざくろ口だけぽっかりあいた簀ノ子――蒸しぶろである。
「ふえっ、こないふろに毎日入って美女にあかをかかせるとは極楽やな」
お神楽の長次は有頂天だった。
蒸しぶろの設備は湯舟のそれと違って造作や維持費が数倍かかるから、大した馳走である。そ

れに、まだ新しい木の香が湯気に溶けていいにおいをふりまいている。

ふろたきは歓待のつもりかさかんに薪をくべているらしい。湯気はもうもうとふろ場にこもって、どんどん熱くなる。

「すっかり膚がむれたが、湯女はどうしたのかの」

「それに、ちと熱すぎるの。息苦しくなってきたわい……」

大蟇が手をのばして湯気ぬきの無双窓を開けようとした。さびついたように動かない。水槽をのぞいてみると、すっかりからになっている。

「なんや、見かけだおしの湯殿や。ああ、たまらん」

「御家来衆、御家来衆、存分にむれ申した、水を落としてくだされい」

大蟇は板戸をたたいて呼んだ。が、馳走役の者もいないのか返事がない。そして、その戸までがあかないではないか。

「こ、これは、どうしたことじゃ?!」

大蟇の狼狽を逸平は湯気に透かしみて、

「はかられたぞ」

とさけんだ。

「但馬はわれらを蒸し殺すつもりだ!」

「な、なんでや。なんで殺さにゃならんのや」

「理由は但馬に聞け」

憶測や論議のひまはない。湯気は流し場をも包み、ますます熱くなってくるのだ。逸平は手桶

をつかむや無双窓にたたきつけた。つづいて大嚢が腰掛けをたたきつけた。わずかの破れができるとめりめりと引っぱがす。湯気はすさまじくうず巻いて夜空へ流れだした。わっと戸外でどよめきが起こった。あおられたように逸平が窓へとびついた。

「――出たぞ、逃がすな」

下知する声は但馬の腹心伴重兵衛だ。

「降りるところを切れ。槍の者、槍ぶすまを作るのじゃ」

包囲は完璧だった。雪あかりも三人に不利をもたらした。さらにかがり火が増やされ、襷がけに伊賀袴の武士が白刃を手にして何重にもとり囲んだ。

湯気のなかから上半身をぬっとのぞかせた逸平は、恐れげもなく刃ぶすまを見おろして、

「長次、大嚢、こりゃいよいよきれえな念仏も唱えねばなるめえ」

この土壇場になってなお不敵な哄笑である。

ひゅん！　弦音たかく矢がとんできた。

7

但馬はそのとき、老妻や侍女とともに千絵姫の狂乱を鎮めるのにおおわらわだった。

「逸平さまを、逸平さまを、蒸し殺すなんてひきょうです。残酷ですッ」

千絵姫は直前まで父とその腹心の計画を知らなかった。ものものしい邸内の空気に驚いた。本多家から追捕の届けがでている各人だと聞くといっそう父をなじった。

「逸平さまは悪人ではありませぬ。よしんばお人を切ったとしても出奔したとしても、それには

それだけの理由があったにちがいない。その証拠には、金沢では悪事などなさらないではありませぬか」

と弁護した。

「ねこをかぶっているのじゃ。懐中に火薬を抱き、歯に毒を秘めた者をうち捨ててはおけん」

「でも、ただしてみるのが道です。それもせずにだまし討ちなどひきょうです」

「猛獣に尋常な話などできぬわい」

但馬は湯殿の怒号を聞きながら押さえる手に力をこめて、

「だいいち、そちは逸平など殺したいと昨夜は申したのに、なんとしてじゃ」

「そんなこと千絵はいわない」

と、黒髪をみだして彼女はさけんだ。

「父上になんか、千絵の気持ちはわかりっこないの。いっそ、いっそ、千絵も殺して！」

但馬はほとほと手を焼いた。老獪な術策を弄して今日の地位を得た彼には、純一な処女心の複雑さなど解しようがない。

舌でもかみかねない千絵の慰撫を女たちにきつく命じて湯殿の裏へまわっていくと、

「殿、危のうございますっ」

小姓が体当たりに突きとばすようにかばった。

風をきってとんできたかわらが、但馬のそでをかすめて、ぱっと雪を舞いあげた。

「手ごわいやつらです。青江が大けがしました。ほかにも四、五人。あ、危ない！」

但馬も身をひるがえして物かげに逃げこんだ。

矢をつがえる間をおかせぬように、ぴゅんぴゅんかわらがとんでくる。かわらは賢明にも、弓ばかりでなく、かがり火をもねらっていた。

ふんどしひとつのたくましい三人が湯殿の屋根にのぼって、かわらをはがしては投げつけているのだ。もうもうと吹きだす湯気がかえって寒気をふせいでくれることになったのか、三人とも威勢のいい罵言を浴びせてひるむ様子もない。

「ゆ、弓をもっとふやせ」

がたがた震えながら、但馬はしゃがれ声でわめいていた。

「それから、だれか二、三人、鉄砲を借りてこい」

「それは、しかし……」

「ええい！　危急の場じゃ、早くせい！」

さわぎは大手町一帯に広がっていた。

重臣や目付などと合議して、藩主利長の裁許を仰いだ上意討ちである。が、あくまでも不意を襲うために直前まで極秘を守られていたのだ。

近所の屋敷でも、戦か盗賊かと驚いて追っとり刀でとびだしてきた。

頼みにした鉄砲がとどかぬうちに、但馬は侍女のかん高い声を聞いた。

「姫ぎみが、姫ぎみが！」

ぎくりと――但馬の胸に亀裂が走った。楓が転がるように走ってきたが、

「姫ぎみが、姫ぎみが」

と、痴呆のように同じ言葉をくりかえしている。

その肩をつかんで但馬がゆさぶったとき、はげしい物音がどこやらで起こった。

それが馬屋だと気がついたのは、狂ったようないななきと、悲鳴が聞こえてきたからである。湯殿を包囲していた侍たちが算をみだして逃げだした。馬が——宍戸但馬自慢の南部馬、木曽馬など七、八頭が雪をけちらして暴走してきたではないか。

とっさに、それが千絵姫のしわざと知るには、但馬は冷静を欠いていた。

混乱した頭で、失策だ、失策だ、と彼はつぶやいていた。

そのうつろな目に、逸平の仁王さながらの裸身が宙にとんだのが見えた。そして、大蔓が、長次が——

はだか馬にまたがった三人の無法者は、低い築地塀をひととびして、視界から消えた。

数本の矢がそのあとを追ったが、弦音もむなしくやみに吸いこまれるのを、但馬は楓の肩をつかんだままぼうぜんと見送っているだけであった。

花はしおれず

1

翌朝、金沢の城下は昨夜のうわさで持ちきりだった。

ことに、大手町の宍戸屋敷の近辺はひきもきらぬ野次馬で雪が汚されたし、城下目抜きの場所には墨あとも生々しい人相書きが張りだされた。逸平たち三人だけではなく、猿太と荒熊まで仲

よく顔（似てはいなかった）が並べられたのは、しょせんは連類と見なしてのことだ。
ただ騒動を起こしたというだけではない。数旬前は湖賊を絶滅した英雄として喧伝されたそのうわさも消えぬうちだから、城下が沸いたのも当然であろう。
「大それたやつではねいだか。かわらでぶん殴られて二人も死んだとよ」
「二人ではねい、五人だと。けが人なんざ二十人ではきかねいとのう。だが、裸では道中もなるめいで。すぐに捕まるべい」
「さ、それがさ、利口なやつで、逐電する前にお長屋に引き返して着込んでいったという。お役人衆が駆けつけたときは、壁に、あほんだら、と書いてあっただな。あほんだら、と」
「声が大きいわい。そういえばな、宍戸但馬さまは責めを負って切腹なさりかけたとな」
「ふうん、大変なこっちゃのう。それで、死なっしゃってか？」
「いんにゃ、御家来衆がお止めして、いまは謹慎なされていると聞いたが」
「惜しいことをした」
「何が惜しい？」
「百万石小町の千絵姫さまに押しかけ婿になり損ねたわえ」
「何をぬかす。こいつこそ、あほんだら野郎じゃ」
高札場の前はいれかわり立ちかわり老若男女があつまって、がやがや騒いでいた。
いましもこの武蔵ノ辻に通りかかった旅姿の女があった。
疾れた足どりだ。ほそい竹のつえにほそいからだを支えて、やっと城下にたどりついた様子。
雪道に疲れきって高札場の騒ぎに興味を寄せるゆとりもないらしかったが、何を聞いたか、ふ

っと足をとめてふりかえった。
「――もしッ」
と、見も知らぬ男に話しかけたのである。
「いまのお話の、逸平、と仰せられたのは、大鳥逸平さまのことでしょうか?」
「え……? なんだね、おまえさんは」
「あの、率爾をお許しくださいまし。大鳥逸平さまを御存知でございましょうか」
「知るも知らんも。ほれ、あの人相書きを見なされ。ちゃんと、背丈から太りぐあいから……」
「え、人相書きなどが?!」
女は驚いたように口走ってのびあがった。よく見えなかった。ごめんくださいましと、人々をかきわけるようにして前へ出た。
「まあ! 逸平さまが……」
布告を読み下したとたん、小がらなからだは電撃をうけたようによろめいた。
その姿は人々の目を引かないはずはない。近親者か知人以外の者ではありえなかった。群集はびたりと騒ぎをやめた。そして、猜疑と不審と好奇のぶしつけな視線でじろじろなめまわした。
「――おまえ、この男の知己なのかえ……?」
金棒引きらしい女がとがめるようにいった。
「ええ、ええ……」
うなずくうちに涙が双眼にあふれてくる。
その旅の女はあやだった。

越前の今庄の近くで大久保石見の輩下に追われて崖から落ちて気を失っているところを、親切な山賤に救われた。数日にわたってねんごろな介抱を受けて元気をとりもどしてから、逸平の足跡を追って金沢にたどりついたのである。

そのあやにとって、逸平追捕の人相書きは青天の霹靂だった。

その女が口火を切ったので、皆は急に勝手な質問を浴びせかけてきた。が、あやはこたえるどころではなかった。おもてをおおい、その場にうずくまってしまった。

役人にいち早く注進した者があったとみえ、あやはその場から引き立てられた。

糾問所できびしく取り調べられた。

だが、

「逸平の隠れ場所を申せ」

と責められても答えようはない。それを知っているぐらいなら苦労はしない。うその言えそうもないあやの態度に、役人は質問をかえた。

「推測でもよい、思いだしてみよ。この近辺にきゃつが身を寄せそうな知人の名は？」

それもしかしむだだった。ただでさえ蒲柳の質だ。拷問すれば死ぬだろう。役人がようやくいらだってきたとき、千絵姫が糾問所にあらわれた。

「父但馬の名代でございます」

きっぱりといった。あやのことを聞いて乗りこんできたのだ。

――この女が！

美しい目が、一瞬、異常に光った。少しばかりの侮蔑と制御しきれない妬心、十七の千絵姫の

胸には三十女のような黒い嫉妬のうずが音をたてていた。

逸平と夫婦約束のあった女。

この女ゆえに、逸平は姫の恋を受け入れなかったのだ。姫に恥をかかせたのだ。あのときの屈辱は思いだすだけでくわっと胸が燃える。憎もうとしながらなお憎めない逸平への執着！　それが悲しい女心だと自覚したとき、憎悪はあやにむけられた。

聖女ですらも一生に一度は鬼女になることがある。

千絵姫は冷たいわらいを端麗なおもてに浮かべていった。

「いかがでしょう、大鳥逸平をとらえるのに、この者をおとりにつかっては。聞けば夫婦の約束があるとやら、あの男のことゆえ必ず姿を現すはずです」

「なるほど、よいお考えだ。早速その由言上して取り計らいましょう。うむ、さすがは御家老の姫ぎみ」

「磔刑か、車裂きか、極刑がよいと思います。それだけうわさのひろまる度合いが高くなるのだから」

千絵姫は残忍な微笑であおった。

翌日、ふたたび高札場はにぎわった。五日後にあやを犀川の中州で火あぶりにするという告示が出たのだ。

2

おとり——と、千絵姫はいった。

だが、本心からそう思っての発案だろうか。彼女は逸平の気質を知っている。奔放豁達そのもので低迷がない。その気質にひかれ、その気質ゆえに恋は成らなかったのだ。金銭に淡泊で自由を愛する大鳥逸平が、近在に低徊していようはずがない。それと充分知りながら、おとりを勧めたのは、ひたすらなあやへの憎しみにほかならなかった。

たしかに――

逸平と朋友二人は、そのあたりにまごまごしてはいなかった。関所をさけて倶利伽羅峠を越え、越中を突っ切り、越後に入っていた。

あや処刑の話を耳にしたのは、姫川の渡し舟を待っているときであった。

無言だったが、逸平の顔いろが変わるのを二人は見た。磊落な表情が凍ったように消え、真っ青になってひくっひくっと目じりに痙攣が走った。

やがて、話題があやの美貌から雪国らしく雪女郎に移った。逸平はすっと立って歩きだした。十間ばかり離れると、ついてきた二人をふりかえって、

「聞いたな」

と、激情をおさえた声でいった。

「聞いた」

「おれはもどるぞ。いや、何もいうな。おとりかもしれん。危ないのは承知の上だ。だが、あやが火あぶりになると知って手をこまぬいておれるか、な。とめねえでくれ」

「とめるものか」

と、怒ったように大鼻はいった。

「とめてとまるおぬしでもあるまいて」
「そやそや。これから馬をとばせば、夜半までには金沢へゆっくりや」
逸平は残りの路銀を三等分した。ひらりと葦毛にまたがると、大蟇も長次も馬にとびのる。
「やい、おぬしらはどこへ行くぞ」
「金沢や」
けろりとして長次が、
「犀川の中州にちっと用があっての」
「バカッ、おぬしらを連れてはいけん。ここで別れるのだ。な、大蟇、長次、逸平のことは忘れてくれ。恋に盲いた逸平は死ぬ。それも自業自得だ。が、おぬしたちまで死ぬことはねえ」
「水臭いぞ、逸平」
「いや。おぬしらの気持ちアかたじけねい。だがよ、巻き添えにしたくねいのさ。あやはおれの女だ。やり損なってもあきらめきれる。これが五分五分の勝負なら、おぬしらの力を頼みもしよう。だが、成功は万に一つ。そんな危ねい橋にどうしておぬしらを誘えるものか」
「誘いたくなくば誘うな」
と、大蟇がどなった。長次は鞍壺をたたいて、
「そやそや。わてらは勝手に犀川へ行く。とめたらあかんで」
「何度いうたらわかるんだ！」
逸平は、葦毛からとびおりて、大蟇の足をつかむや、強引にひきずりおろした。
「うわッ、何をさらす！」

「生意気ぬかさずと、越後女でも抱いていろ」
腰車にかけて姫川の中へなげこんだ。
「逸平兄い、蠹を凍らせるとは殺生や」
助けようと川べりに駆けよる腰帯をつかまえて、
「いいか、お神楽の、逸平が最後の大盤ふるまい姫川酒、飽きるほど飲むがいいわい」
どーんと突きとばした。
長次が悲鳴とともにもんどりうって転落するのをふりかえりもせず馬上の人となるや、凍てた道に小気味よい蹄の音をとどろかせて西へ——馬も人も恋の炎となって宙をとぶ。

3

神だのみにひとしい一縷ののぞみも、無情な冬の夜のひき明けとともに消え去った。
払暁、寅の一点——七ツを打った鐘の音が暁闇の空にひびきを残しているうちに、地獄のお迎えのような牢番がかぎをがちゃがちゃいわせてやってきた。
「——出ろ」
声まで青鬼のように冷たい。
牢役人の手続きも『逆臣大鳥逸平妻女あや』として行われた。
あやがはっきりとそういったのである。逸平の名誉も罪業も、すべて共にしたかった。それで処刑されるならばむしろ本望だった。
欲をいえば、いま一目会いたい。だが、それは、

——こんなこと思ってはいけない……。

と、真剣に彼女は心を偽ろうとする。

——もしも、親切な神さま慈悲ぶかい仏さまが会わせてやろうとおっしゃったら……。

逸平はむざむざとわなにはまってしまう。

——思うまい。忘れよう。逸平さまのほうでも、とっくにあやのことは忘れておいでかもしれないもの……。

あやは糾問所での千絵姫——と名は知らなかったが——の姿を思いだした。

冷たい美貌と身に備わった気品、威厳。その姫と逸平の仲を直接に結びつけては考えないまでも、少なくとも一人前の武士に出世したことによって、逸平のまわりに家中の娘が出没したであろうことは想像に難くない。

武蔵ノ国大鳥村の庄屋の娘だが、武家奉公にでてあやは浮き世のつらさを知った。逸平とめぐりあって恋の悲しさを知った。さらにいま、死を前にして静かなあきらめの美しさを知った。古来の美徳というような倫理を意識したのではない。ただひたすらに逸平を愛するために——

——あやは死んでいきます……。

裸馬に乗せられ、刑場に運ばれるあいだも気持ちはゆるがなかった。

野次馬の嘲罵や下司な諧謔、早手まわしの念仏なども、あやの耳には入らなかった。

何も知らない子供たちに馬のわらじや雪つぶてを投げつけられたが、寛大に許せた。

馬上から見る加賀の山脈は雪を頂いて美しかった。軒下の残雪の汚れにも人の世の慕わしさが感じられる。

心に一点のみだれもないこの静けさはどこからくるのだろう。愛することの喜び。惜しみなく与えることからくる無のすがすがしさ。禅に入ったわけでもないのに、死を目前にして澄みきった気持ち。大悟の安らかさ——

それは犀川の中州に急造された刑場に着いて十字架に縛りつけられても変わらなかった。温かいあげ潮のような法悦に浸りながら、あやは恋の絵巻を静かにめくっていた。

京で偶然めぐりあったときのこと、慕情をうちあけられたときの気の遠くなるほどの喜び、無法ゆえ逸平が真剣勝負の度を重ね、そのたびにはらはらしたことなどまでが懐かしかった。

それに付随して、彼女を手込めにしようとした佐々木小次郎や、首抜血舐之助や、小田井久馬までが憎しみの気持ちもなくふりかえられる。

——いけないわ……。

いましも山の端に顔をだそうとしている旭光を見まもって、あやは顔をふった。

もういくらも時間がないのだから、ほかの人のことなど考えてはいけないの。逸平さまのことだけ逸平さまのことだけ……。

逸平の体臭をふいに感じた。目を閉じると、ひろい胸板にもじゃもじゃ生えた胸毛の感触がよみがえった。朝日があがった。朝風が出てほおにみだれかからせていた。

朝日があがった。かっと、まぶしく雲が光った。

美女の火刑を見ようとして群集がぞくぞく集まり、犀川の両岸は人垣で埋めつくされていく。

中州には上流を背にして幔幕が張られ、検死の役人が床几に腰かけてその時を待っていた。十字架の足もとには枯れ草と薪が積まれ点火するばかり。

時刻は迫った。かがり火の火を松明に移しとって、火つけ役が命令を待っている。城のほうから足軽の一隊が鉄砲をかついでやってくるのを見たとき、ふいに、あやの胸に一抹の不安がかげった。

率然として幼時の記憶が浮かんだのだ。

隣村の祭りに遊びにいって、連れとはぐれたことがある。十人あまりの悪童たちにいじめっこにあっているとき、逸平が一人でとびこんできて助けてくれた。

そのとき、逸平も大けがをした。多勢の人数など考えない向こう見ずの気性がふっと心配になったのである。

暗い予感が——それは逸平の深い愛情の確信からきたものかもしれなかった。いけない、と思った。

——逸平さまは助けに来てくださる。必ず必ず……。

どうしたことだろう。来てはいけない、と心に叫びながら、一方ではもう一度あのたくましい胸に抱きしめて欲しかった。

胸が悩ましく波をうった。はじめてのようにせつないあえぎだった。

そのとき、あたかもその肉体のうめきにこたえるように、西岸さくら畑の一角にわっとどよめきがあがった。

群衆がくずれ立ち、一頭の騎馬が浅瀬に乗り入れてきたのである。

「あ、逸平さま！」

遠目ではあったが、恋しい面影はそれとわかった。騎馬は白路をけたててまっしぐらに走って

くる。

両岸の叫喚、役人たちの緊張のうちでにやりとしたのは伴重兵衛。あの夜の失敗をつぐなうべく買ってでた役目だった。

「出てきたな、狂い山犬が」

さっと手をあげると、十四、五人の鉄砲隊がばっと二列に並び、前列は折り敷いてねらいをつける。

銃口をむけられた方の群衆は、悲鳴をあげて逃げ惑った。だが、重兵衛はその混乱に判断をあやまるようなことがなかった。計算にいれていたことだ。着弾距離からいっても、見物人を傷つける心配はなかったが、雪夜の失敗に懲りている。充分に引きつけて撃つ。

「いけない。逸平さま、逃げて！」

あやが絶叫した。

重兵衛の手がさっとふられた。轟然たる銃声が女のさけびを断ち切り、すさまじい硝煙が一瞬に河原をつつんだ。

4

「ああ、逸平さまーッ」

あやの悲鳴は、重兵衛には賞賛のそれに聞こえた。

彼は、

「殺ったぞ、殺ったぞ」

おどりあがって叫び、抜刀するや硝煙の中に走りこんだ。

きな臭い火薬のにおいが両岸に流れ、硝煙は濃い層をなして河原にたゆたっている。暗灰色のけむりはすべてを包んでいた。だが、七、八丁の同時射撃をだれがさけられよう。後列の銃隊も鉄砲をかまえる者もなく、群衆と同じく目を凝らして硝煙の晴れるのを待った。

と——異様などよめきが起こった。役人たちも、銃隊も、ぎょっとして瞠目した。

見よ——徐々にうすれゆく硝煙をやぶって、よろめき出てきた人を、馬を。

逸平も葦毛も数発ずつを受けたらしく、全身、朱に染まっていた。

愚かに功をあせった重兵衛のからだを逆さ抱えにして十字架に近づく形相は、この世のものとは思われない凄艶さだった。

阿修羅の化身か。不死身の逸平の生命力に、役人たちはぼうぜんとしてなすすべを知らなかった。

「あ、逸平さまッ」

「あや！　たすけにきたぞ！」

懐かしく、頼もしい逸平のさけび、どっとこみあげた涙が視界をかすませた。

おもてをはげしくふって涙をふりこぼしてみる。逸平にちがいない。

夢ではない。

残夢に憑かれたような役人たちをむちうったのは、逆さ抱えにされた伴重兵衛。

「何をしておる！　火をつけろ。こやつを討て、討て！」

狂ったようにわめき散らした。

「そうだ、火をつけろ」
検死の役人がさけんだ。
「鉄砲組、撃て、ねらって撃つのだ。やれ！」
後列銃隊が気をとりなおしてかまえたとき、轟!!　天地の崩れるような大音響が起こった。ぐらぐらっと大地が揺れた。金沢城内で目もくらむような火柱が天に沖した。
大小のすさまじい爆発音が連続した。黒煙はたちまち天守閣を包み、城下の空を覆った。間断ない炸裂音は家並みをゆすぶり、朝の空気をかき濁した。
「――火薬蔵だッ」
「お城が燃えるぞ、城下が！」
ばらばらと板切れや火の粉が降ってきた。役人は役目を忘れ、群集が算を乱し、声のかぎり叫んで右往左往するなかを、逸平は十字架に駆けよった。
盾にした重兵衛をほうりだして、あやを助けおろす。
「逸平さまッ」
「あや、よかったの、よかったの」
ひしと抱きしめる手も胸も、しとどな血であった。
「おけがは。ま、たいへんな血が」
「なんの、急所をうまくそれてくれたわい」
ひさびさの逸平のたかわらいである。
「だが、折よいところに城で変事が起こったものだ。神助というやつだ。さ、逃げよう」

「こやつ、逃がしてなろうか」
重兵衛が身をおこすとわき差しで切りかかった。
「うぬ、しちっくどい！」
ふり返りざまに片手切りの一刀。脳天からへそまで切りさげられて、重兵衛は薪のうえにぶっ倒れた。
そこに三頭の騎馬がとんできた。
「うまくいきよったの、逸平兄い」
お神楽の長次だった。そして大蟇疣右衛門。逸平はすぐにさとった。
「そうか、おぬしたちか、火薬蔵をやったのは。かたじけねえ。すんでのことに心中よ」
「姫川酒の返礼さ」と、大蟇は引いてきた馬のくつわを握って、「早く乗れ。おれアどうやら風邪をひいたようだ」
「ほんものの酒をたっぷり飲ましてやる」
「祝言の酒か？　婿どのを酔いつぶしてくれよう」
先頭に長次が走り、あやを抱いた逸平をあいだにはさんで、三騎は川岸を疾走した。河口にはすでに舟の手配もしてある。
今宵は祝言——冗談のようにいった大蟇の言葉があやをとらえていた。そうだ、明日はたとえどうなろうと、愛の泉はくめるときにくむべきではなかろうか。いのちの歓喜がひたひたとあやの胸をぬらした。
逸平のひろい胸にしがみついたあやは、男の体臭と血のにおいのなかでうっとりと目を閉じた

のである。

北陸路の春も遠いことではあるまい。

0193-012224-3066

春陽文庫

剣客往来



昭和51年7月15日　初版印刷
昭和51年7月25日　初版発行

著者　早乙女貢
1976©
発行者　和田欣之介
印刷　城北印刷製本センター
発行所　株式会社　春陽堂書店
東京都中央区日本橋三丁目四番一六号
電話（二七一）〇〇五一番
振替　東京　一六一七番
乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。
製本・文宝堂　定価はカバーに明記してあります。

紅梅行燈 山手樹一郎 200
蔦のぼんくら松 山手樹一郎 160
桃太郎侍 山手樹一郎 320
朝焼け富士 山手樹一郎 340
夢介千両みやげ 山手樹一郎 380
又四郎行状記(上) 山手樹一郎 320
又四郎行状記(下) 山手樹一郎 300
恋風街道 山手樹一郎 380
二階堂万作 山手樹一郎 200
ぼんくら天狗 山手樹一郎 220
青空浪人 山手樹一郎 260
地獄ごよみ 山手樹一郎 220
素浪人日和 山手樹一郎 360
恋天狗 山手樹一郎 220
浪人横丁 山手樹一郎 240
青雲の鬼 山手樹一郎 240
鉄火奉行 山手樹一郎 240
江戸の朝風 山手樹一郎 360

ぼんくら与力 山手樹一郎 180
ぼんくら千両 山手樹一郎 220
花の青空 山手樹一郎 180
いろは剣法 山手樹一郎 140
青春道場 山手樹一郎 180
江戸の虹 山手樹一郎 340
青春の風 山手樹一郎 200
江戸の暴れん坊 山手樹一郎 260
青空剣法 山手樹一郎 420
はだか大名 山手樹一郎 360
野ざらし姫 山手樹一郎 240
浪人若殿 山手樹一郎 300
江戸花火 山手樹一郎 200
変化大名 山手樹一郎 400
天保紅小判 山手樹一郎 340
花のお江戸で 山手樹一郎 180
わんぱく公子 山手樹一郎 340
浪人八景 山手樹一郎 400

春秋あばれ獅子 山手樹一郎 220
若殿ばんざい 山手樹一郎 200
青春峠 山手樹一郎 180
和蘭囃子 山手樹一郎 220
のっそりと参上 山手樹一郎 180
恋染め笠 山手樹一郎 320
侍の灯 山手樹一郎 480
鶴姫やくざ帖 山手樹一郎 240
鍔鳴浪人 角田喜久雄 360
どくろ銭 角田喜久雄 320
風雲将棋谷 角田喜久雄 260
次郎長三国志 村上元三 400
上総風土記 村上元三 200
風流剣士 村上元三 220
風流あじろ笠 村上元三 300
飛龍無双 陣出達朗 240
たつまき奉行 陣出達朗 220
火の玉奉行 陣出達朗 200

はやぶさ奉行 陣出達朗 220
長脇差奉行 陣出達朗 200
喧嘩奉行 陣出達朗 220
わんぱく大名 陣出達朗 200
わんぱく三度笠 陣出達朗 200
よさこい奉行 陣出達朗 220
まぼろし奉行 陣出達朗 240
すっとび奉行 陣出達朗 320
復讐の美女鬼 陣出達朗 220
孔雀駕籠 陣出達朗 400
隠密姫 陣出達朗 240
旗本退屈男 佐々木味津三 320
蛇姫様 川口松太郎 360
黄門廻国記 直木三十五 460
松平長七郎青春記 下村悦夫 180
秘剣流れ星 南条範夫 180
青雲を指す剣 南条範夫 240
念流合掌くずし 南条範夫 220

清水の次郎長 村松梢風 320
水戸黄門 山岡荘八 280
柳生旅日記 鳴山草平 220
花咲ける武士道 神坂次郎 200
上方武士道 司馬遼太郎 320
梟の城 司馬遼太郎 320
風神の門 司馬遼太郎 420
真田幸村 尾崎士郎 240
千葉の小天狗 秋永芳郎 260
仇討ち物語 池波正太郎 180
錯乱 池波正太郎 200
うつせみ忍法帳 早乙女貢 300
まぼろし若殿 早乙女貢 240
伊賀忍法 早乙女貢 220
忍法秘巻 早乙女貢 200
忍法無情 早乙女貢 200
江戸まだら蛇 早乙女貢 300
さみだれ無頼 早乙女貢 180

忍法系図 早乙女貢 220
斬らずの若殿 早乙女貢 220
忍法女笛 早乙女貢 200
忍法関ガ原 早乙女貢 200
忍法雪月花 早乙女貢 200
さむらい鴉 早乙女貢 180
かげろう天狗 佐竹申伍 220
花の無法剣 佐竹申伍 380
若殿まかり通る 佐竹申伍 360
変化若君 佐竹申伍 220
むらさき若殿 颯手達治 200
やまざる大名 颯手達治 200
地獄飛脚 颯手達治 200
ひょうたん侍 颯手達治 200
若さま隠密帳 颯手達治 220
若さま恋頭巾 颯手達治 220
若さま影法師 颯手達治 220
若さま風来坊 颯手達治 200

悪たれ若殿 颯手達治 240
若さま変化 颯手達治 260
若さま伝法 颯手達治 260
若さま小天狗 颯手達治 240
若さま旅日記 颯手達治 220
若さま青春記 颯手達治 220
若さま犯科帳 颯手達治 220
若さま居候 颯手達治 260
素浪人大名 江崎俊平 220
消えた若殿 江崎俊平 220
名城物語 江崎俊平 260
江戸っ子大名 江崎俊平 200
気まぐれ大名 江崎俊平 220
闇法師変化 江崎俊平 320
黒百合秘帖 江崎俊平 220
おもかげ大名 江崎俊平 220
夕雲峠 江崎俊平 300
朝姫夕姫 江崎俊平 200

江戸の野獣たち 江崎俊平 220
まぼろし絵図 江崎俊平 320
侍ニッポン 群司次郎正 200
鬼姫剣法 井口朝生 220
忍者霧隠才蔵 木屋進 220
江戸の朝晴れ 木屋進 200
八州けんか笠 木屋進 200
忍者は斬れ 木屋進 200
浪人恋変化 木屋進 180
剣風長七郎 北園孝吉 180
おとぼけ侍 北園孝吉 220
めおと大名 風巻紘一 240
剣豪次男坊 風巻紘一 200
からくり殺法 風巻紘一 220
柳生十兵衛 大塚雅春 240
女忍秘抄 大塚雅春 260
忍法五三ノ桐 戸部新十郎 220
満月秘文 大平陽介 240

血汐笛 柴田錬三郎 280
源氏九郎颯爽記 柴田錬三郎 380
主水血笑録 柴田錬三郎 220
遊太郎巷談 柴田錬三郎 360
おれは侍だ 柴田錬三郎 200
私説大岡政談 柴田錬三郎 160
南国群狼伝 柴田錬三郎 180
異常の門 柴田錬三郎 320
忍者からす 柴田錬三郎 220
度胸時代 柴田錬三郎 340
旗本伝法 土師清二 340
大久保彦左衛門 土師清二 360
無頼三十万石 土師清二 260
稲妻浪人 和巻耿介 220
女犯地獄 野村敏雄 320
寛永御前試合 郡順史 200
風流天狗剣 郡順史 220
金太郎侍 一條明 180

恋染め街道 真鍋元之 180
旅姿五十三次 大林清 200
月下の若武者 永岡慶之助 220
雪の謀将 永岡慶之助 260
情炎の美姫 真下五一 200
若さま侍捕物手帳 双色の渦巻 城昌幸 200
若さま侍捕物手帳 五月雨ごろし 城昌幸 180
若さま侍捕物手帳 人化け狸城 城昌幸 180
若さま侍捕物手帳 幽霊駕籠 城昌幸 180
若さま侍捕物手帳 虚無僧変化 城昌幸 260
若さま侍捕物手帳 天を行く女 城昌幸 220
人形佐七捕物帳全集1 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集2 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集3 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集4 横溝正史 320
人形佐七捕物帳全集5 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集6 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集7 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集8 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集9 横溝正史 340
人形佐七捕物帳全集10 横溝正史 320
人形佐七捕物帳全集11 横溝正史 320
人形佐七捕物帳全集12 横溝正史 320
人形佐七捕物帳全集13 横溝正史 320
伝七捕物帳 陣出達朗 240
江戸犯科絵図 和巻耿介 280
右門捕物帖(1) 佐々木味津三 260
右門捕物帖(2) 佐々木味津三 260
右門捕物帖(3) 佐々木味津三 260
右門捕物帖(4) 佐々木味津三 240
ゆっくり雨太郎捕物控 多岐川恭 260
続ゆっくり雨太郎捕物控 多岐川恭 260
相良一平捕物帳 森達二郎 300
御朱印銀次捕物帳 島田一男 200
同心部屋御用帳1 島田一男 260
同心部屋御用帳2 島田一男 260
同心部屋御用帳3 島田一男 260
同心部屋御用帳4 島田一男 320
此村大吉無頼帖 早乙女貢 220
三角館の恐怖 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集1 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集2 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集3 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集4 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集5 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集6 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集7 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集8 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩名作集9 江戸川乱歩 200
江戸川乱歩長編全集 全20巻
(1)孤島の鬼 江戸川乱歩 240
(2)蜘蛛男 江戸川乱歩 240
(3)魔術師 江戸川乱歩 220
(4)猟奇の果 江戸川乱歩 200

(5) 黄金仮面 江戸川乱歩 220
(6) 吸血鬼 江戸川乱歩 280
(7) 白髪鬼 江戸川乱歩 200
(8) 妖虫 江戸川乱歩 200
(9) 人間豹 江戸川乱歩 220
(10) 黒蜥蜴 他一編 江戸川乱歩 240
(11) 緑衣の鬼 江戸川乱歩 240
(12) 大暗室 江戸川乱歩 260
(13) 悪魔の紋章 江戸川乱歩 220
(14) 幽霊塔 江戸川乱歩 260
(15) 一寸法師 他一編 江戸川乱歩 240
(16) 暗黒星 他一編 江戸川乱歩 260
(17) 幽鬼の塔 他一編 江戸川乱歩 240
(18) 化人幻戯 江戸川乱歩 200
(19) 影男 江戸川乱歩 220
(20) 十字路 他一編 江戸川乱歩 280
高木家の惨劇 角田喜久雄 180

横溝正史長編全集 全18巻

(1) 本陣殺人事件 横溝正史 280
(2) 蝶々殺人事件 横溝正史 280
(3) 不死蝶 横溝正史 240
(4) 吸血蛾 横溝正史 260
(5) スペードの女王 横溝正史 260
(6) 扉の影の女 横溝正史 220
(7) 夜の黒豹 横溝正史 300
(8) 悪魔の百唇譜 横溝正史 260
(9) 火の十字架 横溝正史 200
(10) 魔女の暦 横溝正史 220
(11) 支那扇の女 横溝正史 220
(12) 壺中美人 横溝正史 220
(13) 死神の矢 横溝正史 280
(14) 毒の矢 横溝正史 320
(15) 堕ちたる天女 横溝正史 240
(16) 貸しボート十三号 横溝正史 320
(17) 華やかな野獣 横溝正史
(18) 蠟美人 横溝正史

死を呼ぶクイズ 幾瀬勝彬 240
幽霊紳士 柴田錬三郎 220
瀬戸内海殺人事件 草野唯雄 200
抹殺の意志 草野唯雄 220
船富家の惨劇 蒼井雄 280
秘密パーティ 佐野洋 200
高すぎた代償 佐野洋 200
賭の季節 佐野洋 200
第一二二計画 佐野洋 180
第4の関係 佐野洋 200
脳波の誘い 佐野洋 200
貞操試験 佐野洋 220
未完の遺書 佐野洋 180
勝海舟の殺人 斎藤栄 200
古都殺人事件 斎藤栄 200
殺人の棋譜 斎藤栄 200
爆破都市 斎藤栄 260
競走馬空輸殺人事件 新橋遊吉 220